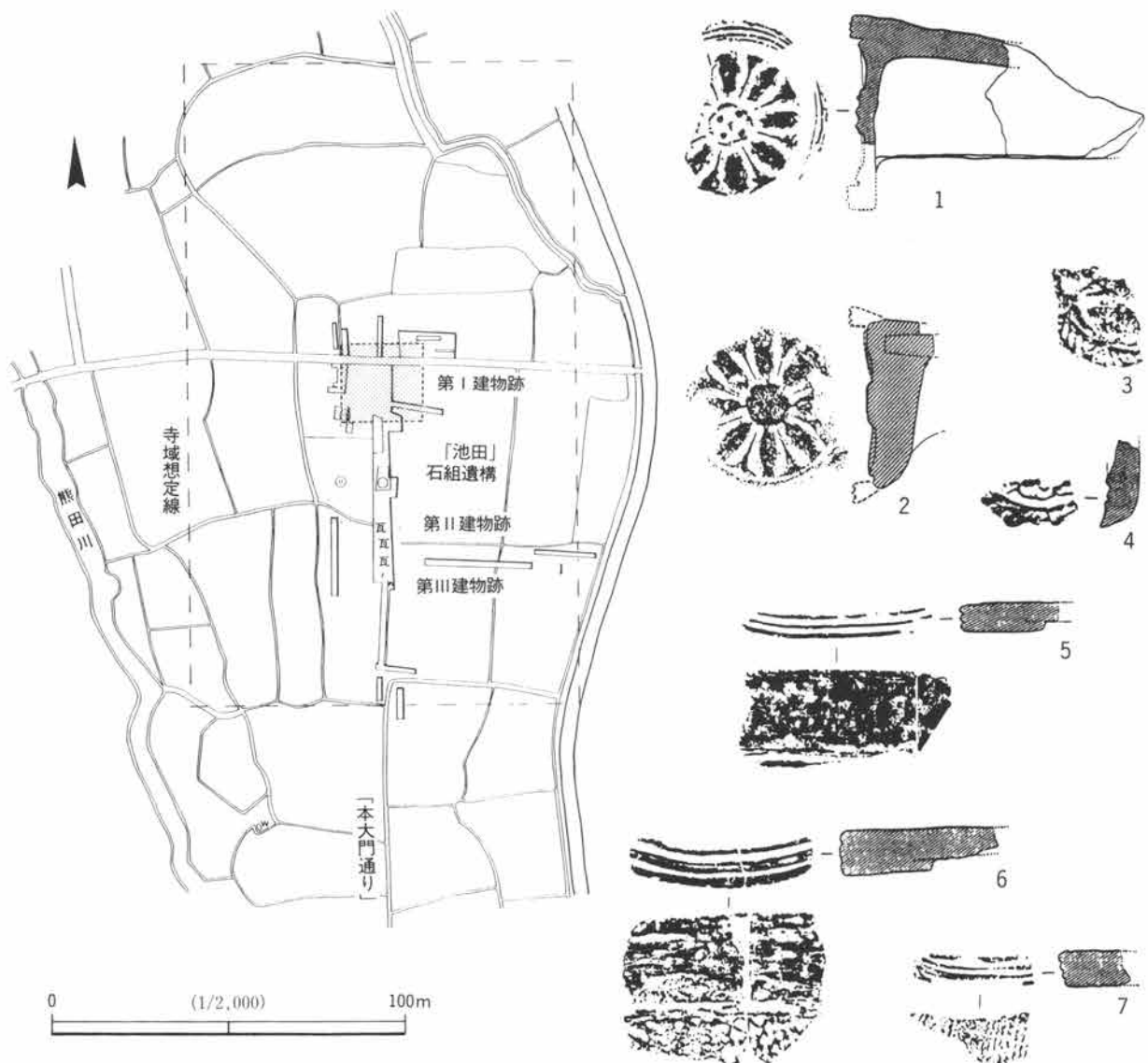


82 法興寺跡（岩熊廃寺跡）

夷隅郡岬町岩熊1555他

夷隅川支流の桑田川沿いの標高約15mの沖積地上に位置している。廃寺跡の東側丘陵上には、長祿5年(1461)銘の磬を所蔵した法興寺が位置している。廃寺跡の位置は法興寺住職の晋任式を執り行う場所で、「堂跡」「池田」「加持井戸」「御幣田」「本大門通り」などの地名が残されている。昭和48年度と昭和50年度に確認調査が行われ、南北に並ぶ3基の基壇建物跡と石組遺構など中世の寺院遺構が検出された。中世の基壇中とその下層から古代瓦が多く出土し、これらの下に古代の遺構が埋まっている可能性がある。

軒丸瓦は三重圏文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦(1、2)と鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(3、4)がある。前者はいわゆる印籠つぎで、丸瓦との接合箇所に沈線を施したものがある。後者は傾斜縁である。軒平瓦は三重弧文2種(5、6)と四重弧文1種(7)の計3種がある。前者には段顎で朱痕が残るものがある。後者は無顎で、凸面の瓦当面際まで縄叩きが施されている。丸瓦は無段式のみで、平瓦は桶巻作りの格子叩きと、凸型台一枚作りの縄叩きと花文叩きがある。

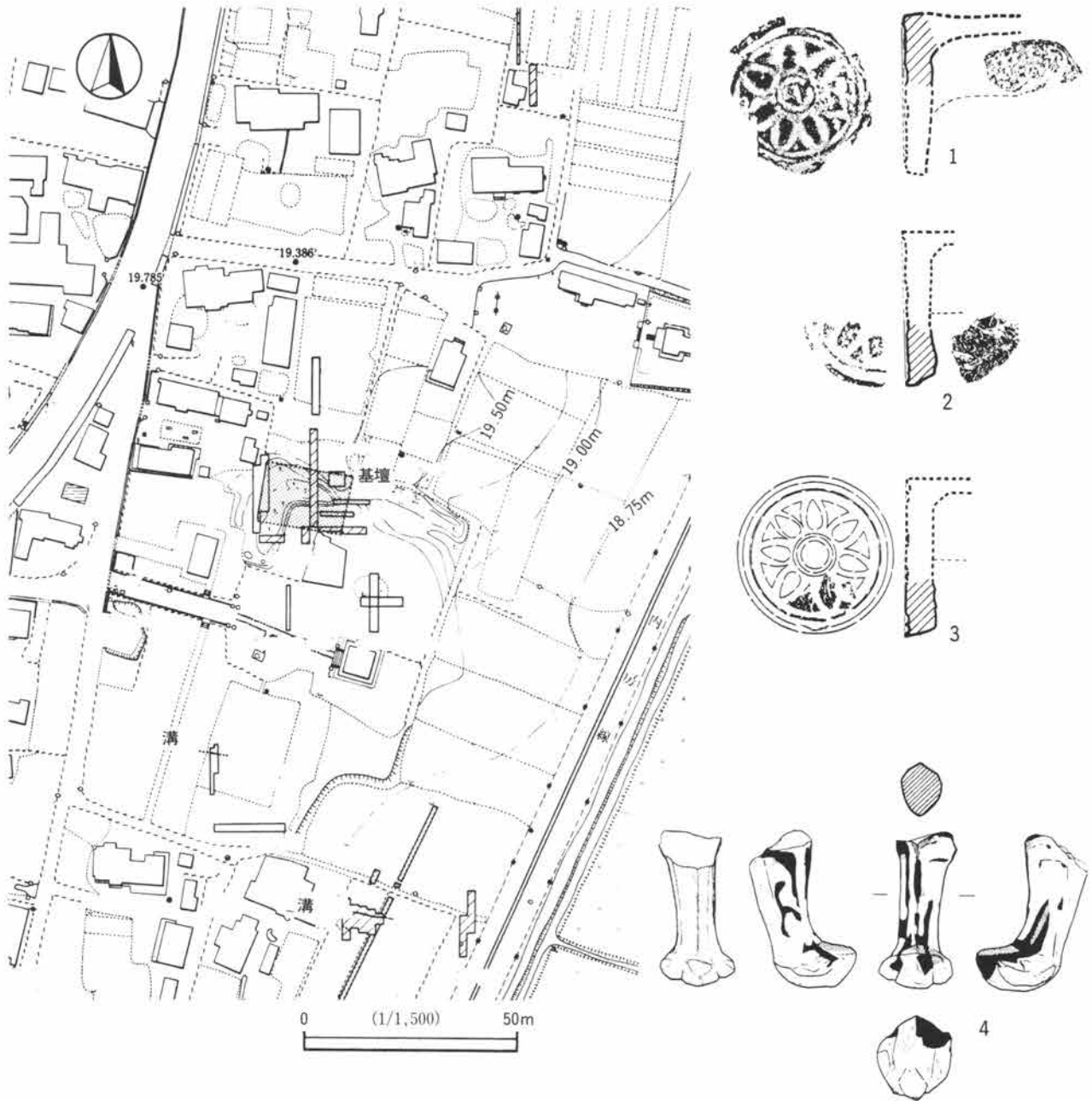


第41図 法興寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

84 安房国分寺

館山市国分959他

館山平野の南東部、標高19mの砂堤帯上に位置している。確認調査により基壇建物跡1基が発見された。東西約22m南北約15mの規模の掘込み地業が確認された。また、基壇建物跡から南約40mの位置で東西溝が1条確認され、寺院の区画に関わる可能性が指摘されている。瓦は基壇建物跡を中心に出土している。軒丸瓦は素縁素弁七葉蓮華文軒丸瓦1種で、瓦当面に布目痕があるものとなないもの(3)とがある。瓦当面に布目があるものには、さらに裏面にも布目があるもの(1)と布目をヘラケズリしたもの(2)がある。軒平瓦は出土していない。丸瓦は無段式で、凸面ナデ調整が施されている。平瓦は粘土板成形の凸型台1枚作りで、凸面縄叩きと格子叩きのものがある。また、基壇建物跡の西側から、廃棄された瓦片に混じって三彩の獣脚(4)が1点出土した。



第42図 安房国分寺遺構配置図・出土遺物 (1~3・1/6、4・1/2)

87 下総国分寺

市川市国分5丁目

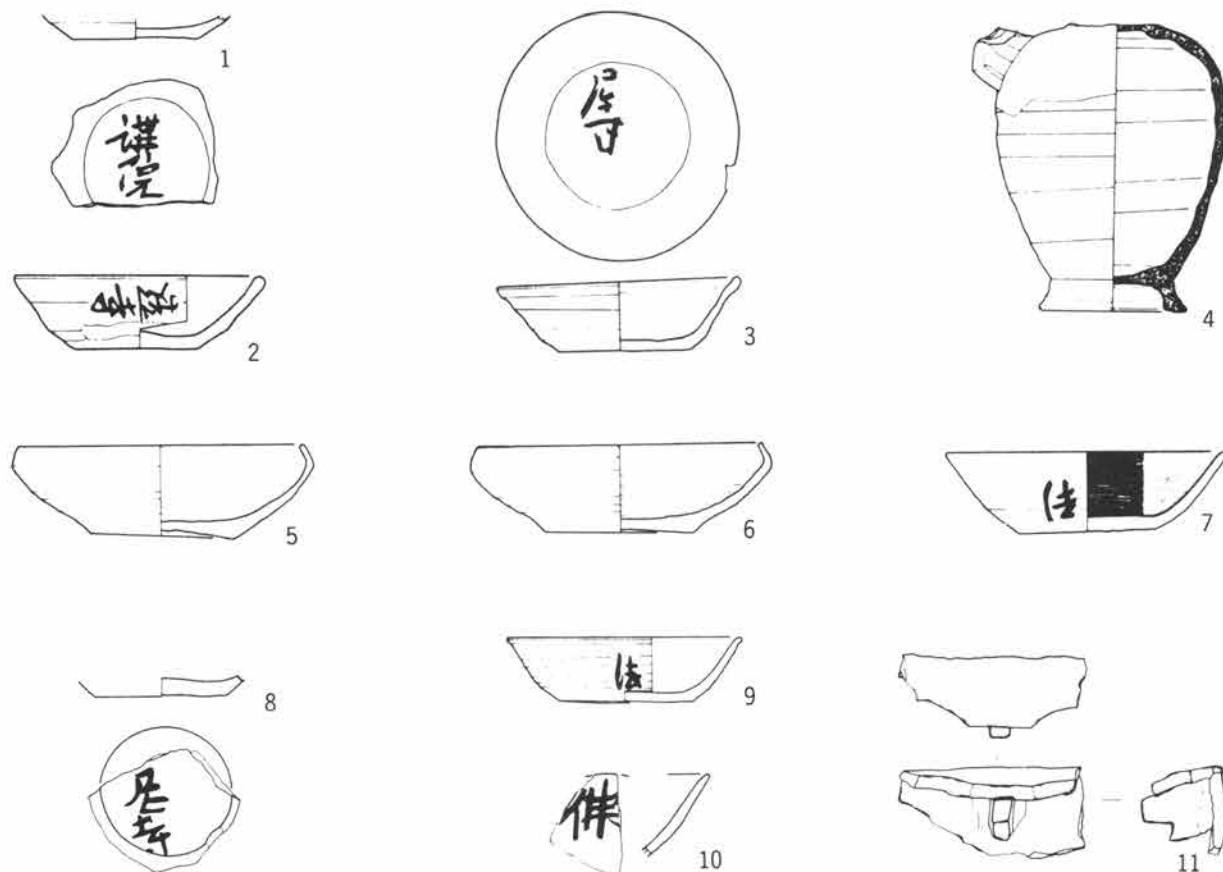
江戸川左岸の台地上に、東側に僧寺、西側に尼寺が並んで位置している。昭和41年と42年に市川市が伽藍中心を発掘調査し、金堂・講堂・塔の規模と配置が判明した。その後、市川市教育委員会による緊急調査や平成元年から5年にかけての範囲確認調査により、寺院地や付属施設の解明が進んでいる。

金堂が東に、塔が西に並び、その北に講堂が位置している。講堂の北からは掘立柱建物跡の僧坊が確認され、その北側と西側で溝の区画と、講堂との間の板塀跡が確認された。さらに寺院地の区画溝が、北・西辺と北西隅で確認された。北辺溝211m、西辺溝201mの範囲が確認されている。なお、寺院地の東と南は台地縁辺で、自然地形の区画と考えられている。寺院地内の伽藍北方からは営繕施設や下働きの人々が住んでいた区域などが発見されている。

88 下総国分尼寺跡

市川市国分3・4丁目

昭和42年と43年の市川市の中心伽藍の発掘調査で、金堂と講堂の規模が確認され、その後の市川市教育委員会による緊急調査や和洋学園国分分校地の発掘調査、さらに昭和57年から60年の範囲確認調査により、寺院地や付属施設の解明が進んでいる。中心伽藍は金堂と講堂が南北に並び、講堂の北側で掘立柱建物跡の尼坊が、そしてこれらを区画する溝と板塀、築地塀が確認された。さらに寺院地の区画溝が北・東・南辺と北東隅と南東隅で確認された。北辺溝324m、東辺溝303m、南辺溝53mの範囲が確認された。寺院地の西辺は台地縁辺に当たり、自然地形による区画と考えられている。

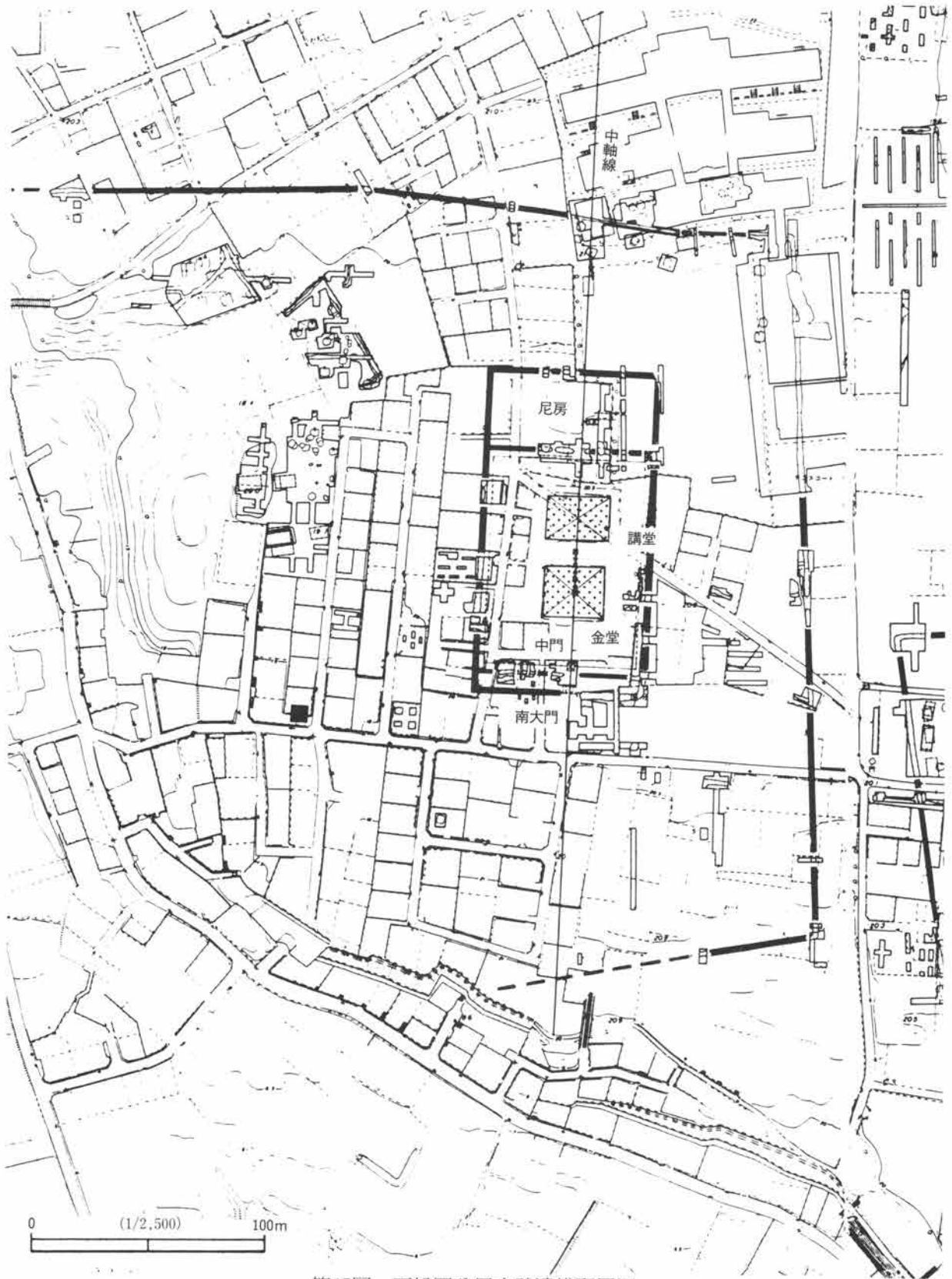


第43図 下総国分寺・尼寺跡出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

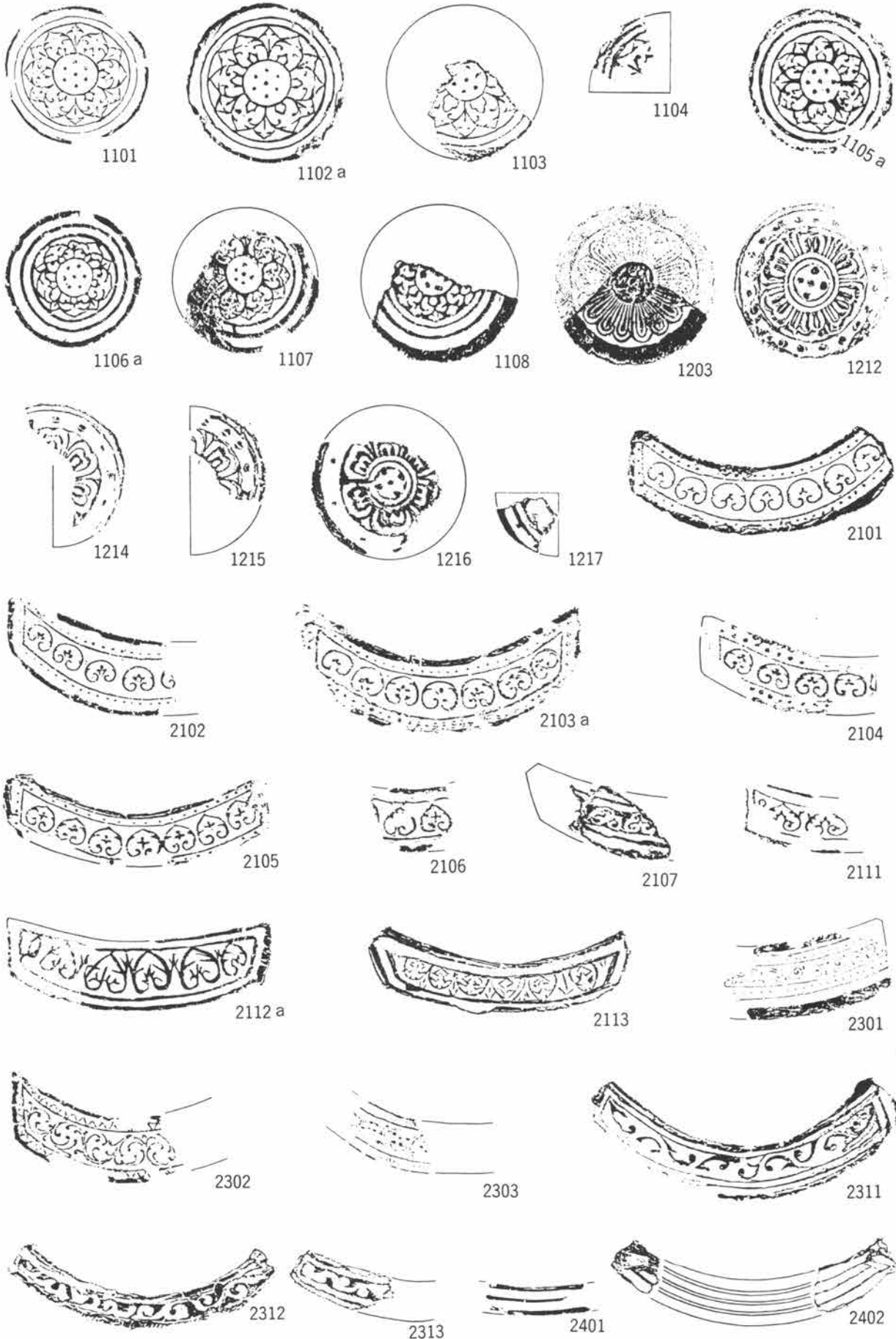


第44図 下総国分寺遺構配置図



第45図 下総国分尼寺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

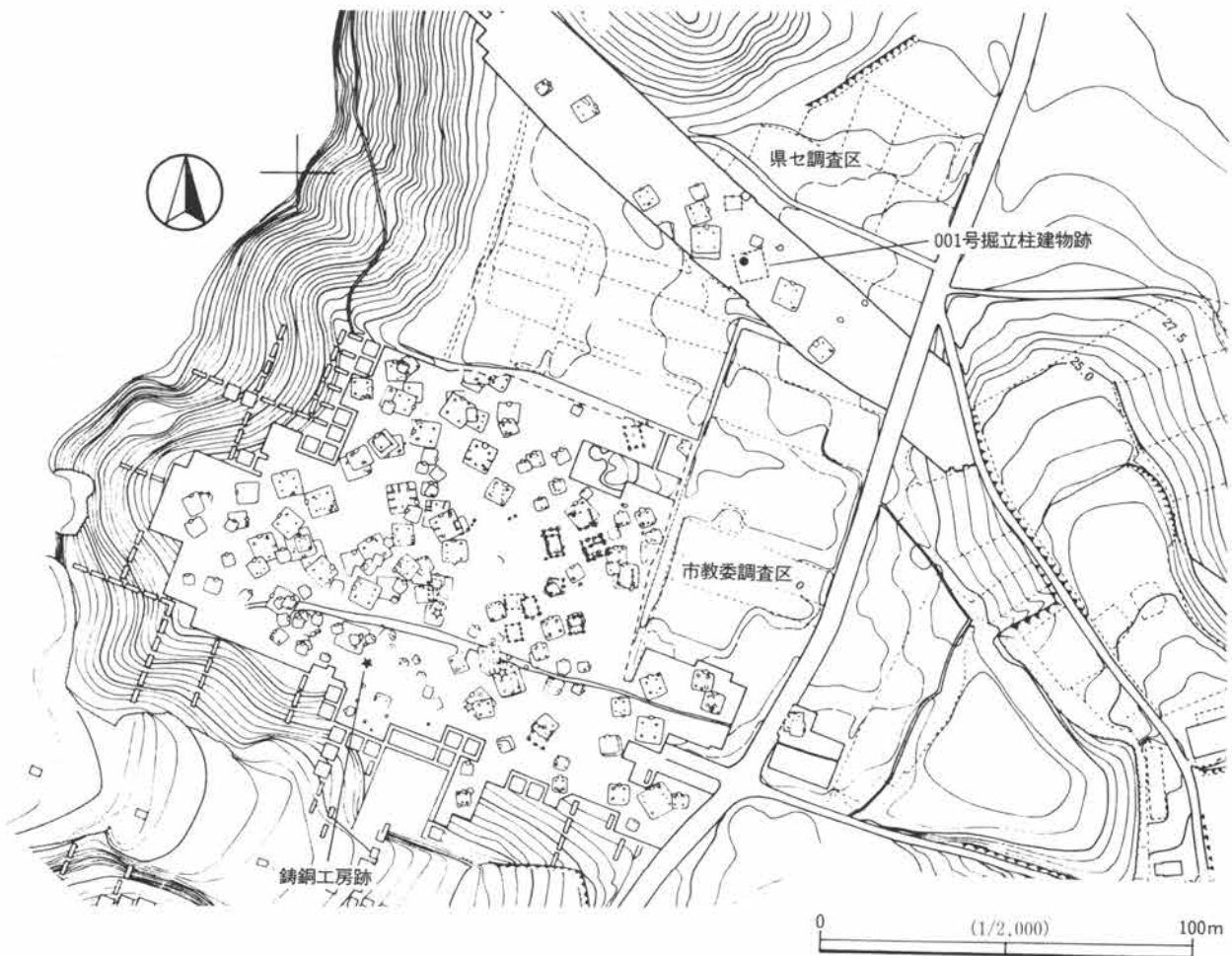


第46図 下総国分寺・尼寺跡出土瓦 (1/6)

102 谷津遺跡

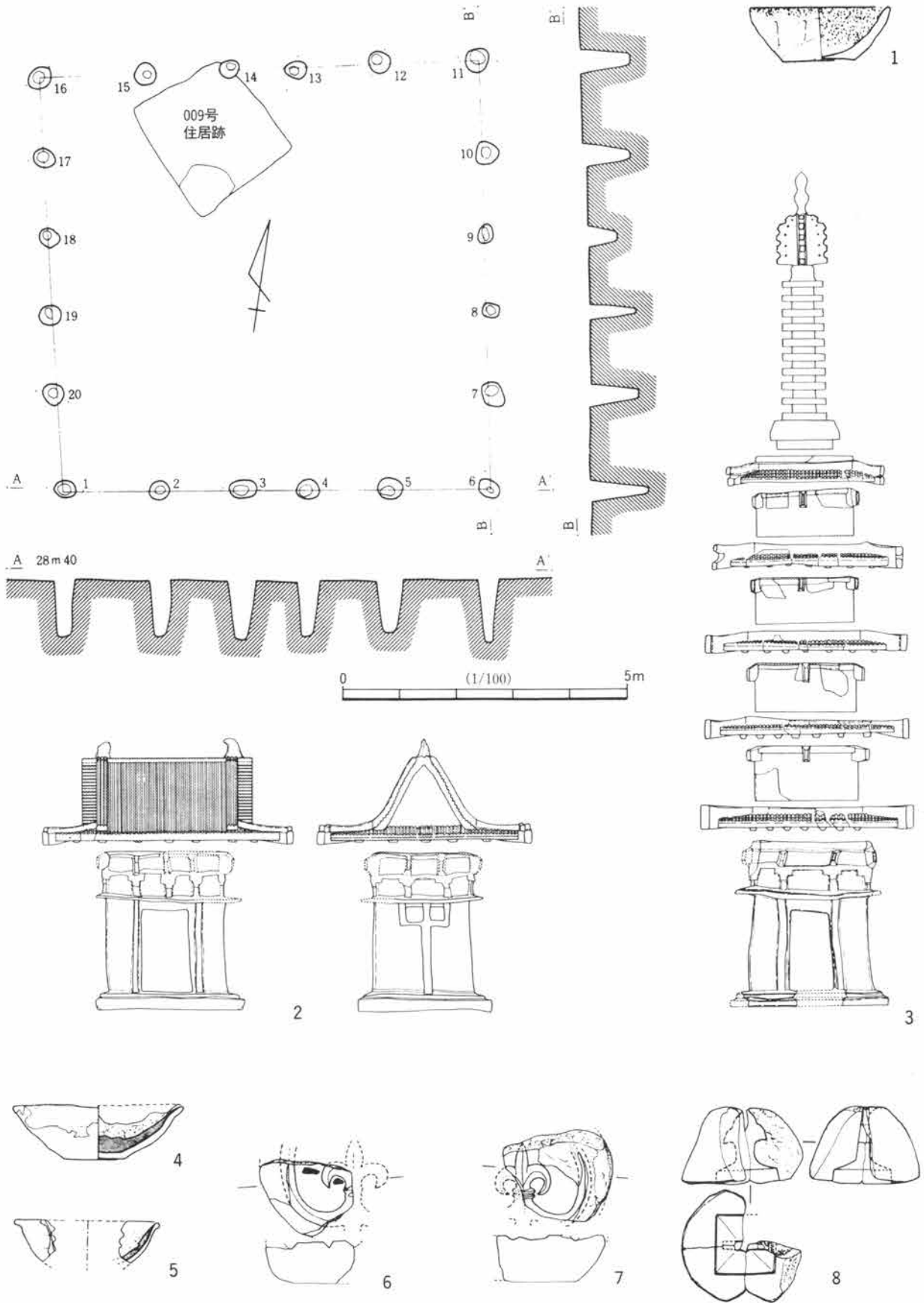
千葉市中央区花輪町340他

生実川に面した台地上に位置する。古墳時代後期から続く集落跡で、特に8世紀後半に竪穴住居跡が増加し、10世紀まで続いている。台地中央で発見された掘立柱建物跡群は同一軸方位のものが多く、すべて重複する竪穴住居跡を切って作られている。9世紀の竪穴住居跡はこれら掘立柱建物跡の周囲に分布するものが多い。県セ調査区の001号掘立柱建物跡は、これら台地中央の掘立柱建物跡群から離れているが、同様の軸方位である。この001号掘立柱建物跡周辺から、瓦塔と瓦堂（2、3）がまとまって出土した。瓦塔の基壇部分は、001号掘立柱建物跡の北東に接する001号竪穴住居跡の遺構検出面からまとまって出土した。001号竪穴住居跡は8世紀後半に想定される。その他の瓦塔片と瓦堂片は001号掘立柱建物跡の南側付近からまとまって出土した。瓦塔と瓦堂は001号掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。先行する009号竪穴住居跡（1）の年代観から、001号掘立柱建物跡は9世紀以降の可能性が高い。また、台地中央の掘立柱建物跡の軸方位の傾向性からはさらに年代が降る可能性がある。なお、001号掘立柱建物跡は方五間の平面規模に対して柱穴が小規模である点から、簡単な構造の瓦塔と瓦堂の覆屋と想定される。また、台地南西端から印鋳型や錫杖鋳型と鋳銅工房跡などが発見された（4～8）。鋳銅時期は埴塙として使用された土器類から10世紀ころと推測される。



第47図 谷津遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要



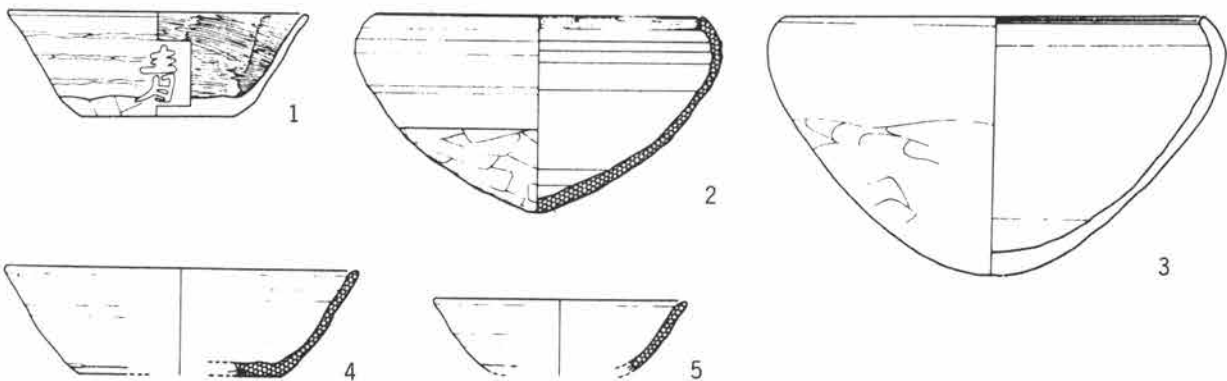
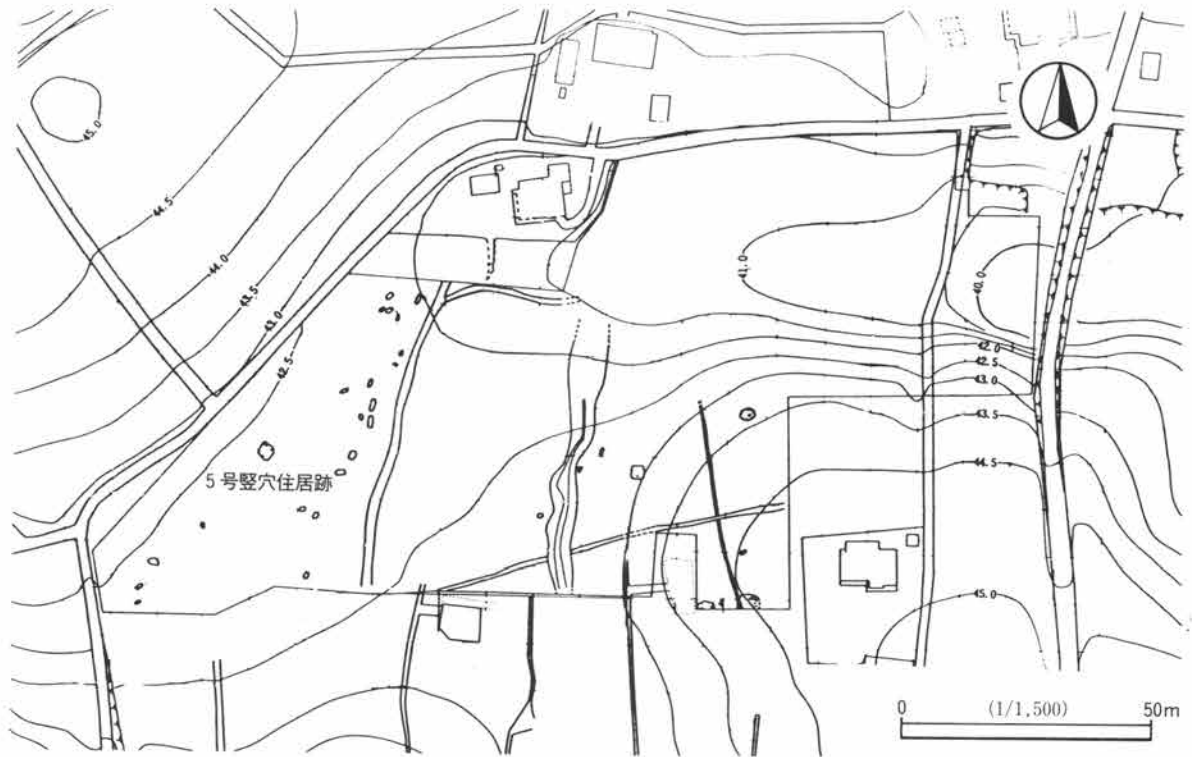
第48図 谷津遺跡001号掘立柱建物跡・出土遺物 (1/4、ただし2と3は1/6)



103 六通遺跡

千葉市緑区大金沢902-3 他

西と南は村田川に注ぐ支谷に、東は都川に注ぐ支谷に面する台地上に位置する。東から進入する谷津の谷頭部分の5号竪穴住居跡(1~5)から須恵器鉄鉢形土器と土師器鉄鉢形土器が出土した。土師器鉄鉢形土器は住居跡隅部の床面から発見された。なお、須恵器鉄鉢形土器の内面に赤色顔料の付着が残されている。このほか墨書土器「青」や、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・甌・刀子・砥石等が発見された。ほかに調査区内からは2軒の竪穴住居跡が発見されている。



第49図 六通遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

## II 主要遺跡概要

### 110 長熊廃寺跡

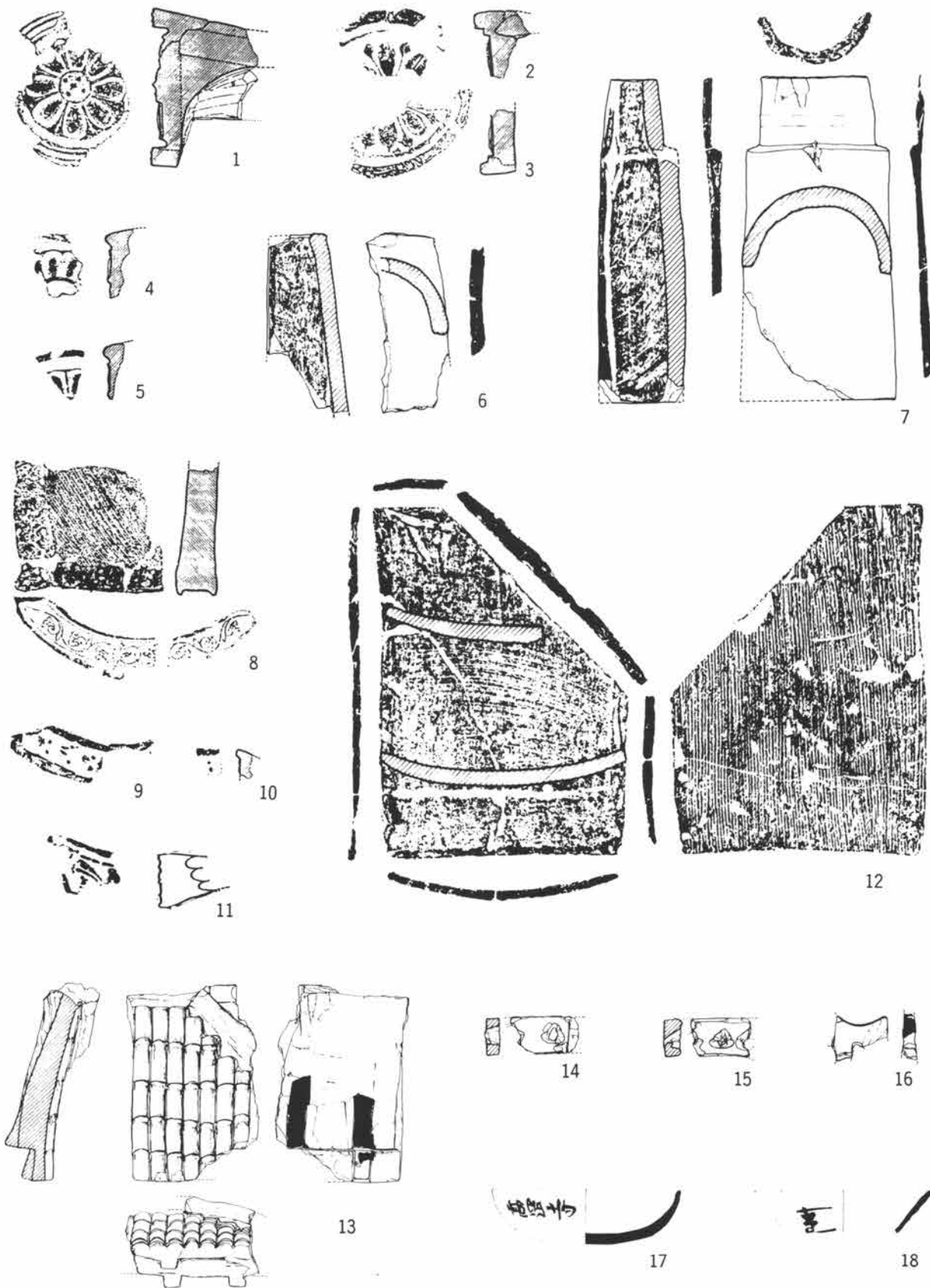
佐倉市長熊260他

鹿島川の支流高崎川の支谷に面した台地上に位置している。昭和20年代後半から30年代にかけて立正大学を中心に発掘調査が行われた。その後昭和60年に(財)千葉県文化財センターにより確認調査が実施され、基壇1基、土坑5基、溝5条などが確認された。基壇は掘込み地業で、南北9.4m、東西12.6mの規模が確認された。昭和20・30年代の調査では塔・講堂・中門・南大門・回廊等の存在も推定されたが、これらは基壇建物跡としては存在しない可能性が高い。このほか、周辺から瓦を出土する竪穴住居跡も確認された。

出土軒丸瓦は3種で、三重圈文縁単弁八葉蓮華文(1)と素縁単弁八葉蓮華文(2)、常陸国分寺系(4、5)がある。軒平瓦は均整唐草文(8)と並行連珠文(9、10)、唐草文(11)の3種がある。並行珠文軒平瓦は常陸国九重廃寺跡と下大島遺跡の出土瓦と同文で、唐草文軒平瓦は結城廃寺跡出土瓦と同系である。丸瓦は有段式(7)と無段式(6)の2種がある。平瓦は凸面に縄叩きを施すものと、ヘラ調整を施すものの2種であるが、いずれも凸型台1枚作りである。このほか隅切瓦(12)や墨書土器「高叢寺」(17)、瓦塔(13~16)が出土した。墨書土器「高叢寺」は8世紀第3四半期の杯で、このほか須恵器は8世紀第2四半期後半から8世紀第3四半期以降のものが出土した。



第50図 長熊廃寺跡遺構配置図



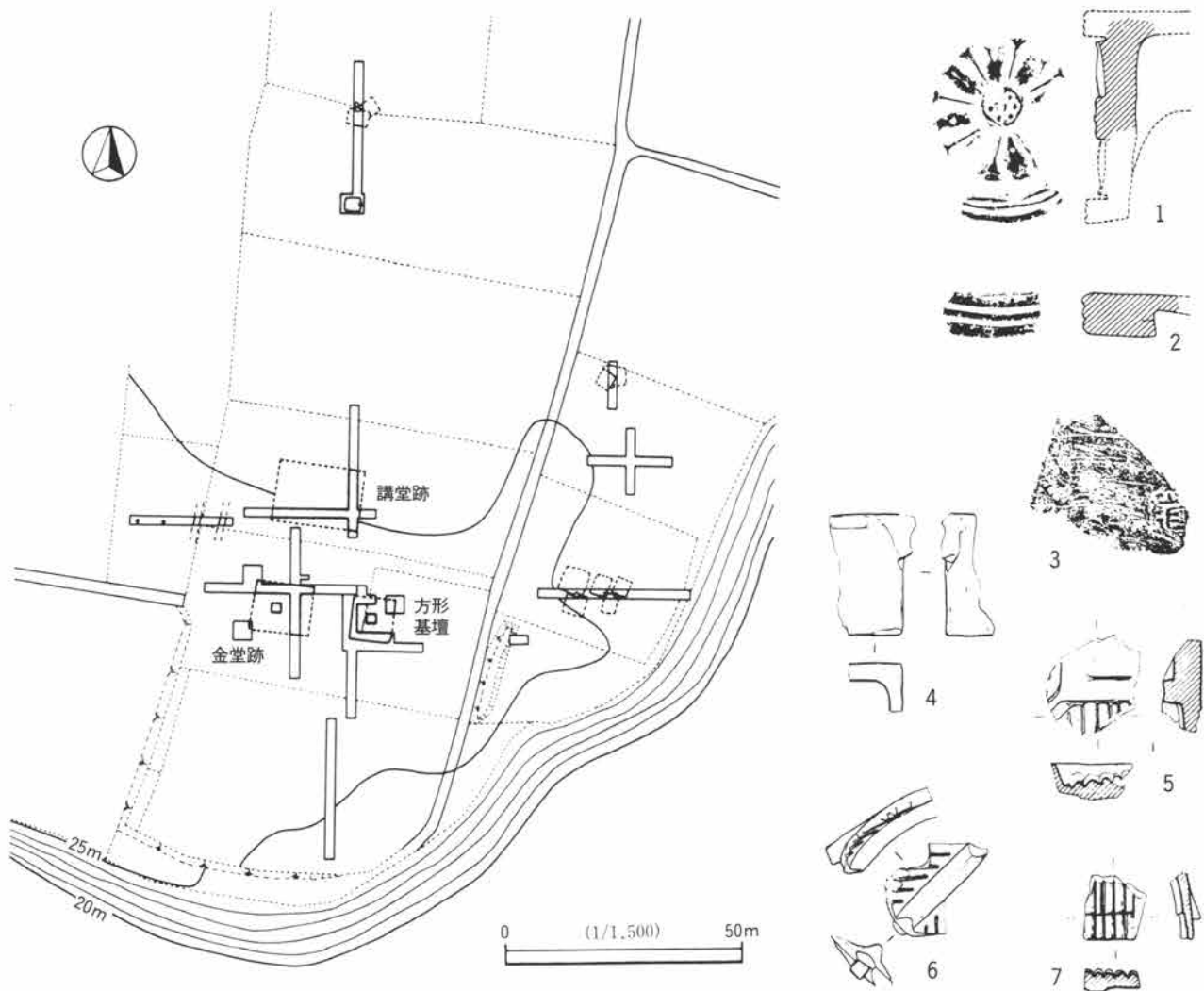
第51図 長熊廃寺跡出土遺物 (1~12・ $\frac{1}{6}$ 、13~18・ $\frac{1}{4}$ )

111 木下別所廃寺跡

印西市別所876-1他

手賀沼に注ぐ亀成川に面した台地上に位置している。約800m北西には創建期瓦を焼成した曾谷ノ窪瓦窯跡が所在している。廃寺跡は昭和52年と53年に早稲田大学考古学研究室によって発掘調査が実施され、基壇建物跡3基と竪穴住居跡9軒が確認された。金堂基壇は旧表土上に地業をし、東西約13m、南北約10mの規模が確認された。塔と想定される東側の方形基壇は掘込み地業で、一辺8.7mの規模が確認された。金堂の北約15mの講堂基壇は掘込み地業で東西18.6m、南北13.5mの規模が確認された。ただし、いずれも建物痕跡は発見されていない。なお、方形基壇の周囲約10m内から瓦塔片(4~7)が発見され、方形基壇に瓦塔が設置された可能性が指摘されている。このほか、伽藍の東側と北側で竪穴住居跡群が、西側で南北溝と掘立柱跡等が発見された。

出土軒瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文(1)と三重弧文軒平瓦(2)がある。軒丸瓦の中房には1+6の蓮子が配置されているが、中央の蓮子が周辺の蓮子よりも大きい特徴を有している。また、接合する丸瓦の端部を凹凸両面から削って端部を尖らせ、接合部に刻みを入れたものがある。軒平瓦は段顎である。丸瓦は無段式と有段式の2種が、平瓦は桶巻作り平瓦と凸型台一枚作り平瓦、凸面布目平瓦がある。また、凸面に「道」のスタンプを押捺した文字瓦(3)がある。



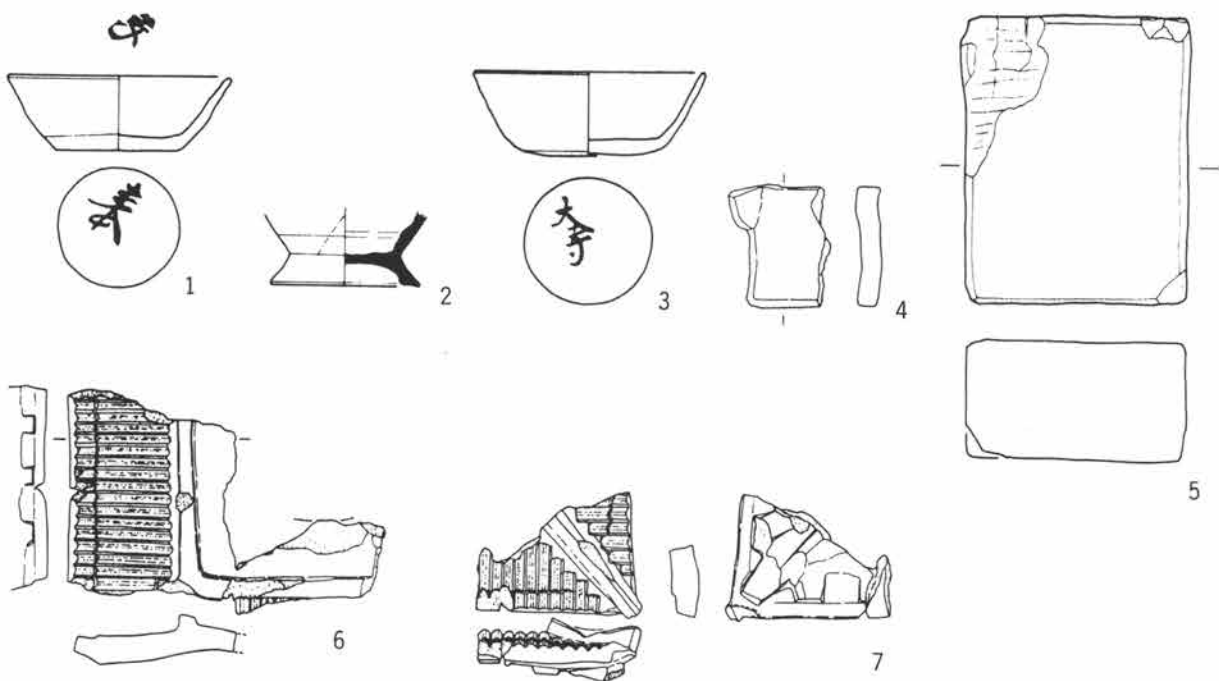
第52図 木下別所廃寺跡遺構配置図・出土遺物 (1~3・ $\frac{1}{6}$ 、4~7・ $\frac{1}{4}$ )

112 白幡前遺跡

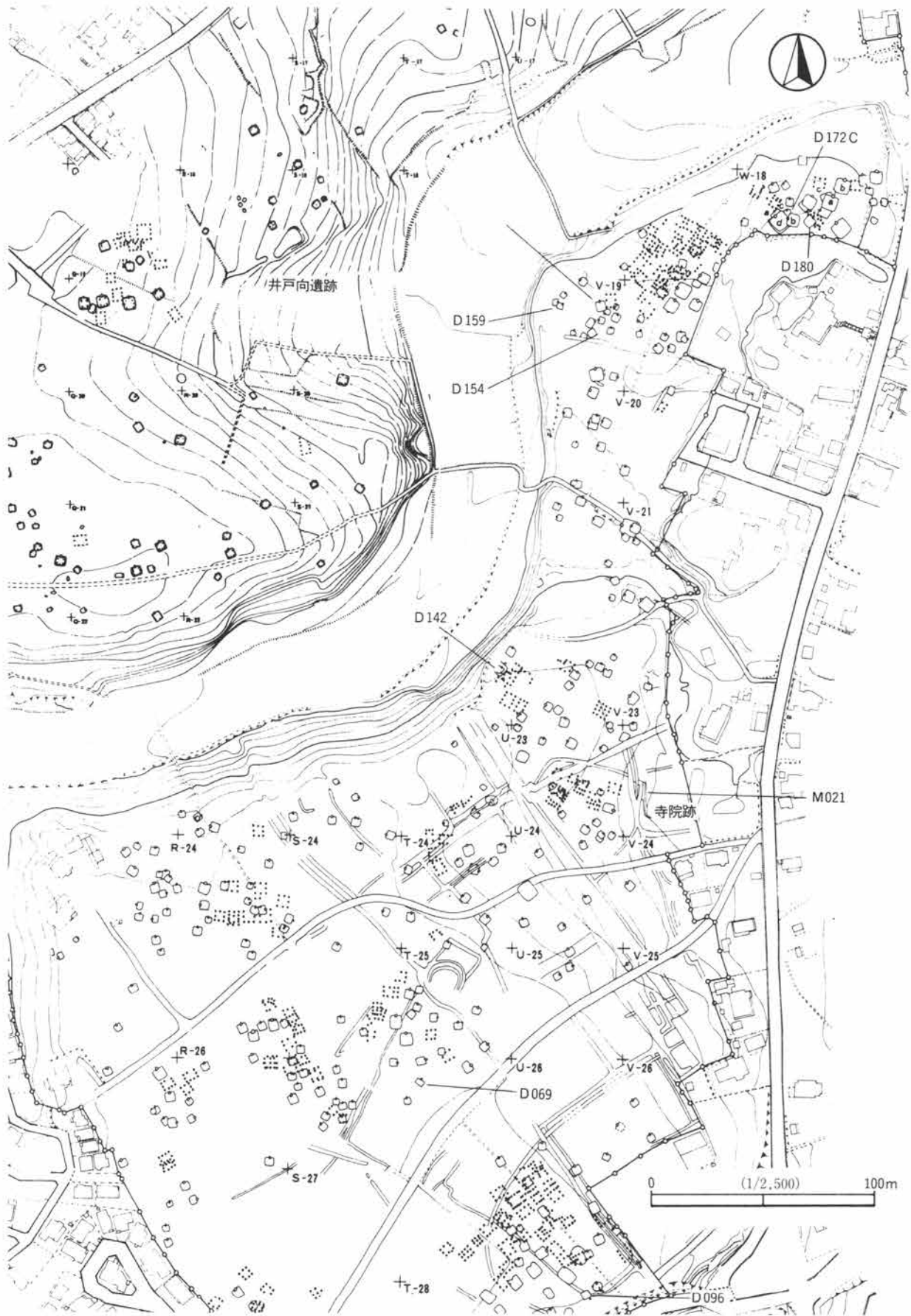
八千代市萱田字白幡前・庚塚・堂ノ後・池の台

新川に注ぐ小支谷に挟まれた台地上に位置する。溝で区画された寺院跡は、調査区のほぼ中央から発見された。区画内からは、西側に三間四面の掘立柱建物跡、北側に側柱建物跡群、南側等に竪穴住居跡群が発見された。溝M034等から瓦塔と瓦堂（8～10）が、そして竪穴住居跡D128・D126（11）・D124等からも漆喰と赤彩された瓦塔が発見された。竪穴住居跡D124からはほかに、体部外面に「佛」と墨書された土師器鉢形土器と須恵器蓋（14、15）が、竪穴住居跡D126からは浄瓶（17）と須恵器盤などが、竪穴住居跡D128からは硯に転用された土師器盤なども出土した。また、区画外北側の竪穴住居跡D142から土師器鉢形土器（18）が出土した。

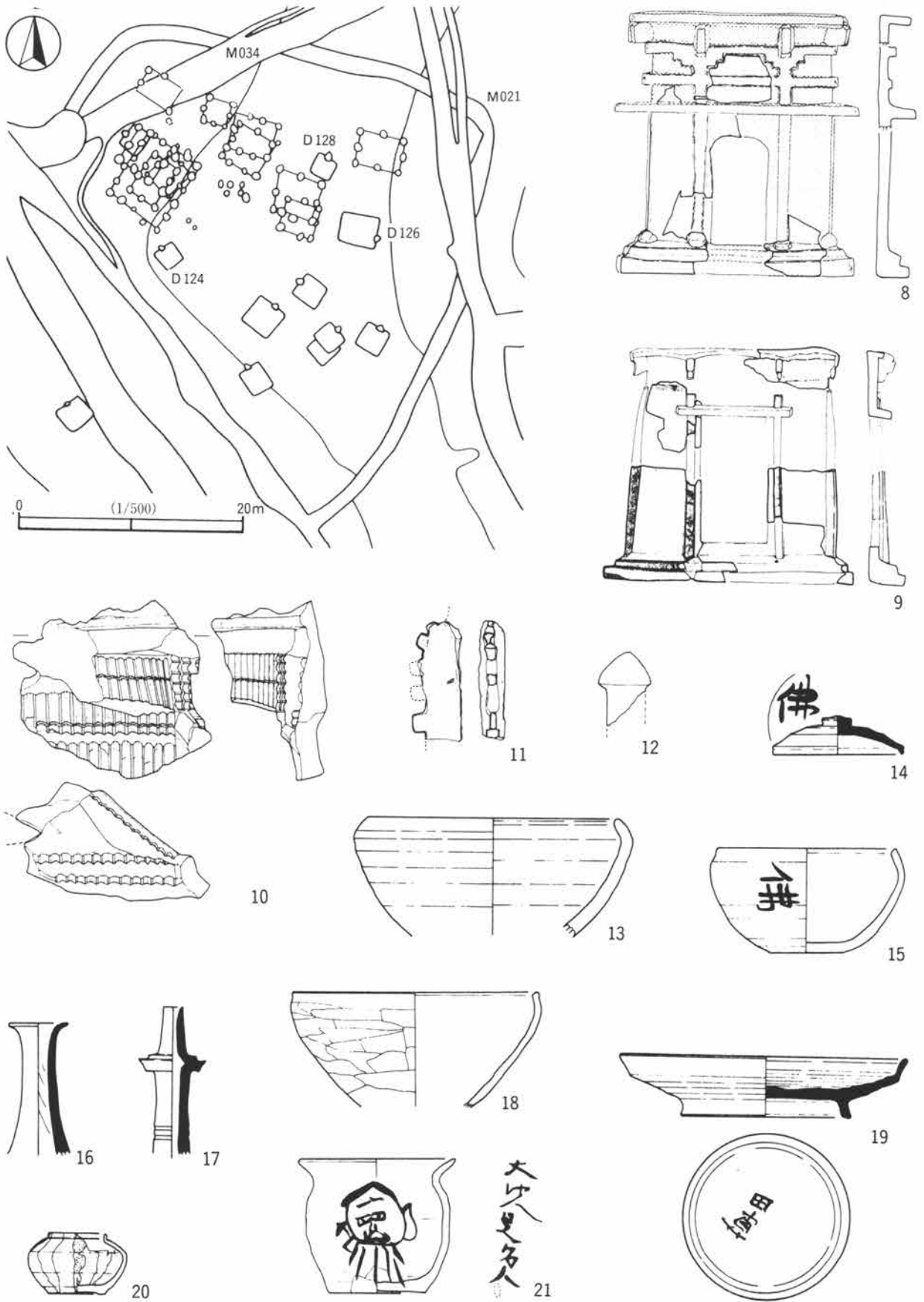
このほか、方形区画の約200m北側に位置する竪穴住居跡D154（6）・D159（4、7）などの覆土中からも瓦塔がまとめて出土した。方形区画内の寺院跡とは別に瓦塔を設置していたと考えられる。隣接する竪穴住居跡D183からは墨書土器「大寺」（3）が出土している。その瓦塔出土地の約100m東に位置する竪穴住居跡D180から墨書土器「寺／奉」（1）と水瓶の可能性がある須恵器（2）が、竪穴住居跡D172Cからは温石の可能性が指摘されている石製品（5）が出土した。さらに方形区画の南側の台地上からも竪穴住居跡D069から土師器鉢形土器（13）が、竪穴住居跡D096から水瓶（16）などが分散して発見された。このように白幡前遺跡では調査区の広い範囲から仏教遺物が発見され、特に方形区画の寺院跡内に集中が認められる。



第53図 白幡前遺跡出土遺物 1（1/4）



第54図 白幡前遺跡遺構配置図1



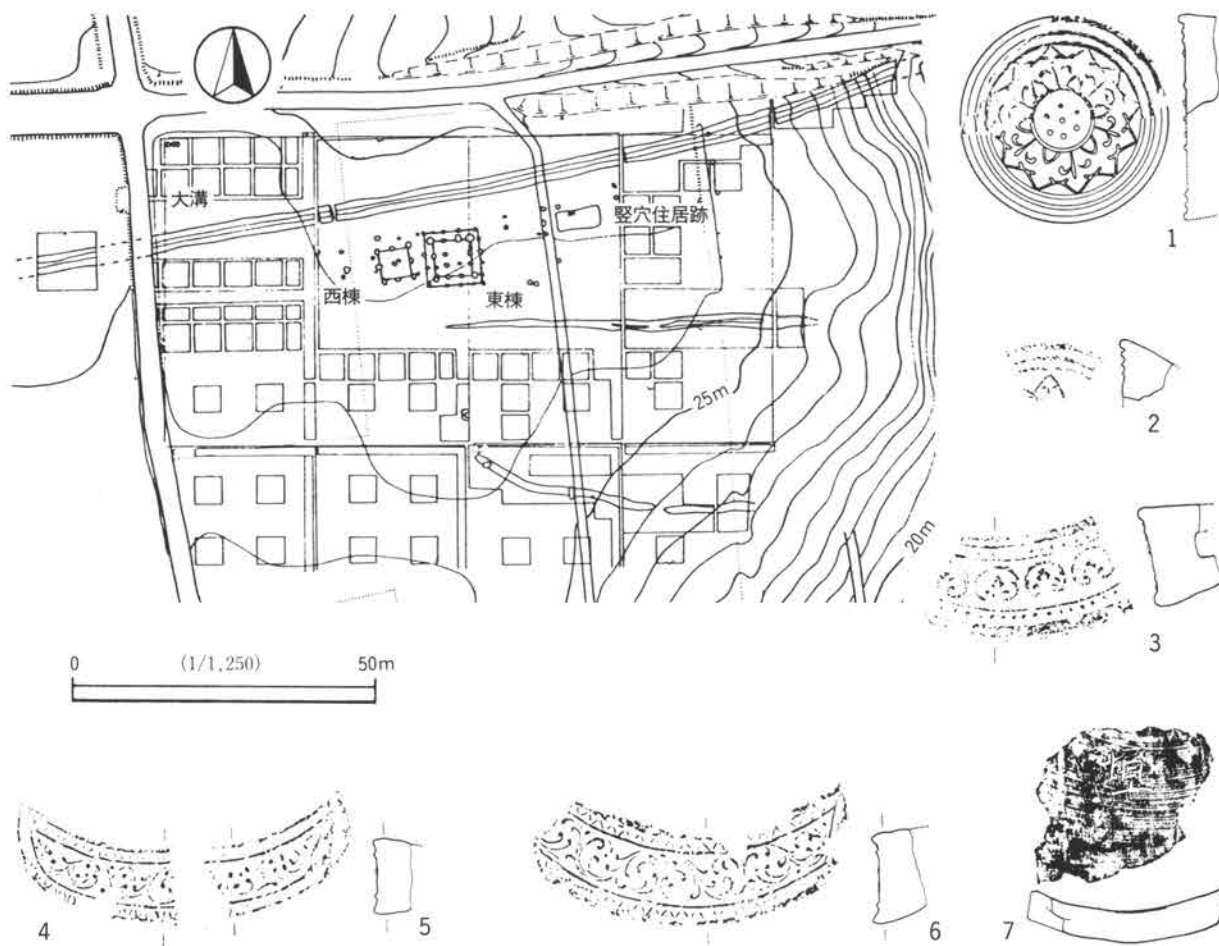
第55図 白幡前遺跡遺構配置図2・出土遺物2 (1/4)

113 大塚前遺跡

印西市小倉字小倉1丁目（浦幡新田大塚前592）

印旛沼に注ぐ神崎川の支流戸神川の上流域で、手賀沼に注ぐ亀成川支流の和泉川との分水界の標高約25mの台地上に位置している。昭和47年に（財）千葉県都市公社が発掘調査を実施し、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒と溝状遺構が発見された。3棟の建物跡はほぼ東西に並立して発見され、中央から三間四面建物の東棟が、西から方二間の総柱建物跡の西棟が、東から東西に細長い竪穴住居跡が発見された。これら掘立柱建物跡の北側で並行して走る大溝の覆土上層を中心に多くの瓦が出土した。今泉潔氏により東棟が葺棟葺き建物跡に復原されている。

出土軒丸瓦は六弁宝相華文2種(1、2)で、1は下総国分寺出土瓦と同範である。軒平瓦は均整唐草文2種(4~6)と宝相華文1種(3)で、6は下総国分寺出土瓦と同範で、4・5は同文である。丸瓦は無段式のみで、平瓦は粘土板桶巻作りで縄叩きしたものである。このほか、多くの熨斗瓦と文字瓦「埴」(7)が出土した。



第56図 大塚前遺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)



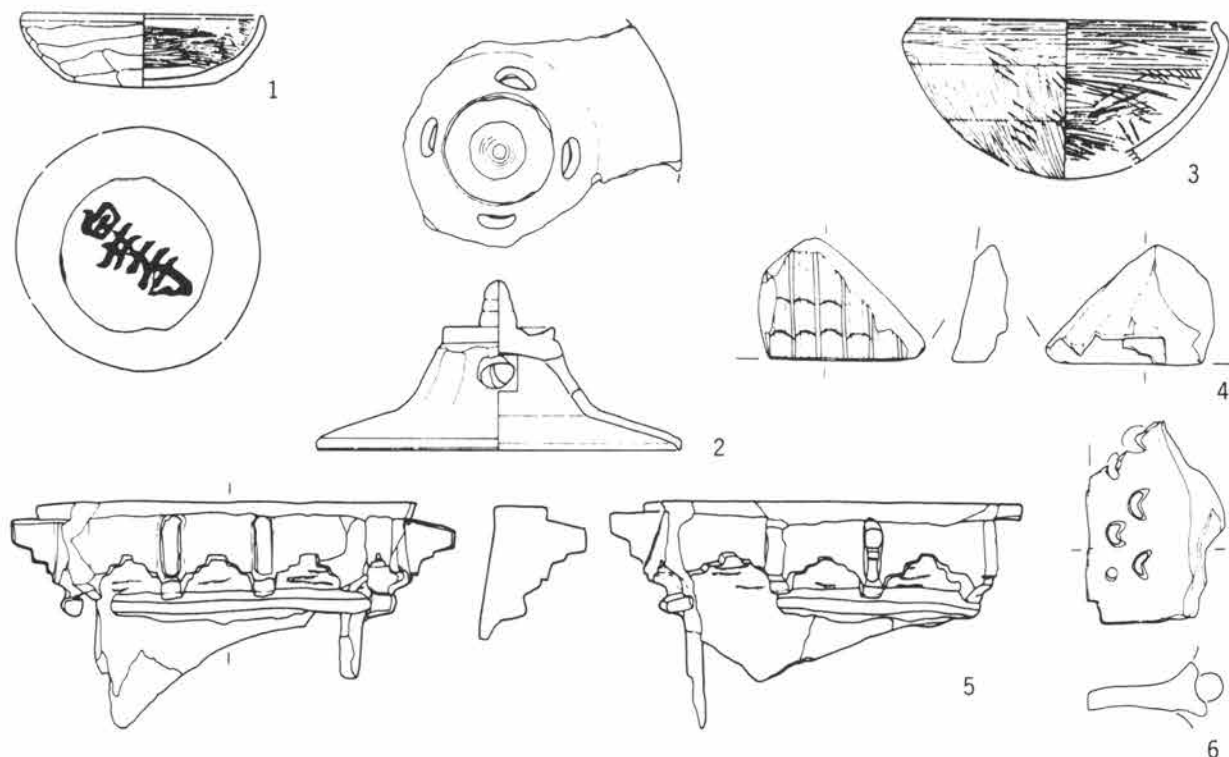
114 六拾部遺跡

佐倉市大作2丁目

高崎川の支流に面した台地端部に位置する。複数の瓦塔が出土し、8世紀後半から9世紀前半・9世紀中葉と継続的に、仏堂が移動して営まれた状況が想定されている。六拾部遺跡Ⅲ期（8世紀第3四半期後半～8世紀末）は斜面中腹の土坑067から瓦塔（5）が、台地端部の土坑074から墨書土器「白井寺」（1）が出土した。土坑067が瓦塔の覆屋に伴う遺構と考えられている。

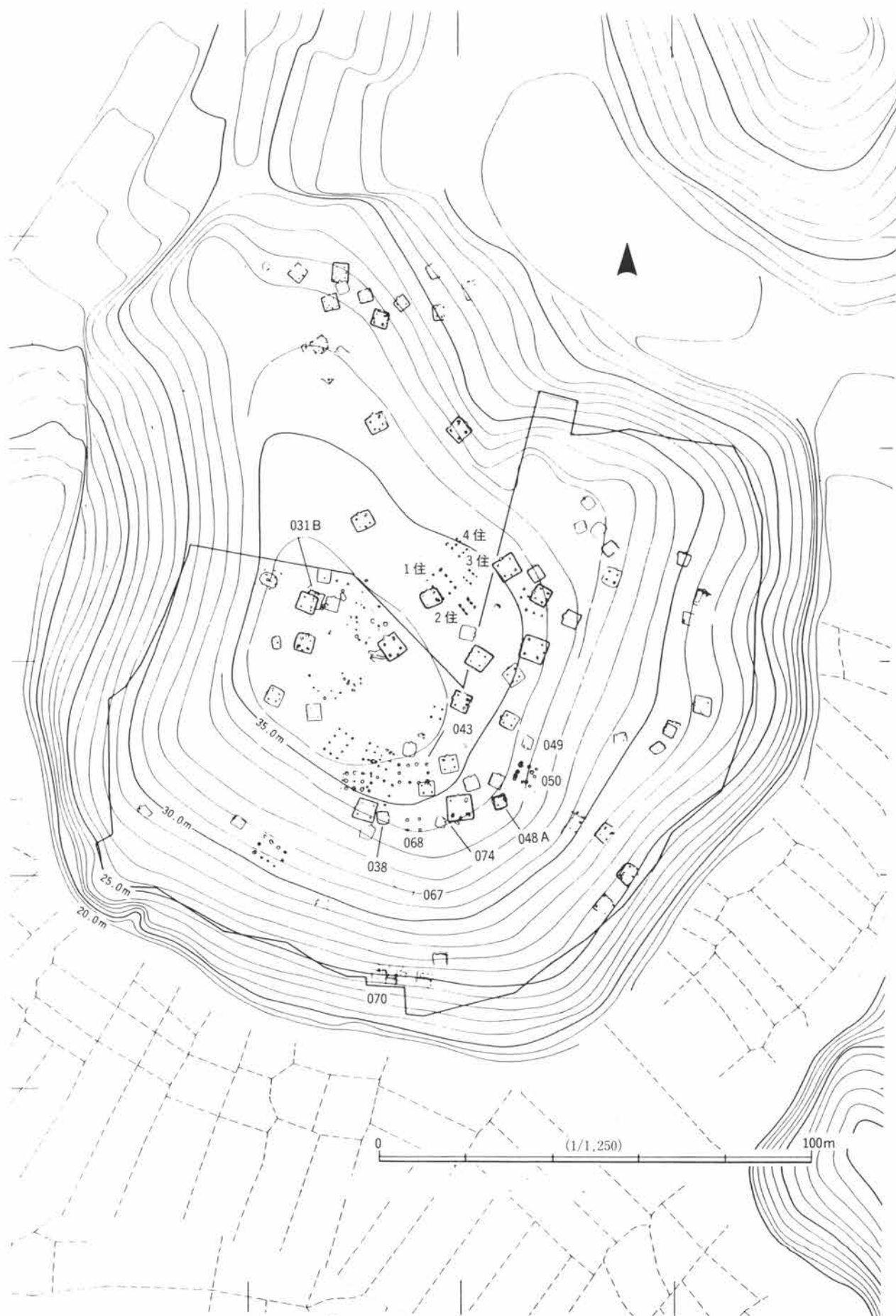
六拾部遺跡Ⅳ期（9世紀第1四半期～第2四半期の一部）は、Ⅲ期の土坑074に近接した掘立柱建物跡068とその北東25m離れた掘立柱建物跡050Bを中心に仏教関連遺物が出土する。両者とも方一間の小規模な建物跡で、仏堂としての機能が考えられている。掘立柱建物跡068の西側に接する竪穴住居跡038から香炉蓋（2）が、掘立柱建物跡068の斜面下の竪穴住居跡070から瓦塔片（4）が出土した。また、掘立柱建物跡050Bの北側に接する竪穴住居跡049からは土師器鉄鉢形土器（3）が発見された。

六拾部遺跡Ⅴ期（9世紀第2四半期後半～第3四半期）は掘立柱建物跡050Aと台地中央部の竪穴住居跡031Bを中心に仏教関連遺物が出土する。掘立柱建物跡050Aは、Ⅳ期の掘立柱建物跡050Bを一回り大きく方二間に建替えている。この掘立柱建物跡050Aの南西に隣接する竪穴住居跡048Aから脚付香炉（12）が出土した。また、竪穴住居跡031Bからは瓦塔、香炉蓋・脚付香炉・小壺などが出土した（7～11、13～15）。



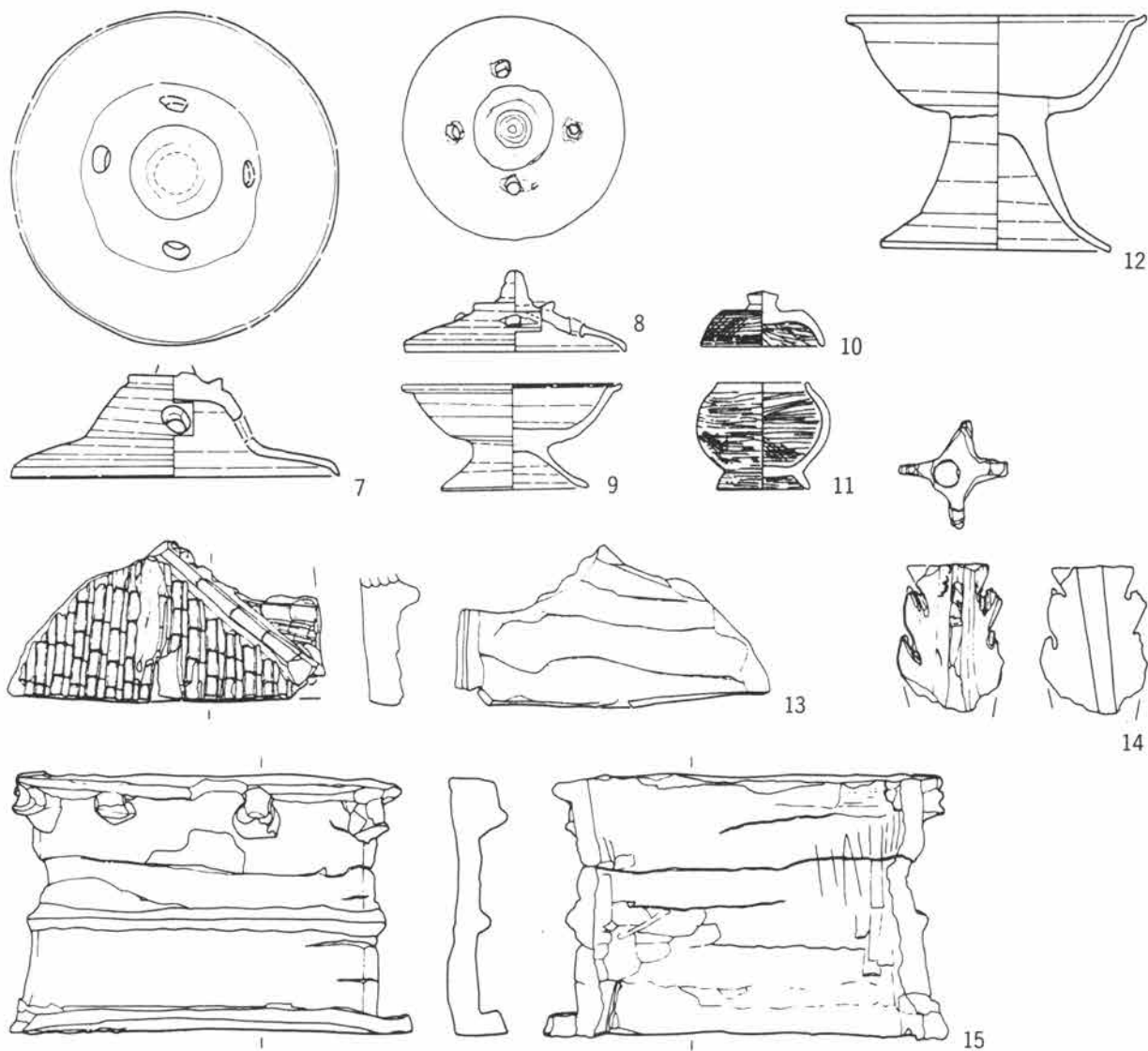
第57図 六拾部遺跡出土遺物1（1/4）

II 主要遺跡概要



第58図 六拾部遺跡遺構配置図

このように複数の時期にわたって、仏堂と想定される遺構と仏教関連遺物がセットとして発見されている。瓦塔を中心とした堂が継続的に営まれたと考えられる。なお、六捨部遺跡の仏堂と関連施設は、南側と南東側の台地端部を中心に展開している。南や南東方向に展開する同時代の集落跡や墓域を意識した占地在り窺える。



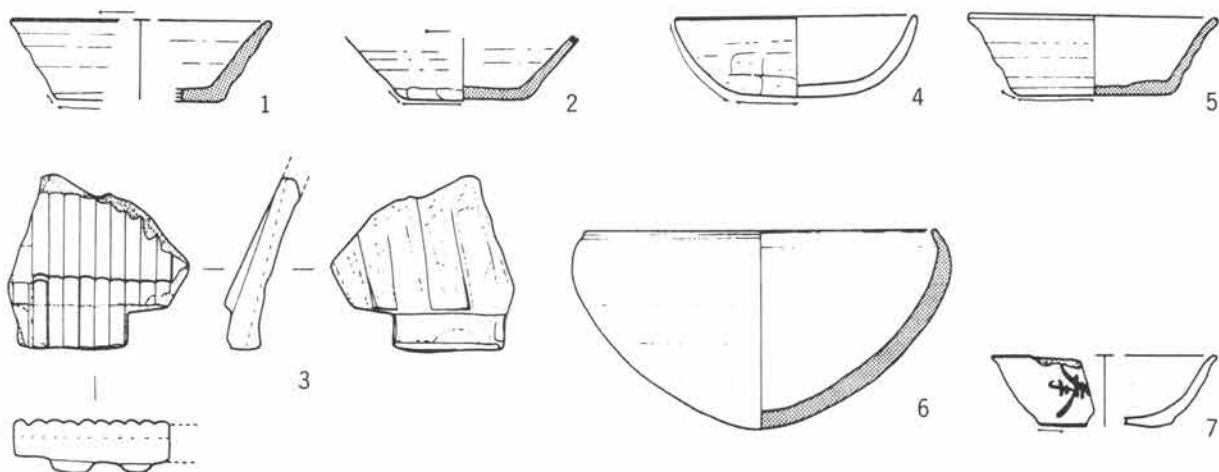
第59図 六捨部遺跡出土遺物2 (1/4)

II 主要遺跡概要

115 村上込の内遺跡

八千代市村上字込の内

新川に注ぐ谷津に面した台地上に位置する。調査区南端から掘立柱建物跡がやや多く発見され、また台地縁辺部を中心に多くの竪穴住居跡が発見された。これら建物跡群からやや離れた台地北東端の003土坑(1～3)から瓦塔片が1点発見された。003土坑は直径約3m、深さ0.26mで、底面は平坦である。また、瓦塔出土地からやや離れた033号竪穴住居跡(4～6)から須恵器鉄鉢形土器が、038号竪穴住居跡から墨書土器「奉」(7)が出土した。



第60図 村上込の内遺跡遺構配置図・出土遺物(4)

118 江原台遺跡

佐倉市白井田字江原台500他

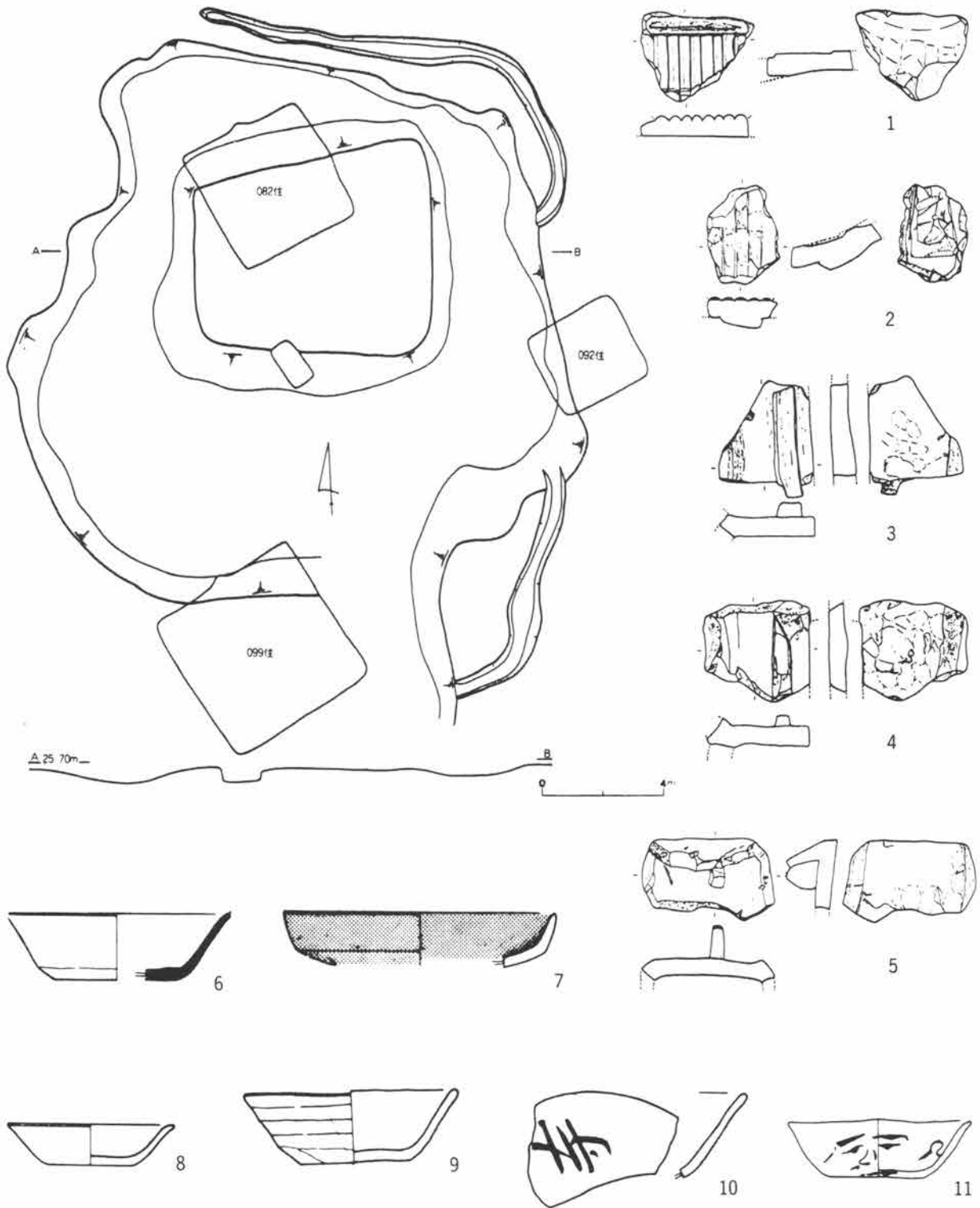
印旛沼に面した台地北端に位置する。調査区南側は掘立柱建物跡群がやや集中して発見されたが、北側の建物跡分布は散漫である。調査区北側の掘立柱建物跡は、周溝状遺構南西の1間×2間の22号掘立柱建物跡のみである。14点の瓦塔片は周溝状遺構の南側周溝付近から、まとめて発見された。周溝状遺構全体の形状は不整形形で、長軸約9.6m、短軸約9.0mを測る。南側周溝はやや幅広い。それに対して、中央の掘り残し部分は、比較的方形を呈している。出土土器類は時期幅をもっているが、瓦塔片がまとめて



第61図 江原台遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

出土している点から、周溝状遺構は瓦塔に伴う区画施設の可能性がある(1~8)。このほか、周溝状遺構北約45mの061号竪穴住居跡(9、10)から体部外面に横位に「寺」と墨書されたロクロ土師器杯が出土している。なお061号竪穴住居跡のカマド内等から土製白玉が34点出土している。また、144号竪穴住居跡からは人面墨書土器が出土した(11)。

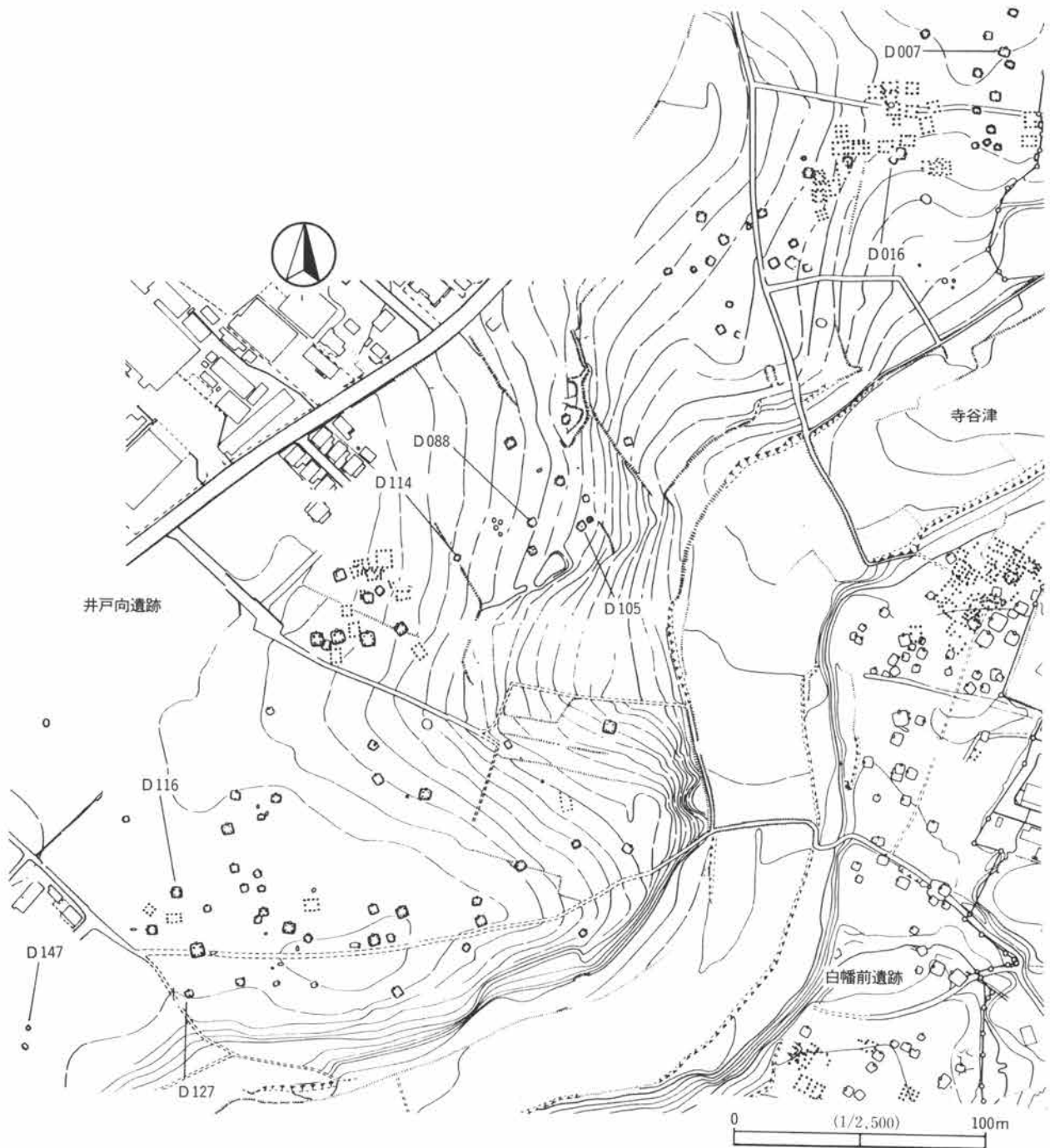


第62図 江原台遺跡周溝状遺構・出土遺物(1/4)

123 井戸向遺跡

八千代市萱田字井戸向1531他

新川に注ぐ谷津に面した台地南端に位置する。墨書土器「勝光寺」が出土した北海道遺跡が北側に隣接し、寺院跡が発見された白幡前遺跡が南側の谷向かいに位置している。井戸向遺跡からも仏教関連遺物が広い範囲から発見された。調査区北東端の竪穴住居跡D007から青銅製小仏像（18）が、竪穴住居跡D016から墨書土器「寺カ」（1）が発見された。調査区中央斜面部の竪穴住居跡D088（2～4）のカマド脇の床面からは、墨書土器「佛」の灯明皿と底部穿孔の須恵器杯が出土した。また、隣接する竪穴住居跡D105（5～8）から墨書土器「寺／寺坏」「富」「□替」



第63図 井戸向遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

「厭カ」が、竪穴住居跡D114から墨書土器「信會」(9)が出土した。さらに調査区南西端の竪穴住居跡D116から三彩小壺(13)が、D127(10,11)からロクロ土師器鉢形土器が、D147(14~17)から三彩小壺と三彩托が出土した。三彩托は受部が欠損しており、灯明皿として使用されている。



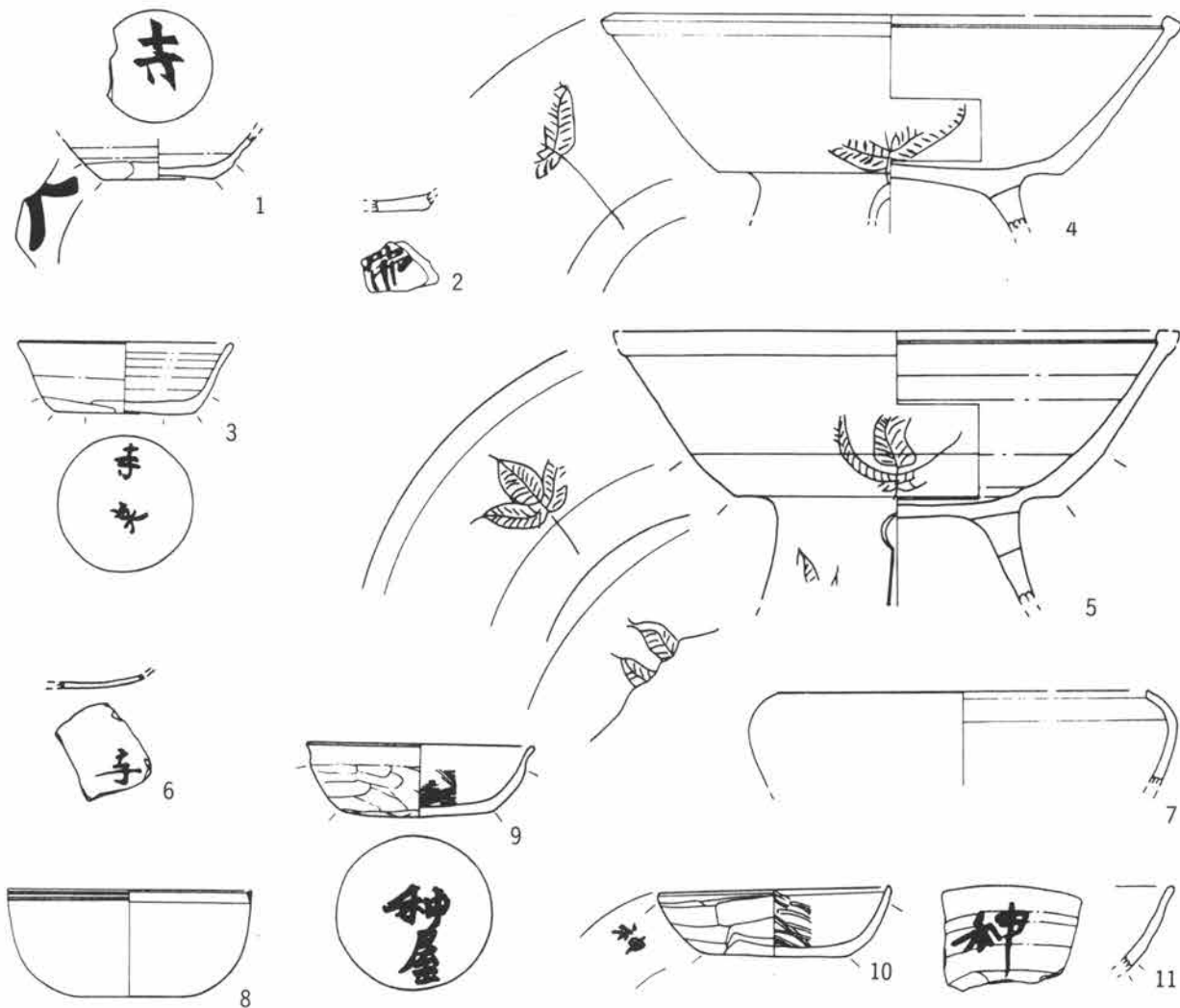
第64図 井戸向遺跡出土遺物 (1~17・ $\frac{1}{4}$ 、18・ $\frac{1}{2}$ )



131 高岡大山遺跡

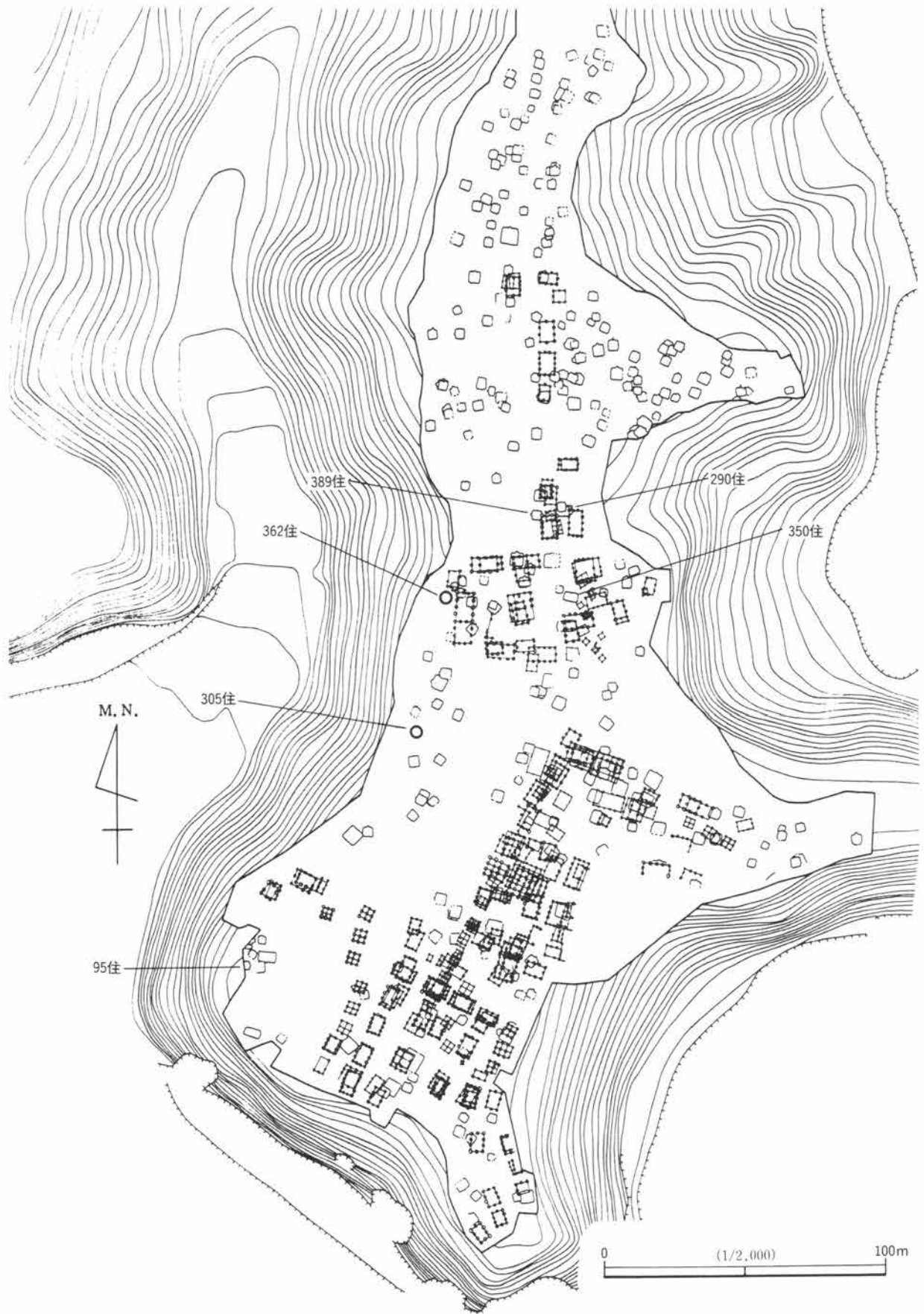
佐倉市白銀（上代字大山110他）

高崎川に面した南北に細長い台地上に位置する。台地南端から規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見された。仏教遺物は、この建物跡群から外れた台地南西端の竪穴住居跡と、台地中央の掘立柱建物跡群周辺の竪穴住居跡等から発見された。台地南西端の95号竪穴住居跡から墨書土器「寺／大カ」「佛」（1、2）が、そして、その付近のグリッドから土師器鉄鉢形土器（7）が発見された。台地中央西端の305号竪穴住居跡からは墨書土器「寺／莫」（3）が、362号竪穴住居跡から銅鏡（8）が出土した。銅鏡は住居跡隅の床面に伏せた状態で出土した。さらに台地中央の350号竪穴住居跡から墨書土器「寺」（6）が、290号・389号竪穴住居跡から脚付香炉（4、5）が出土した。このように仏教関連遺物は中央の掘立柱建物跡群周辺からややまとまって出土した。また、台地中央部などから墨書土器「神」「神屋」（9～11）なども出土している。



第65図 高岡大山遺跡出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

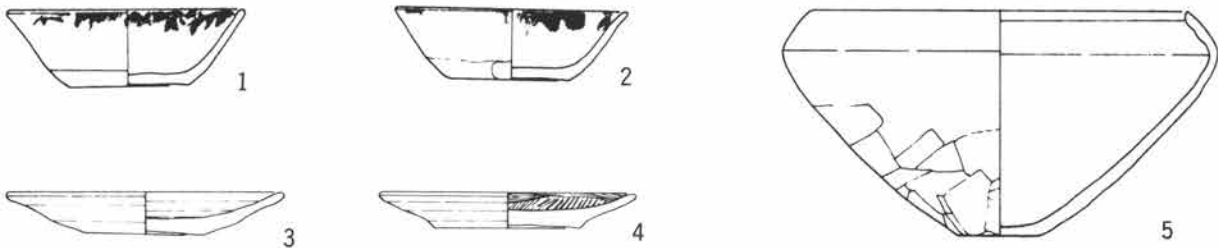


第66図 高岡大山遺跡遺構配置図

132 栗野 I 遺跡

佐倉市宮本字栗野477他

高崎川に注ぐ支谷に面した台地上に位置する。8世紀末から9世紀中葉にかけての竪穴住居跡が6軒、台地南端に散漫に発見された。そのうちの竪穴住居跡026のカマド火床部などから土師器鉄鉢形土器が、覆土上層から灯明皿が出土した(1~5)。なお、この台地南端からは6世紀末から7世紀の古墳と、6世紀末から8世紀の土壙墓も62基発見されている。

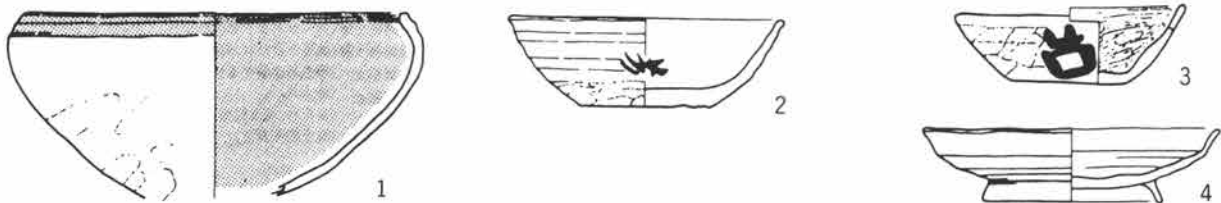
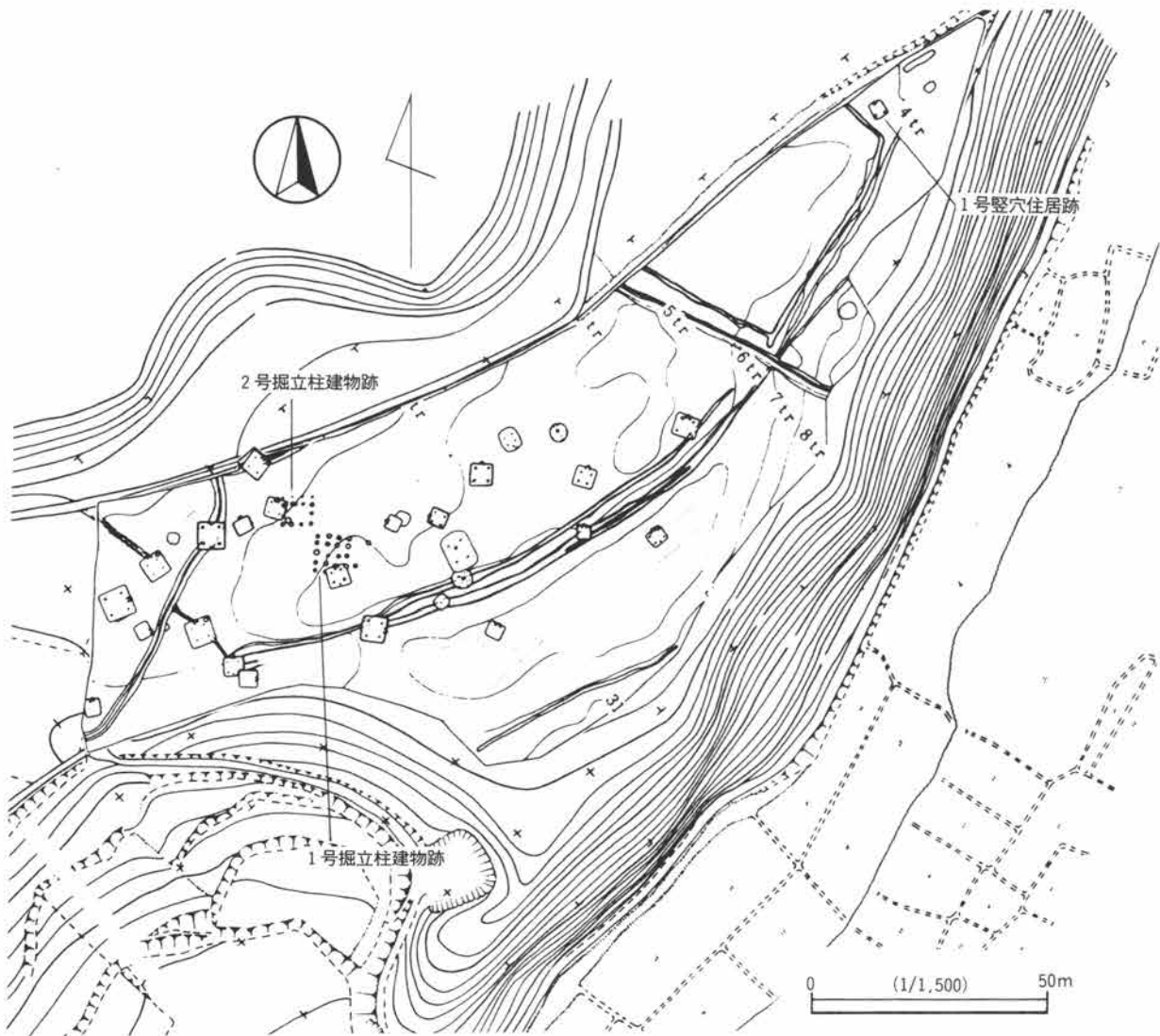


第67図 栗野 I 遺跡遺構配置図・出土遺物 (1/4)

133 太田宿遺跡

佐倉市寺崎字一本松・太田字宿地先

北東から南西に向かって開析された2つの小支谷に挟まれた痩せ尾根上に位置する。調査区北東端の1号竪穴住居跡(1、2)から赤彩土師器の鉄鉢形土器と墨書土器「芳」が出土した。このほか2棟の掘立柱建物跡も発見されている。1号掘立柱建物跡(3、4)は2間×3間の南北両庇建物跡で、2号掘立柱建物跡は2間×3間の片庇建物跡である。ただし、掘立柱建物跡周辺からは仏教遺物は出土していない。

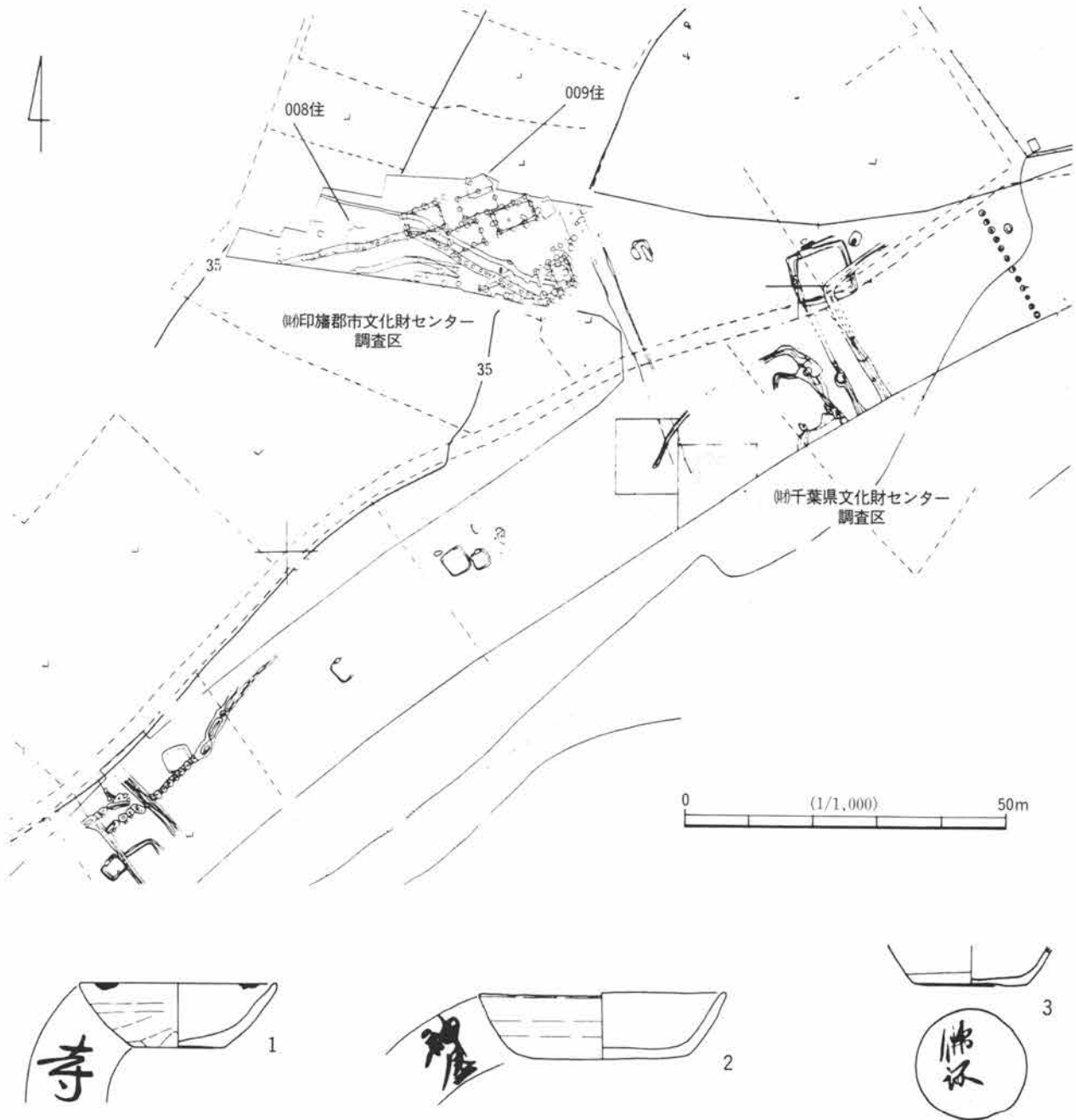


第68図 太田宿遺跡遺構配置図・出土遺物(4)

137 北大堀遺跡

印旛郡酒々井町本佐倉字北大堀495-1 他

印旛沼と高崎川から南北に入り込んだ谷津に囲まれた台地上に位置する。印旛郡市文化財センターの調査区から規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見された。この建物跡群に接した008竪穴住居跡から墨書土器「寺」(1)が、009竪穴住居跡から墨書土器「神屋」(2)が出土した。墨書土器「寺」は灯明皿として使われている。また隣接する印旛県文化財センターの調査区のグリッドからは墨書土器「佛坏」(3)が出土した。なお、長熊廃寺跡は同一台地上の南約0.6kmに位置している。

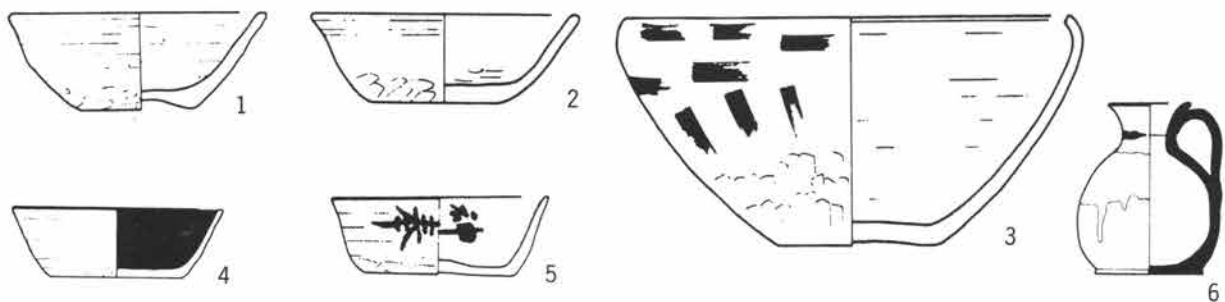
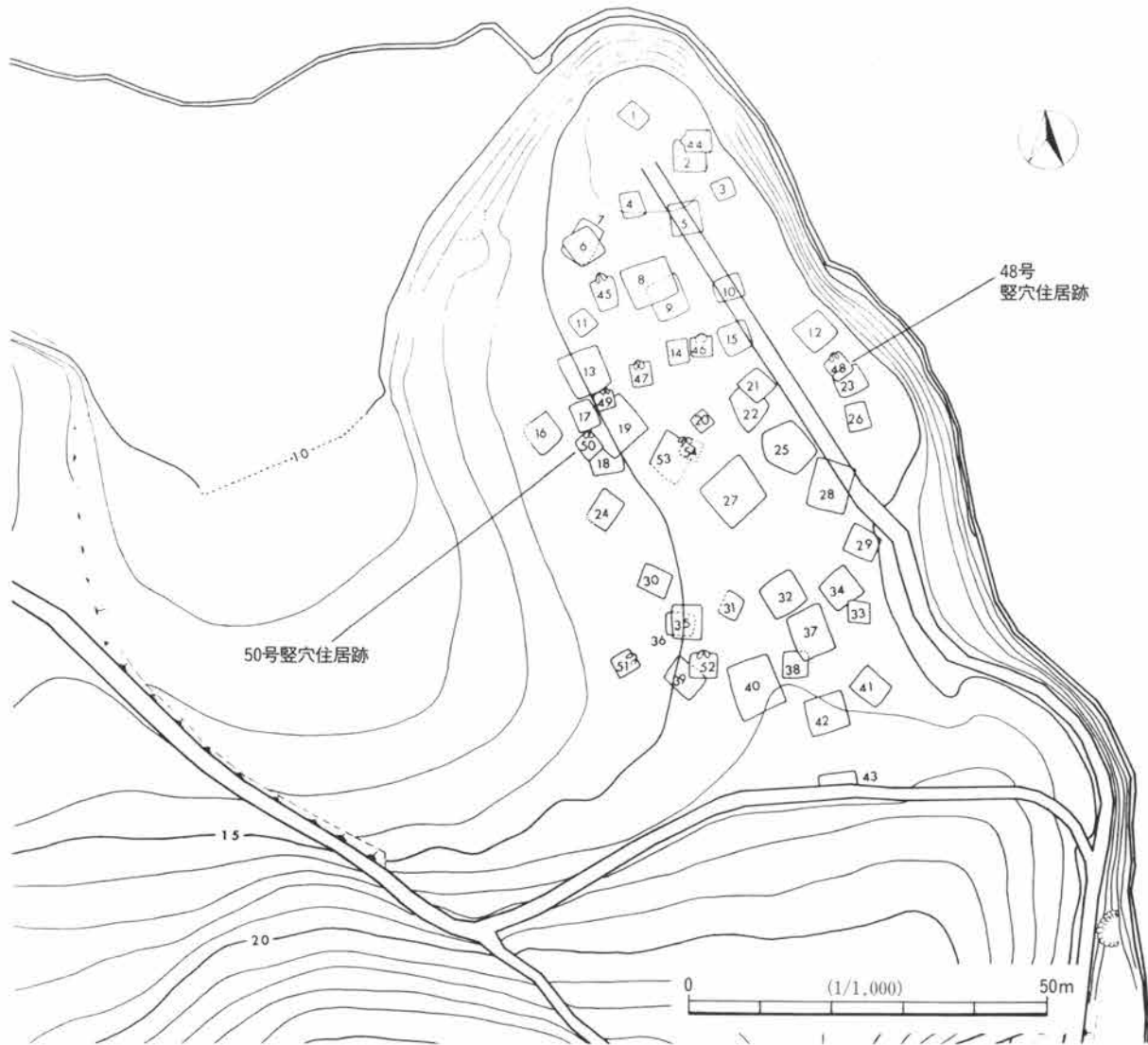


第69図 北大堀遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

139 馬橋鷺尾余遺跡

印旛郡酒々井町馬橋字鷺尾余地先

高崎川を望む台地北端に位置する。弥生時代から古墳時代前期の集落跡のほか、9世紀の集落跡が発見された。台地東端の48号竪穴住居跡(1~3)から土師器鉄鉢形土器が、台地西側の50号竪穴住居跡(4、5)から体部外面「神奉」と墨書された赤彩土器が発見された。このほか45号竪穴住居跡からは灰釉陶器手付小瓶(6)が出土した。

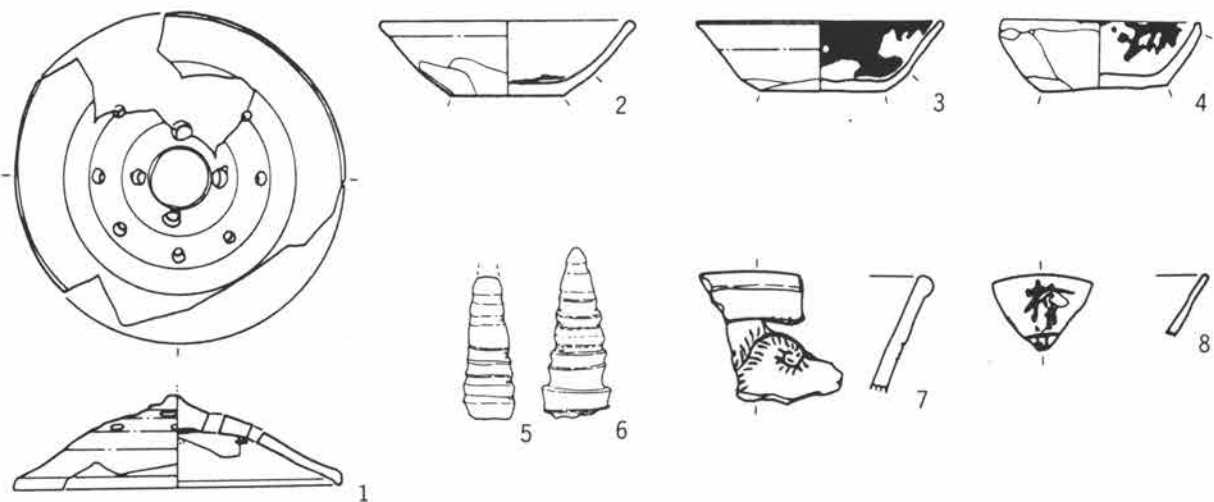
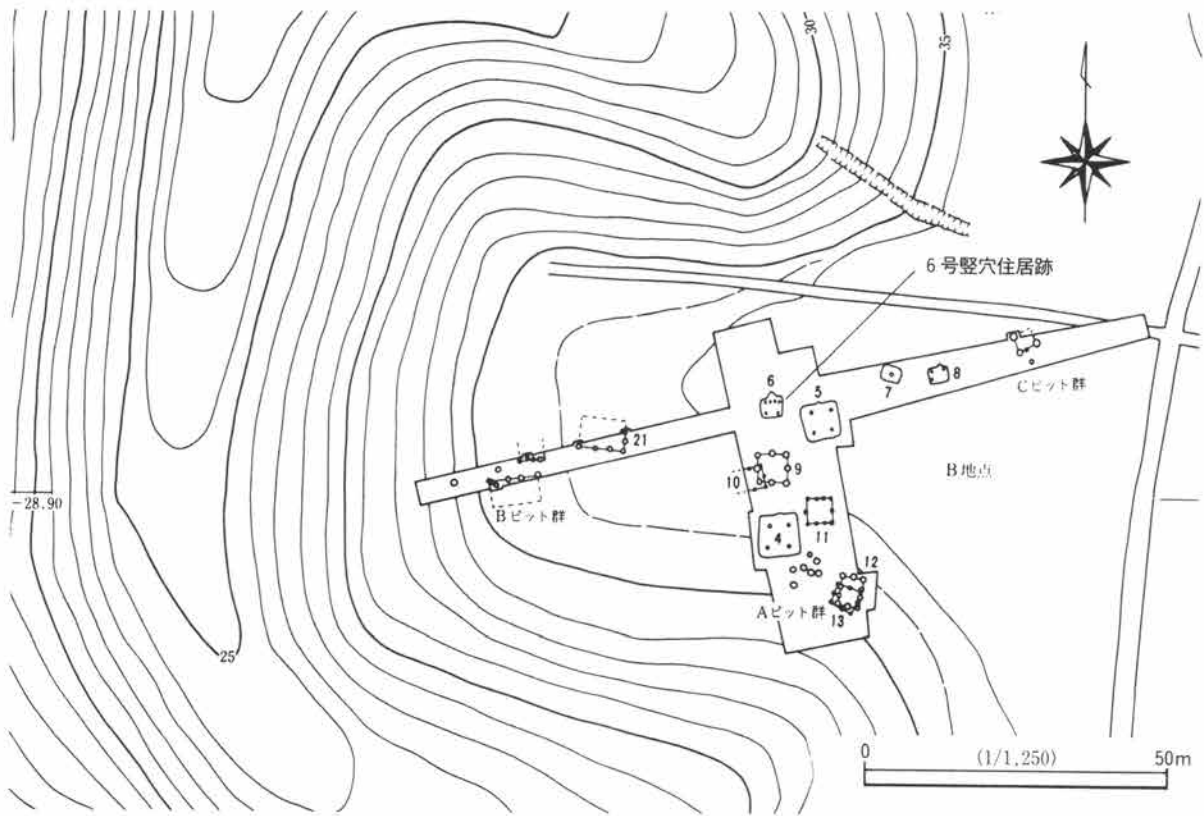


第70図 馬橋鷺尾余遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

140 伊篠白幡遺跡

印旛郡酒々井町伊篠字野田330-8 他

江川に流れる支谷に面した台地上に位置する。部分発掘のため全体像は不明であるが、谷津に張り出した台地先端部に掘立柱建物跡が集中する傾向がある。この掘立柱建物跡群に接した6号竪穴住居跡から香炉蓋(1)のほか、灯明皿と墨書土器の小片が多く出土した(2~4)。またグリッドから香炉蓋の宝珠の破片と脚付香炉の破片(5~7)、墨書土器「檜前」(8)「俣」、緑釉陶器が出土した。



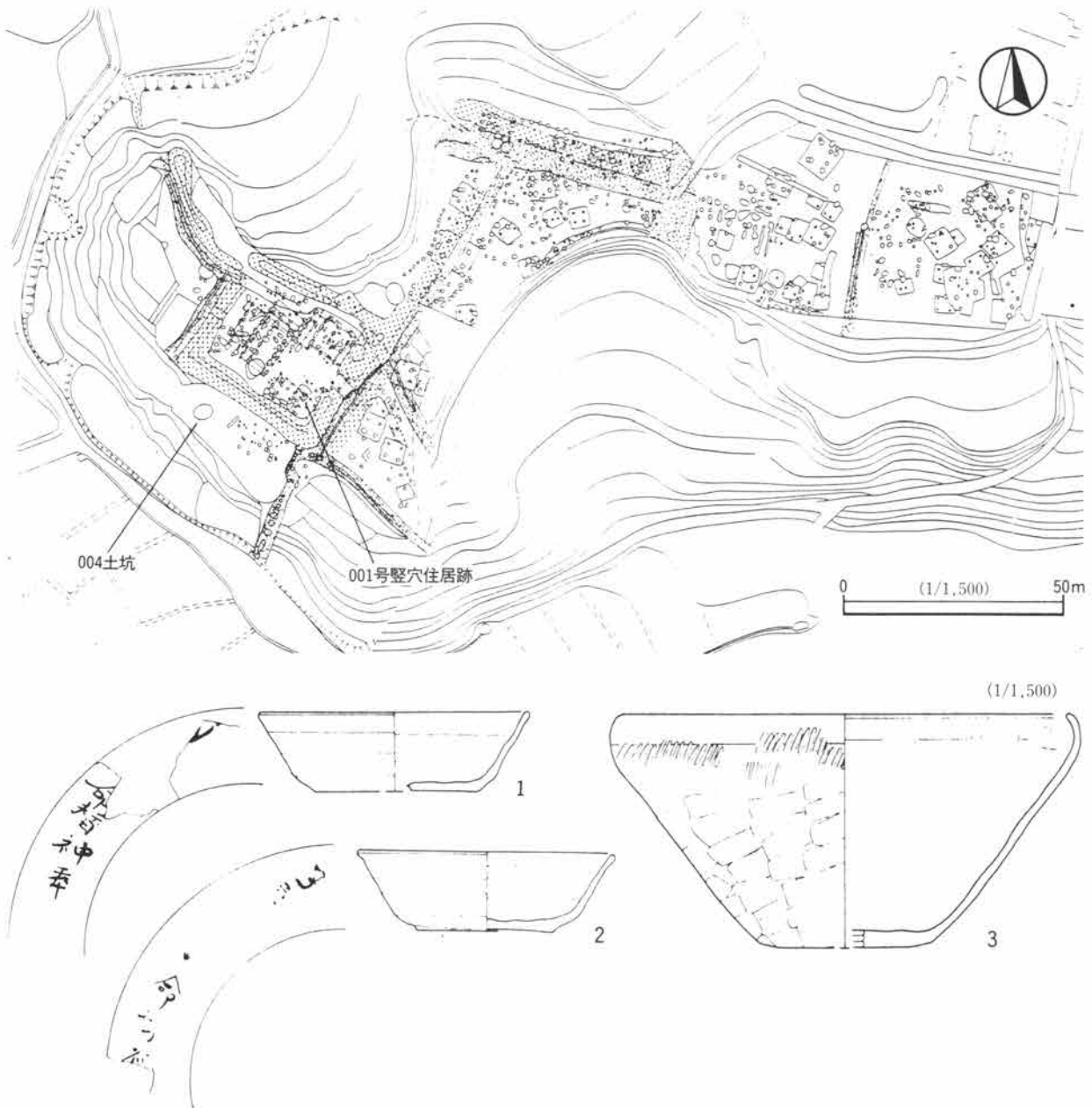
第71図 伊篠白幡遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

II 主要遺跡概要

141 長勝寺脇館跡

印旛郡酒々井町上本佐倉上宿175他

高崎川に注ぐ谷津に面した舌状台地の先端に位置する。谷津向かいの台地上には長熊廃寺跡が位置する。戦国期の館跡の造成により、古代の遺構の遺存状況は悪い。台地先端の南側に竪穴住居跡が、その西側に大型土坑が発見された。001号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器(3)が出土した。直径3.6m~4.8m、深さ約3mの断面播鉢状を呈した土坑からは須恵器坏・盤などが多く出土した。これらは8世紀中葉に比定される。また、10世紀に比定される断面箱形の大型の004土坑からは墨書土器「□命替神奉」「□□□□□命替神」(1、2)などが発見された。小規模な台地先端の遺構群であるが、複数の時期の特徴的な遺構・遺物が発見されている。



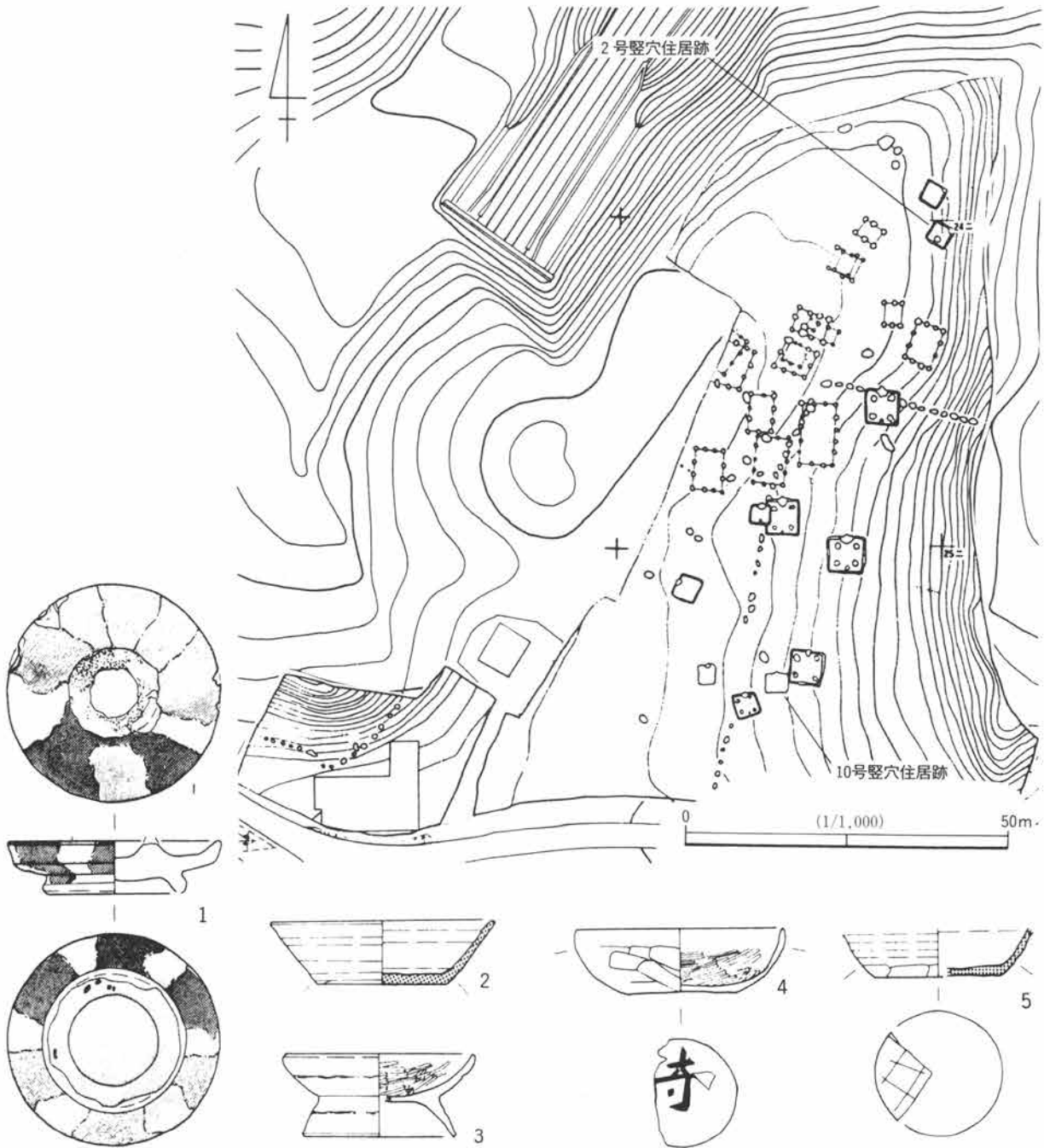
第72図 長勝寺脇館跡遺構配置図・出土遺物(1/4)



151 飯仲金堀遺跡

成田市飯仲字金堀1-2他

江川に流れ込む支谷最奥部に面した台地先端に位置する。幅狭い台地頂部に掘立柱建物跡群が、その東側斜面部に竪穴住居跡群が発見された。そのうち、2号竪穴住居跡から三彩托(1)が、10号竪穴住居跡(4、5)から墨書土器「寺」が発見された。2号竪穴住居跡からはそのほかに灯明皿として使用された須恵器杯、土師器杯、赤彩土師器等も出土した(2、3)。



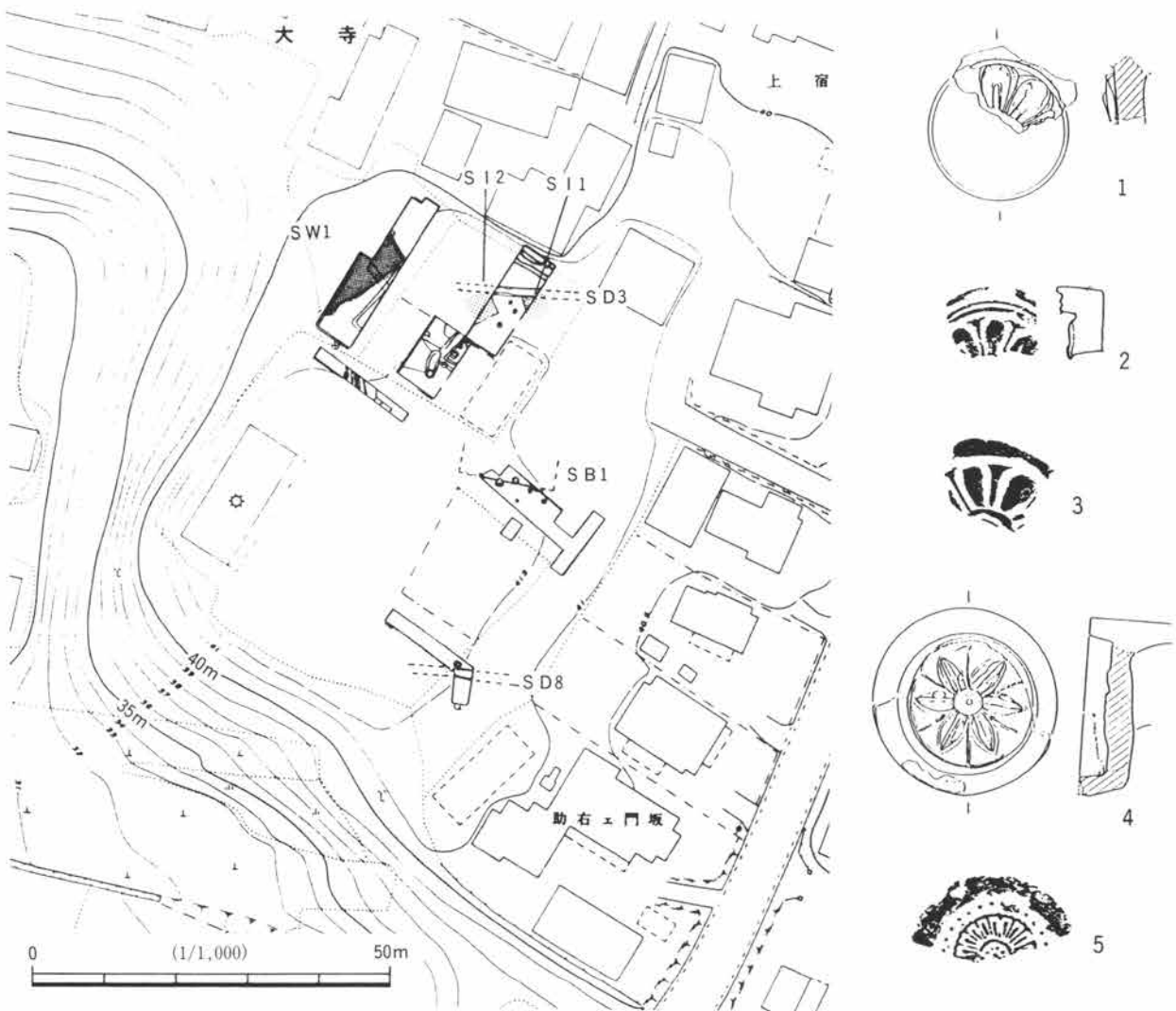
第73図 飯仲金堀遺跡遺構配置図・出土遺物(1・½、2~5・¼)

154 八日市場大寺廃寺跡

八日市場市大寺1861他

東は旧椿海の九十九里平野を望み、西は栗山川の支流借当川の支谷に面した台地上に位置している。平成元年に(財)千葉県文化財センターによって確認調査が実施され、掘立柱建物跡2棟、基壇1基、溝などが確認されたが、創建期の伽藍は詳細不明である。ただし、調査区域の中央から掘立柱建物跡SB1が、調査区域北端と南端からSD3とSD8の2条の東西溝が発見された。SD3とSD8は、幅約1.5mの断面箱形で、間隔54mで東西に平行に走っている。そのうちSD3は8世紀前半の竪穴住居跡S11を切っており、それ以降の区画溝の可能性はある。SB1の建物跡の軸線とも共通している。このほか、台地西端から基壇状に版築された硬化面(SW1)が発見された。

軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文(1・2)、素縁単弁八葉蓮華文(3)、素縁単弁六葉蓮華文(4)、常陸国分寺系の蓮華文(5)がある。2は外区の外側圏線が内側の2本の圏線よりも一段高まる特徴を有し、龍正院出土瓦と類似している。4は多古台遺跡と木内廃寺跡出土瓦と同文である。丸瓦は無段式が、平瓦は桶巻作りによるものと、凸型台一枚作りのものがある。

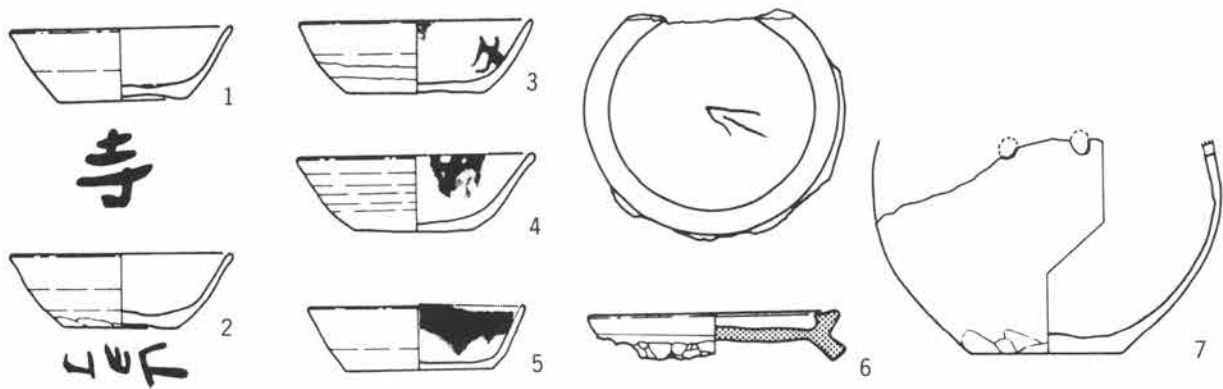
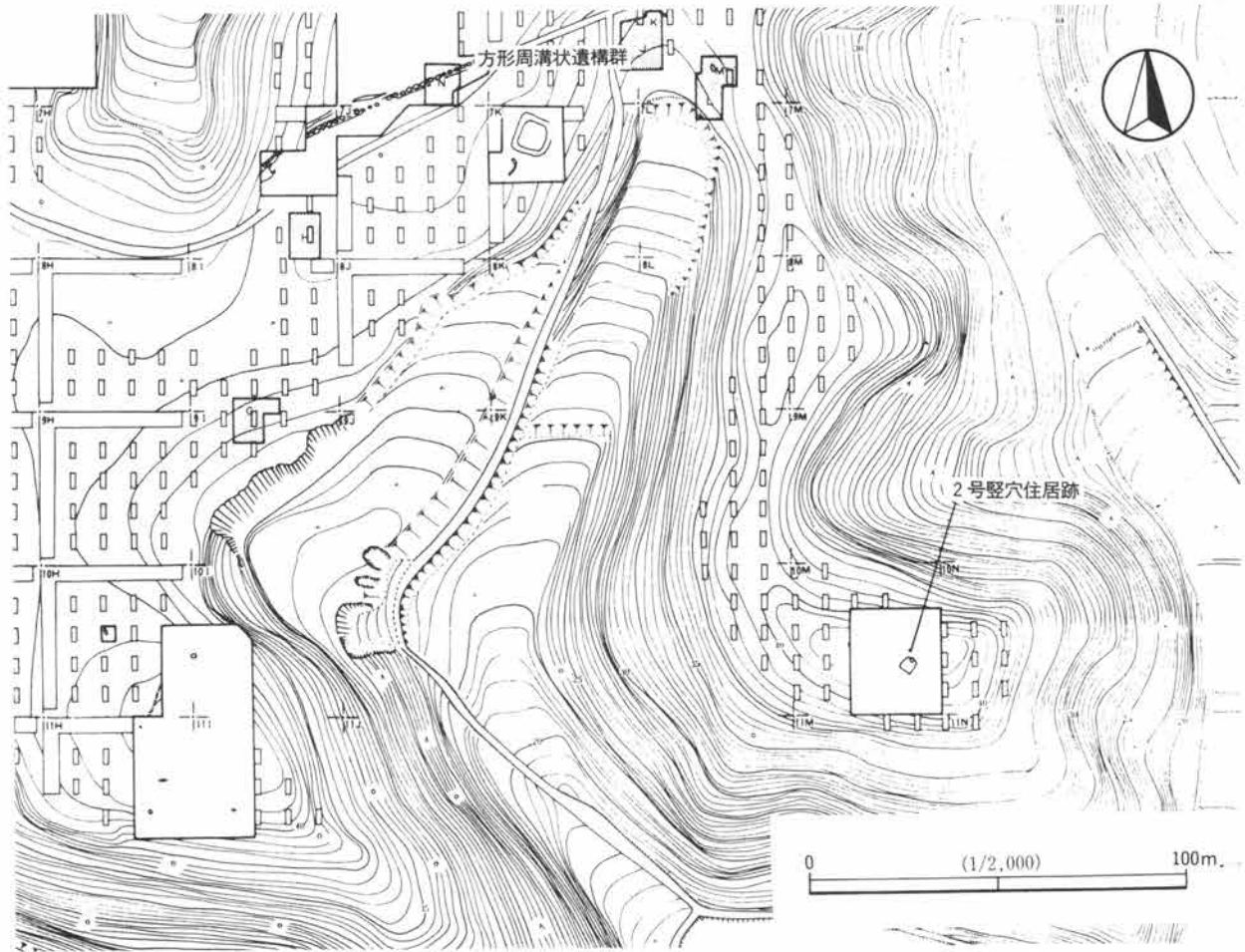


第74図 八日市場大寺廃寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

160 巢根遺跡

香取郡多古町水戸字巢根1,561他

多古橋川に注ぐ小支谷に面した台地上に位置し、同一支谷の下流に土持台遺跡が位置している。舌状台地の先端の2号竪穴住居跡(1~7)から灯明皿などともに墨書土器「寺」「山□丁」が発見された。6の須恵器は高台底部を硯として転用している。なお、2号竪穴住居跡周辺からは遺構は発見されていない。また、台地北側からは土持台遺跡同様、8世紀後半の方形周溝状遺構2基と骨蔵器1基が発見された。



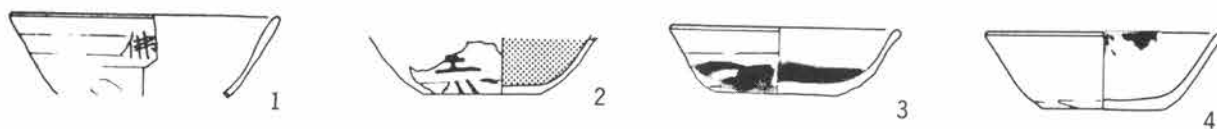
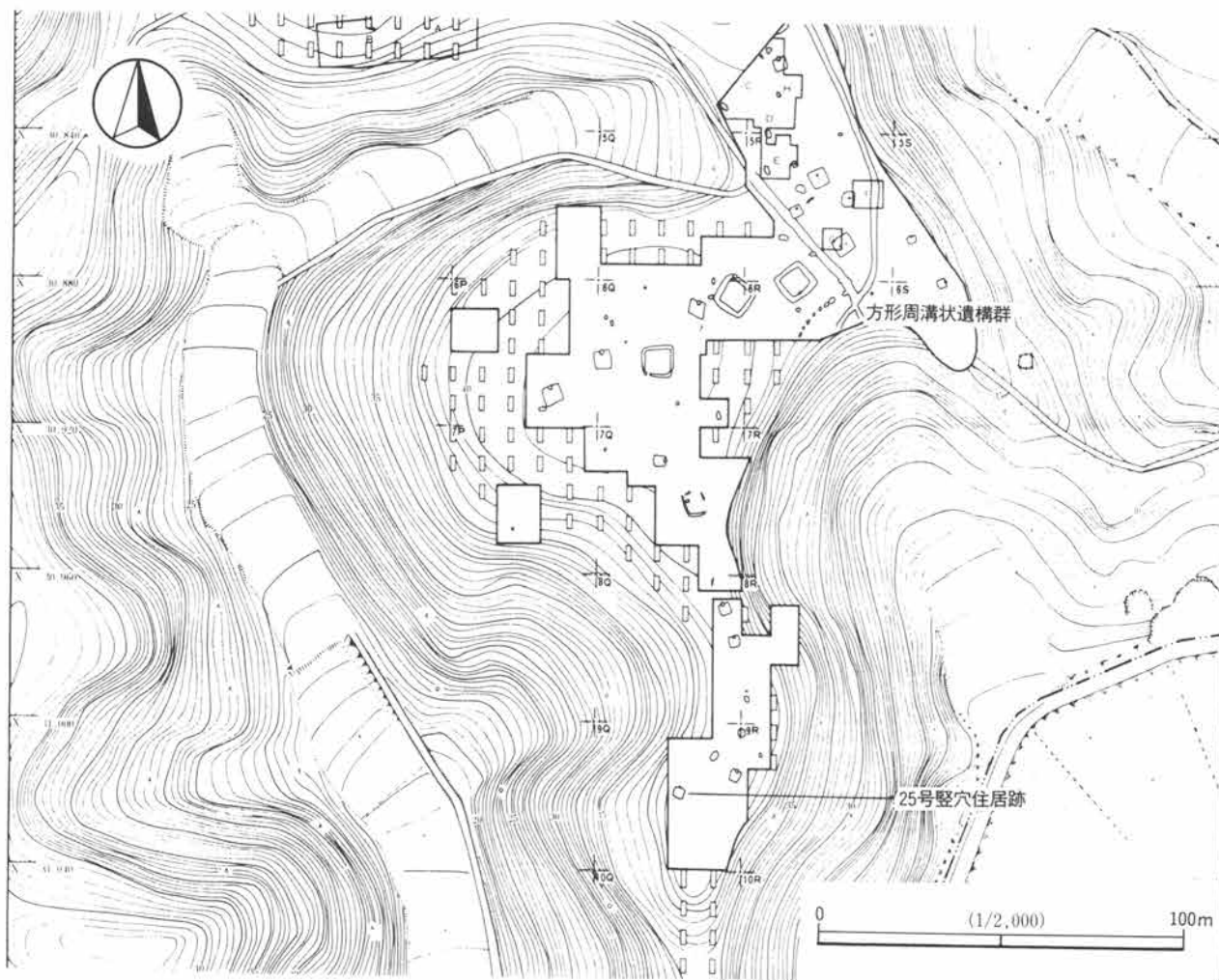
第75図 巢根遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

## II 主要遺跡概要

### 162 土持台遺跡

香取郡多古町水戸字土持台1,572他

多古橋川に注ぐ小支谷に面した台地上に位置する。その台地南端の25号竪穴住居跡から墨書土器「佛」「赤」や灯明皿などが出土した(1~4)。25号竪穴住居跡周辺の台地南端からは、9世紀第2四半期から10世紀前半にかけての5軒の竪穴住居跡が発見された。一方、台地北側からは8世紀中葉から9世紀前半にかけての方形周溝状遺構と骨蔵器が発見されている。

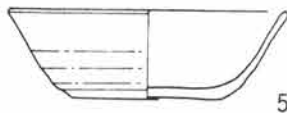
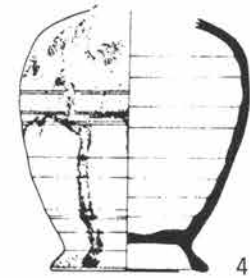
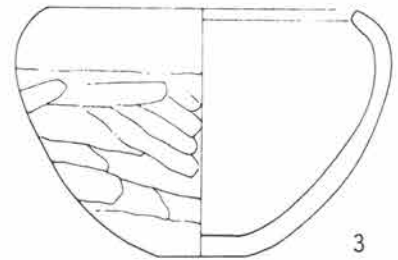
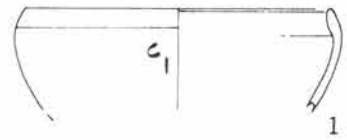


第76図 土持台遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

166 柳台遺跡

八日市場市飯塚字柳台

栗山川の支流借当川の支谷に面した台地南端に位置する。台地南端の337号竪穴住居跡(3~6)から土師器鉄鉢形土器と浄瓶(もしくは水瓶)が、121号竪穴住居跡(1、2)からは「千俣□(仏カ)」と墨書された土師器鉄鉢形土器が出土した。また台地中央からは銅印「王□私印」(7)が出土した。

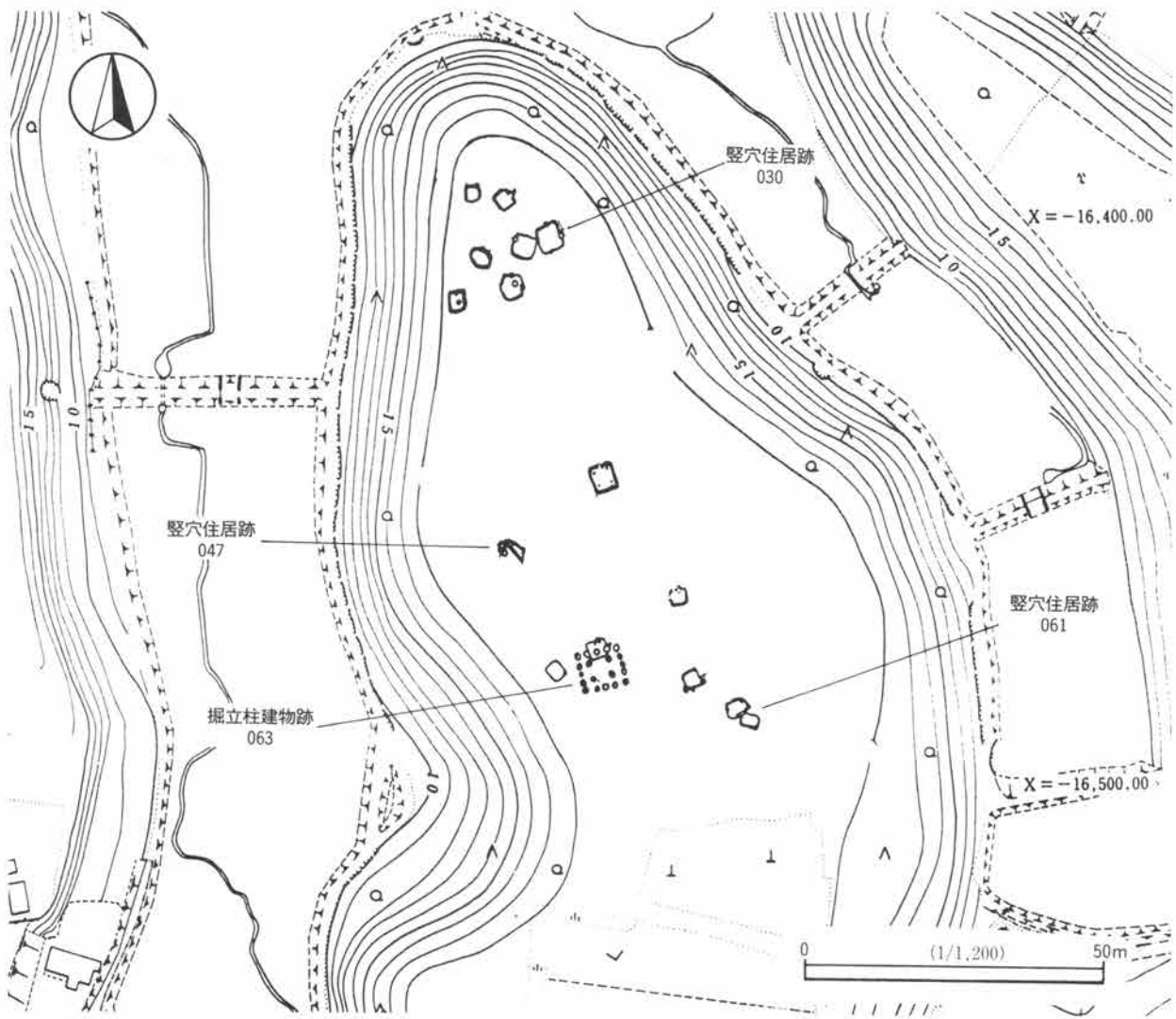


第77図 柳台遺跡遺構配置図・出土遺物(1~6・¼、7・½)

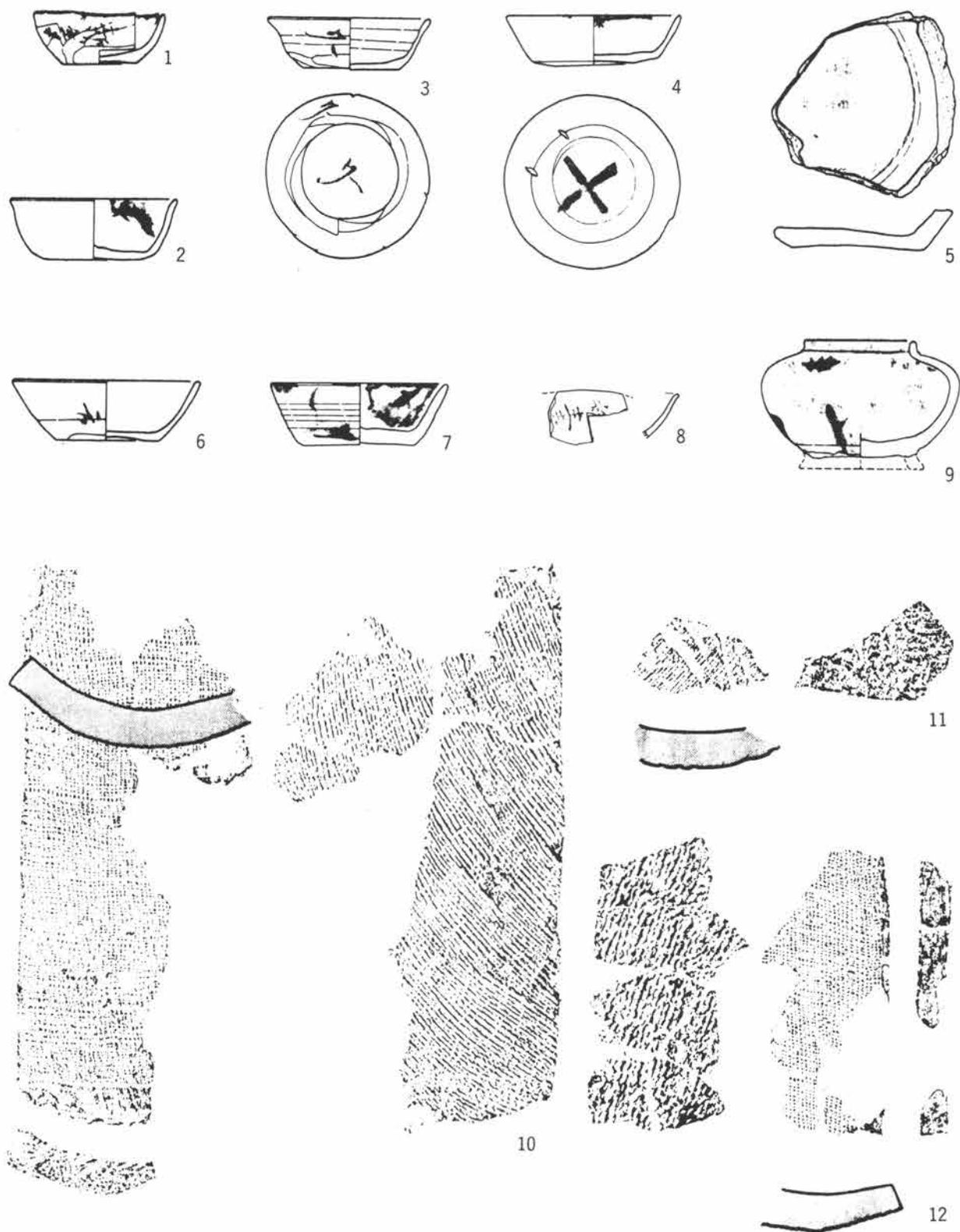
169 大井東山遺跡

東葛飾郡沼南町大井2044-1他

大津川が手賀沼に注ぐ河口付近の、支谷に面した台地北端に位置する。発掘調査は台地北側のみで、調査区域外の南側にさらに建物跡は展開すると推測される。その調査区南端から、竪穴住居跡050を切った、一間四面の掘立柱建物跡063が発見された。この北側に位置する竪穴住居跡047から墨書土器「新生寺」が出土した。灯明皿として使用された痕跡があり、墨書土器「久」「十」や甕などとともにかまど内からまともま出て出土した(1~4)。また、掘立柱建物跡063の南東の竪穴住居跡061から三彩小壺や灯明皿、転用硯などが出土した(5、6、9)。掘立柱建物跡063は特異な構造であり、墨書の「新生寺」に当たる建物跡の可能性が指摘されている。この建物跡は、遺構の重複関係と墨書土器の年代観から、8世紀末から9世紀前半に比定される。なお、台地北端の竪穴住居跡030の覆土中と台地の西端部から平瓦と熨斗瓦が出土した(10~12)。いずれも凸型台1枚作りで、丸瓦の出土は確認されていない。積極的な2次利用の痕跡がない点から、掘立柱建物跡063が簡単な葺葺きであった可能性も指摘されている。



第78図 大井東山遺跡遺構配置図



第79図 大井東山遺跡出土遺物 (¼、ただし9は½)

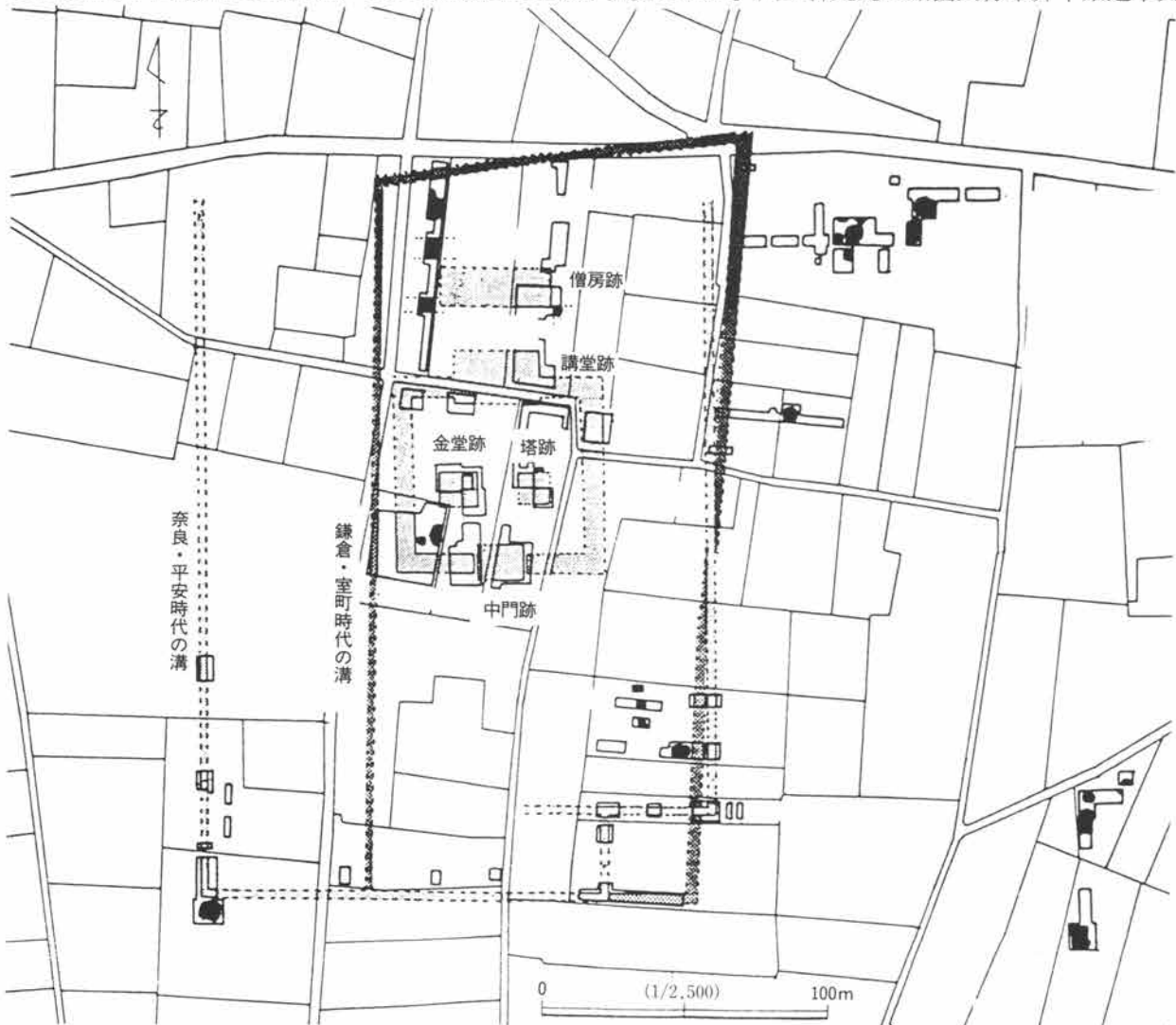
172 結城廃寺跡

茨城県結城市上山川結城寺

鬼怒川西岸の標高約30mの台地上に位置する。北東約500mの台地東斜面に創建期瓦を焼成した結城八幡瓦窯跡が位置している。昭和63年度から平成6年度にかけて、伽藍を中心に広範囲な確認調査が実施された。中心伽藍は回廊が講堂に取り付く法起寺式伽藍配置が確認された。回廊内の西から旧表土上に地業した金堂基壇が、東から掘込み地業の塔基壇が発見された。金堂基壇は東西13.7m、南北11.6mの規模で、塔基壇は一辺13mを測る。中門も掘込み地業で東西約16m、南北約12mを測り、講堂も掘込み地業で東西約30m、南北約17.3mを測る。講堂の北側には掘込み地業の僧坊基壇が東西約38m、南北約13mの規模で確認され、その西側に南北に並立する掘立柱建物跡が2棟確認された。

さらに伽藍を大きく区画する溝状遺構が東西と南で確認された。上幅1.6m、下幅0.6m、深さ0.8mの逆台形の溝で、10世紀には埋没している。このほか、この区画溝に一部重複して鎌倉期の遺物が出土する中世段階の断面V字状の区画溝も確認された。こうした区画溝の内外からは8世紀前半から平安時代後期にかけての竪穴住居跡が多く発見された。

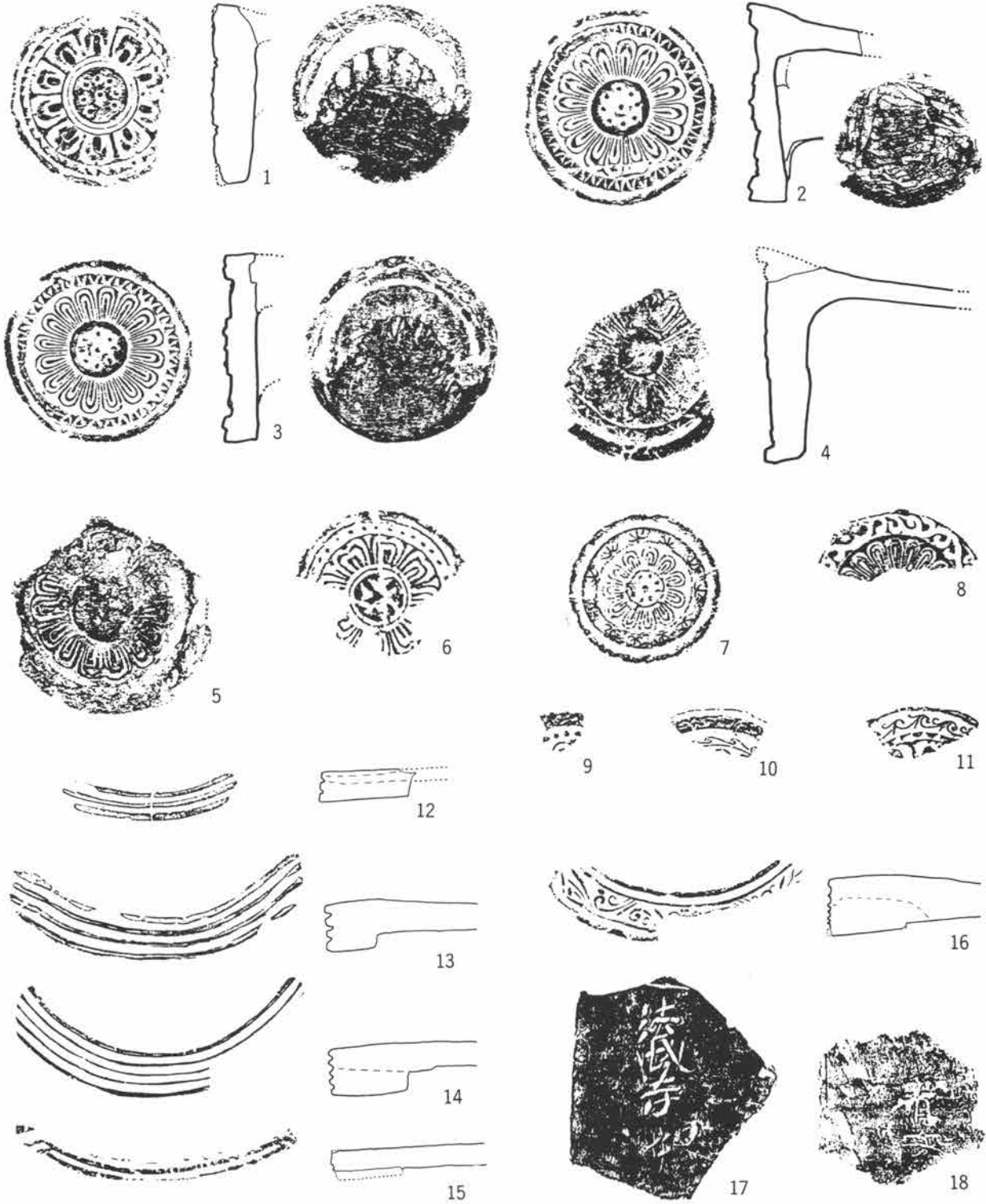
これまでに墨書土器「大寺」「東院」「茂」や、へら書き瓦「法成寺」(17)「新治」「有岐」(18)等が発見されたほか、回廊内の瓦溜りから多量の軛仏と塑像が発見された。出土軒丸瓦は鋸歯文縁単弁十葉蓮華文



第80図 結城廃寺跡遺構配置図



(1)と鋸歯文縁複弁八葉蓮華文(2)、鋸歯文縁単弁十六葉蓮華文2種(3、4)、鋸歯文縁変形八葉蓮華文(5)、下総国分寺出土瓦と同範の珠文が巡る複弁八葉蓮華文(6)、単弁十一葉蓮華文(7)、全体の文様が不明な外区に唐草文が巡る3種(8、10、11)、外区に珠文が巡る1種がある。軒平瓦は三重弧文(12)、四重弧文(13)、五重弧文(14)、重郭文(15)、均整唐草文(16)の5種がある。なお、創建期の単弁十葉と複弁八葉と単弁十六葉の軒丸瓦には瓦当裏面に布目を残すものと残さないものがある。



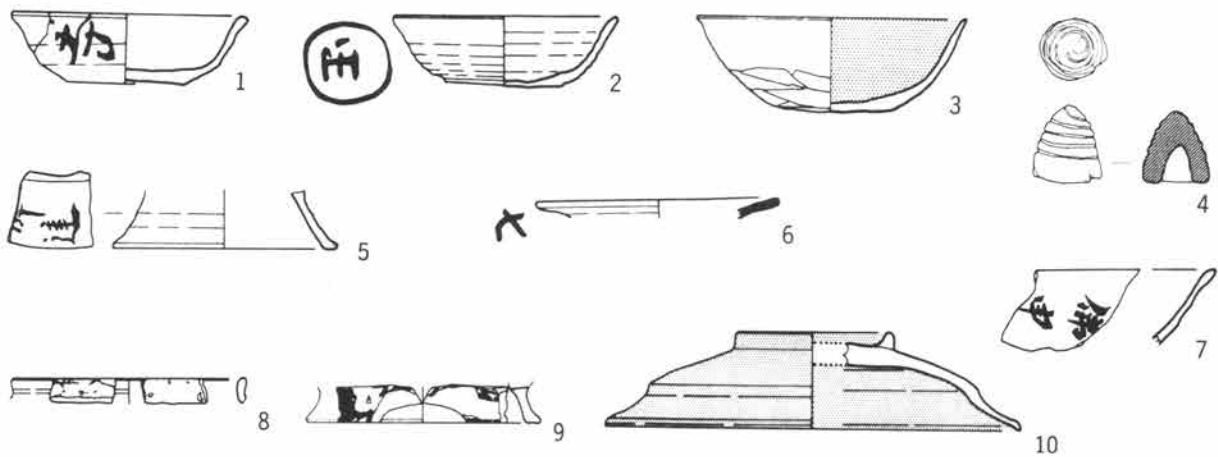
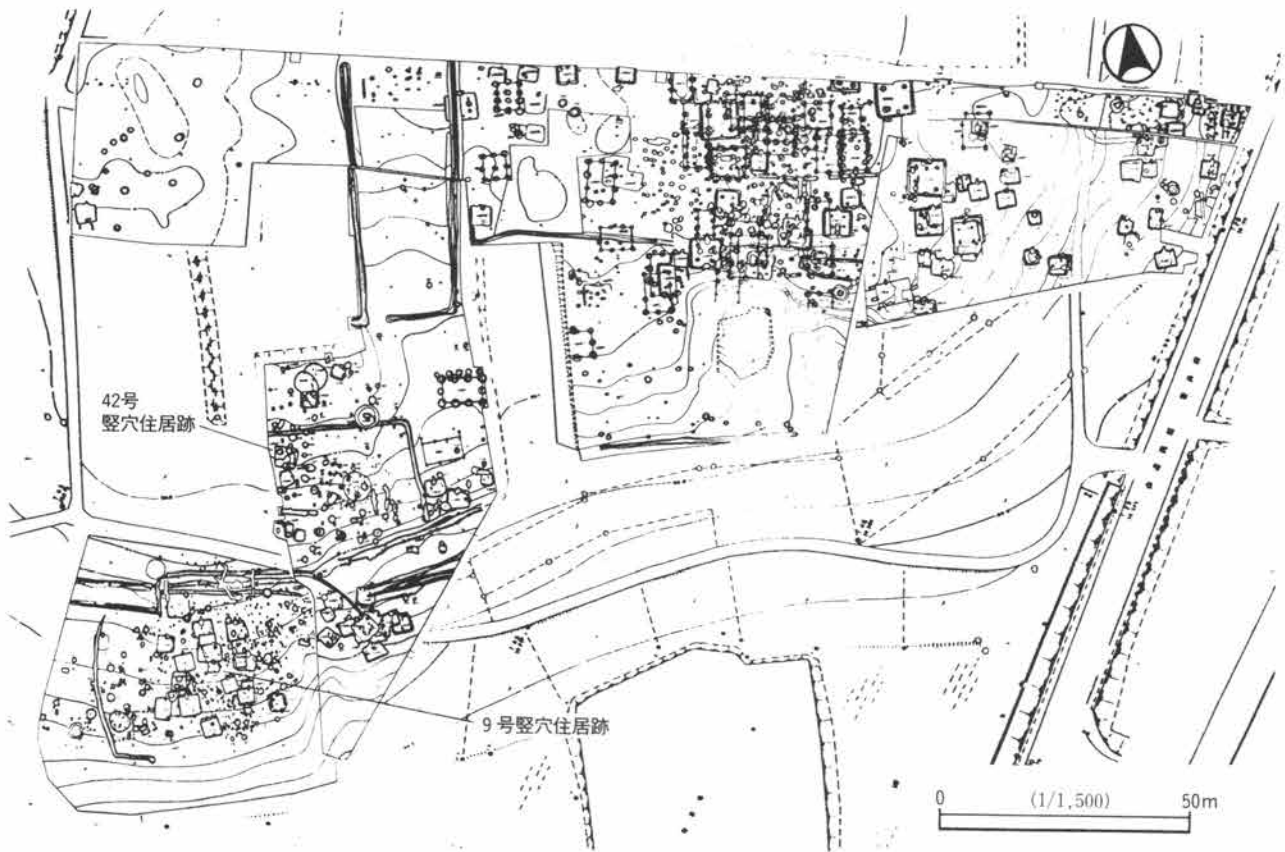
第81図 結城廃寺跡出土瓦 (1~16・ $\frac{1}{6}$ 、17~18・ $\frac{1}{4}$ )

II 主要遺跡概要

173 峯崎遺跡

茨城県結城市結城字峯崎6683他

鬼怒川に注ぐ小規模な谷津に面した台地南端に位置する。台地中央平坦部からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群が発見され、多くの三彩・緑釉陶器（8～10）が出土した。結城郡の郡家関連遺跡の可能性が指摘されている。この掘立柱建物跡群の南西の台地斜面部の9号竪穴住居跡（1、2）から墨書土器「寺」が、42号竪穴住居跡（3～6）から土製螺髪が発見された。土製螺髪は中空で、外部が螺旋状に線刻されている。また墨書土器「佛申」（7）が表採されている。



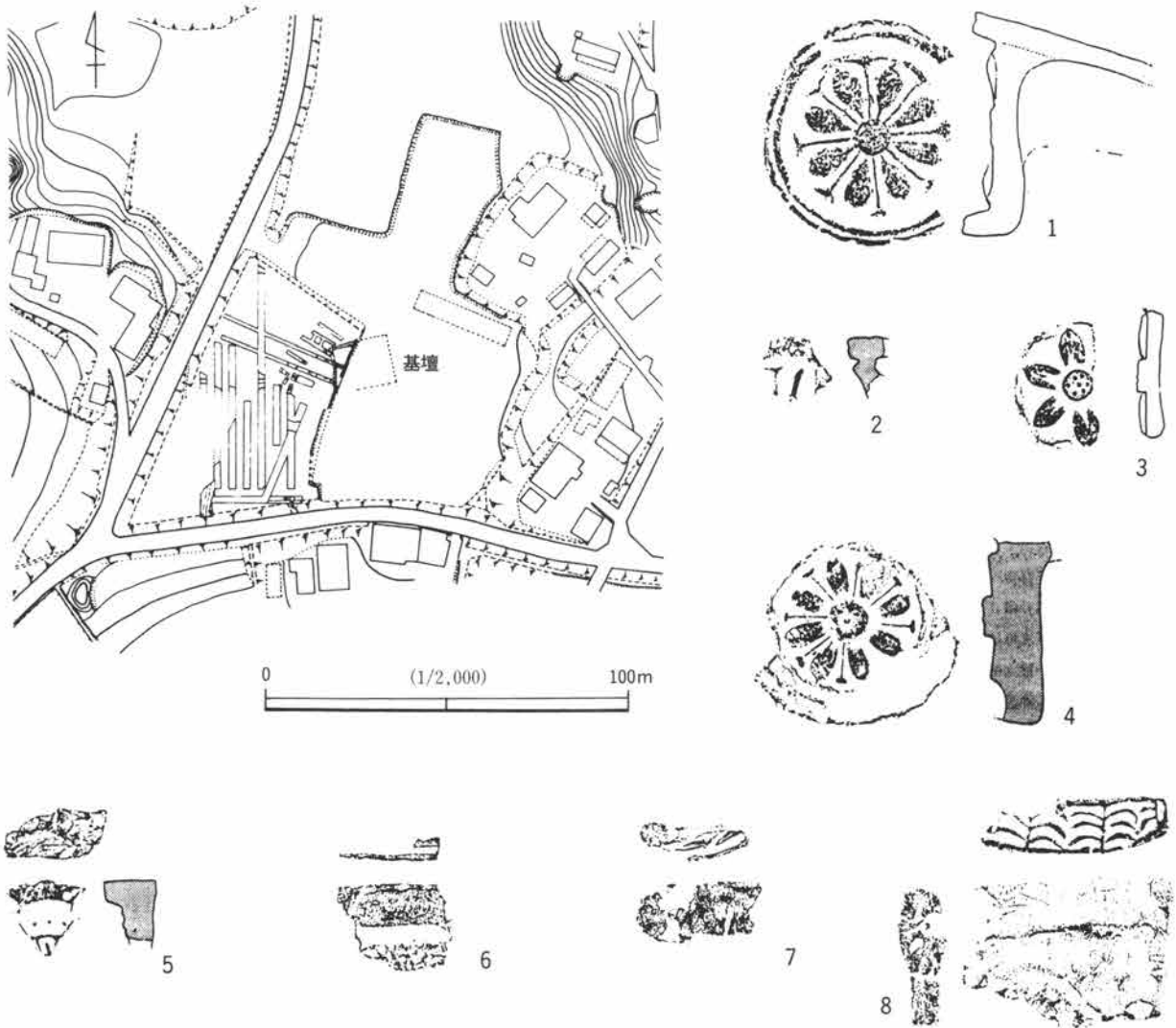
第82図 峯崎遺跡遺構配置図・出土遺物（ $\frac{1}{4}$ 、ただし4のみ $\frac{1}{2}$ ）

174 木内廃寺跡

香取郡小見川町木内字権現台

利根川に注ぐ黒部川に面した標高約42mの台地上に位置している。昭和56年に確認調査が実施されたが、調査以前に土採取等で広範囲に削平されており、基壇建物跡の一部と、その北約70mで竪穴住居跡が数軒確認されるにとどまった。基壇建物跡は掘込み地業で南北11.3m以上、東西6.3m以上の規模を確認したが、東側部分は大きく削平されていた。

出土軒丸瓦が二重圏文縁素弁八葉蓮華文(1)、二重圏文縁素弁蓮華文(2)、外区不明の素弁六葉蓮華文(3)、素弁八葉蓮華文(4)、そして常陸国分寺系(5)の5種がある。軒平瓦は二重弧文(6)と唐草文2種(7、8)の計3種がある。丸瓦は無段式が、平瓦は正格子叩きと斜格子叩き、縄叩き、凸面ヘラケズリのものが出土している。4は埴谷横宿遺跡出土瓦と同文で、3は八日市場大寺廃寺跡出土瓦と多古台遺跡出土瓦と同文、7は龍正院瓦窯跡出土瓦と同範である。



第83図 木内廃寺跡遺構配置図・出土瓦 (1/6)

175 織幡妙見堂遺跡

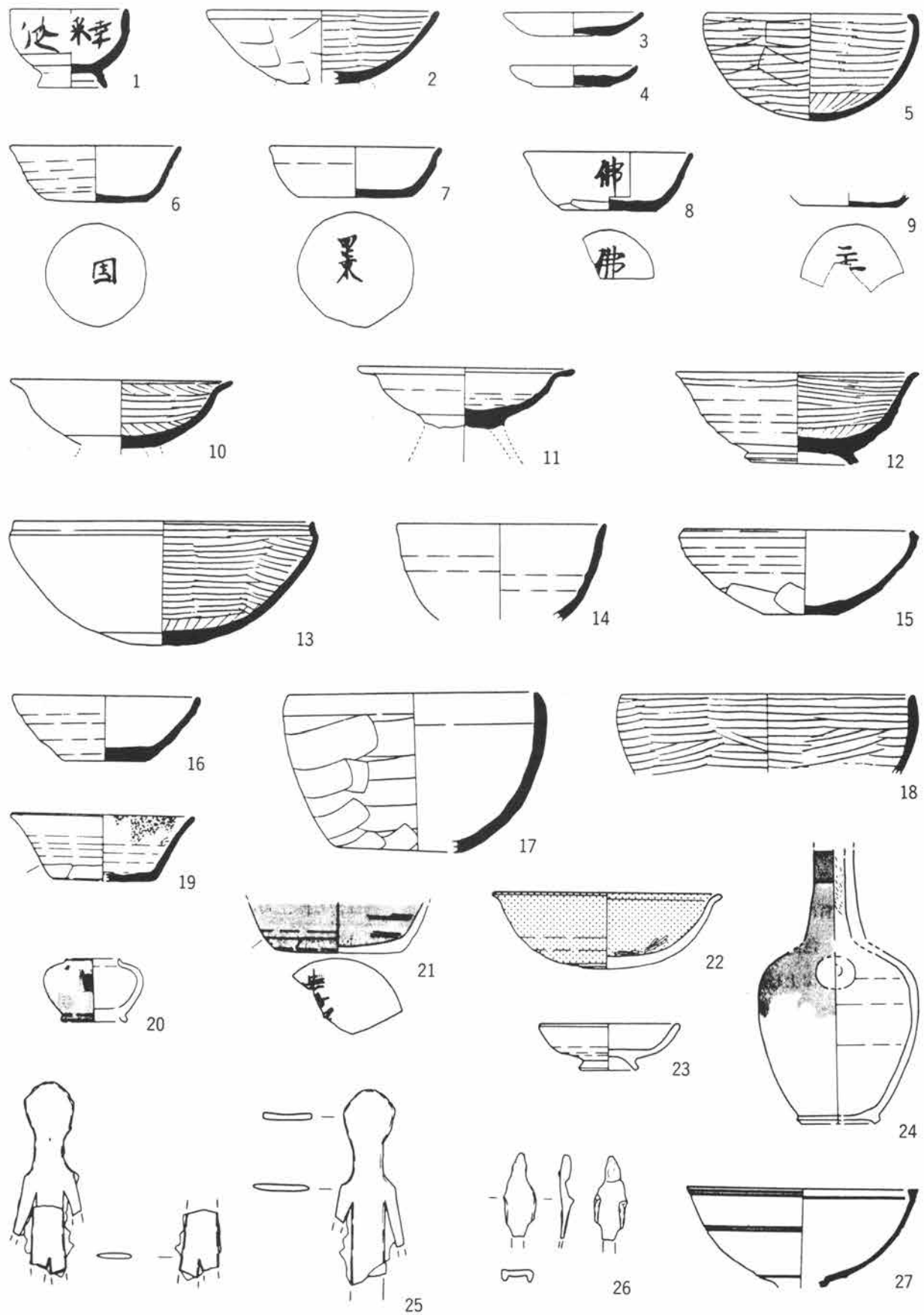
香取郡小見川町織幡字妙見堂853-2 他

小野川上流の谷津に面した台地南端に位置する。銚子香取郡市文化財センターによる2次調査で、台地中央から3棟の掘立柱建物跡が発見された。SB1は一間四面の掘立柱建物跡で、その南面からは遺構が発見されておらず、前庭として開放されていたと考えられる。

また、掘立柱建物跡SB1の南西に位置する竪穴住居跡SI16(5~9)から墨書土器「佛」と土師器鉄鉢形土器が、竪穴住居跡SI3(1~4)から墨書土器「釈迦」が出土した。掘立柱建物跡SB1の北側の竪穴住居跡SI20(10~12)から脚付香炉が、東側の竪穴住居跡SI35・36(13~15)から土師器鉄鉢形内黒土器が出土した。このほか、青銅製合子(27)が掘立柱建物跡SB1周辺の表土中から発見されており、掘立柱建物跡群周辺に仏教遺物がやや集中する傾向があり、特異な構造の掘立柱建物跡SB1は仏堂の可能性が高い。このほか、1次調査区の台地西側の竪穴住居跡からも浄瓶(24)、縣仏の可能性のある銅製品(26)等が出土している。



第84図 織幡妙見堂遺跡遺構配置図

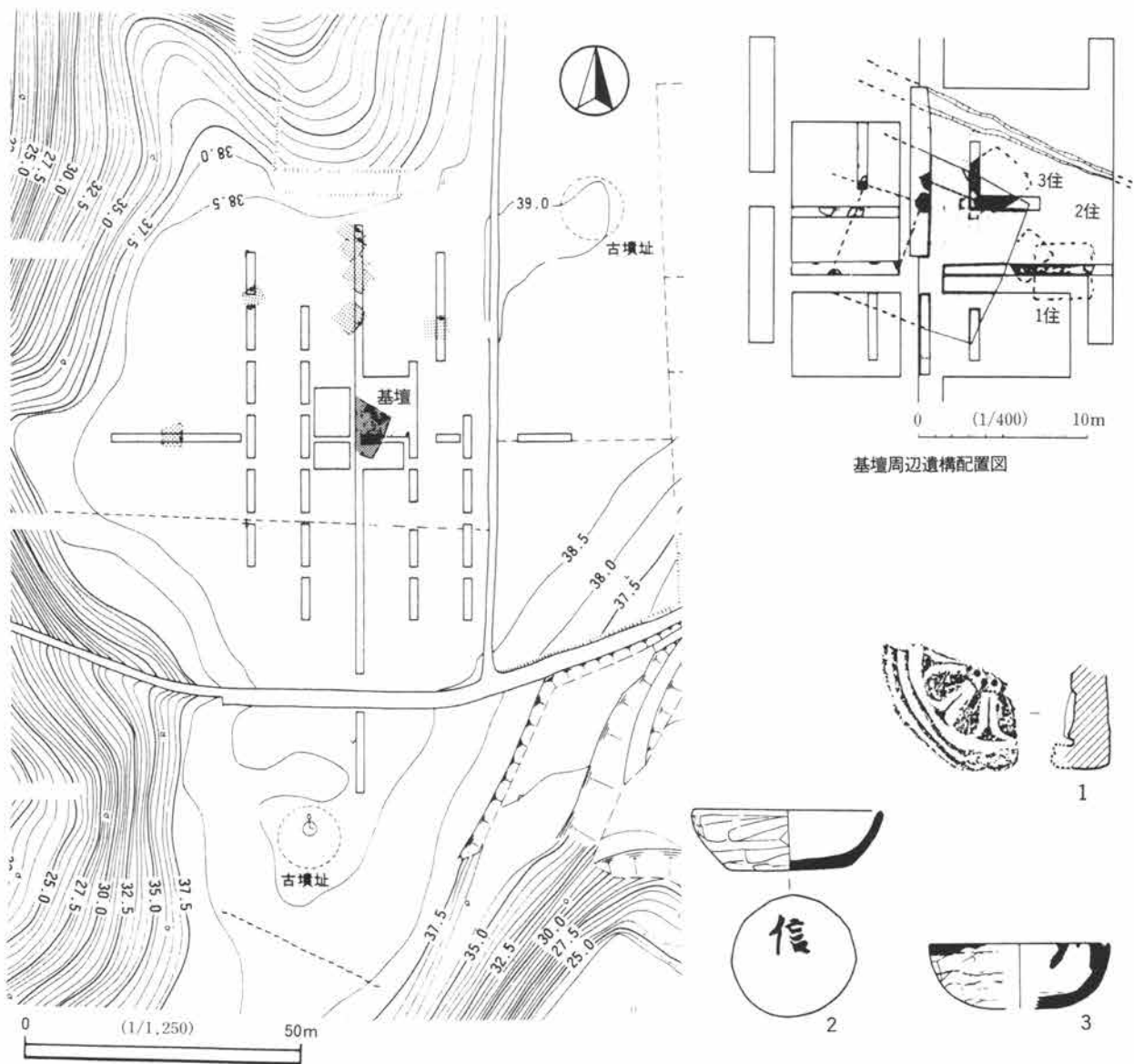


第85図 織幡妙見堂遺跡出土遺物 (1~24・ $\frac{1}{4}$ 、25~27・ $\frac{1}{2}$ )

176 名木廃寺跡

香取郡下総町名木字鎌部663他

利根川流域の平野部から3kmほど谷津を遡った標高約38mの台地上に位置している。南約75mの古墳付近から、銅造如来形坐像と菩薩形立像の2体の小仏像が発見されている。このほか墨書土器「度寺/度寺」「曹」「福カ」なども表面採集されている。確認調査は昭和58年に(財)千葉県文化財センターにより実施され、基壇建物跡1基と掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見された。基壇建物跡は掘込み地業で、一辺約9.5mの方形に近い規模が確認された。なお、この基壇に先行する2軒の竪穴住居跡が基壇東側から、また基壇西側から掘立柱跡が発見された。2号住居跡から墨書土器「信」が、3号住居跡からは灯明皿(3)が出土し、8世紀前半の遺構である。掘立柱跡は基壇の軸線とほぼ一致する掘立柱建物跡と捉えられる。このほか、基壇の北側から竪穴住居跡7軒と、8世紀後半から9世紀前半の土器が多く発見された。出土瓦は少なく、軒丸瓦は三重圈文縁単弁八葉蓮華文1種で、軒平瓦の出土は確認されていない。平瓦は桶巻作りの凸面正格子叩きとナデ調整、縄叩きの凸型台一枚作りがある。このほか、丸瓦は細片が出土している。

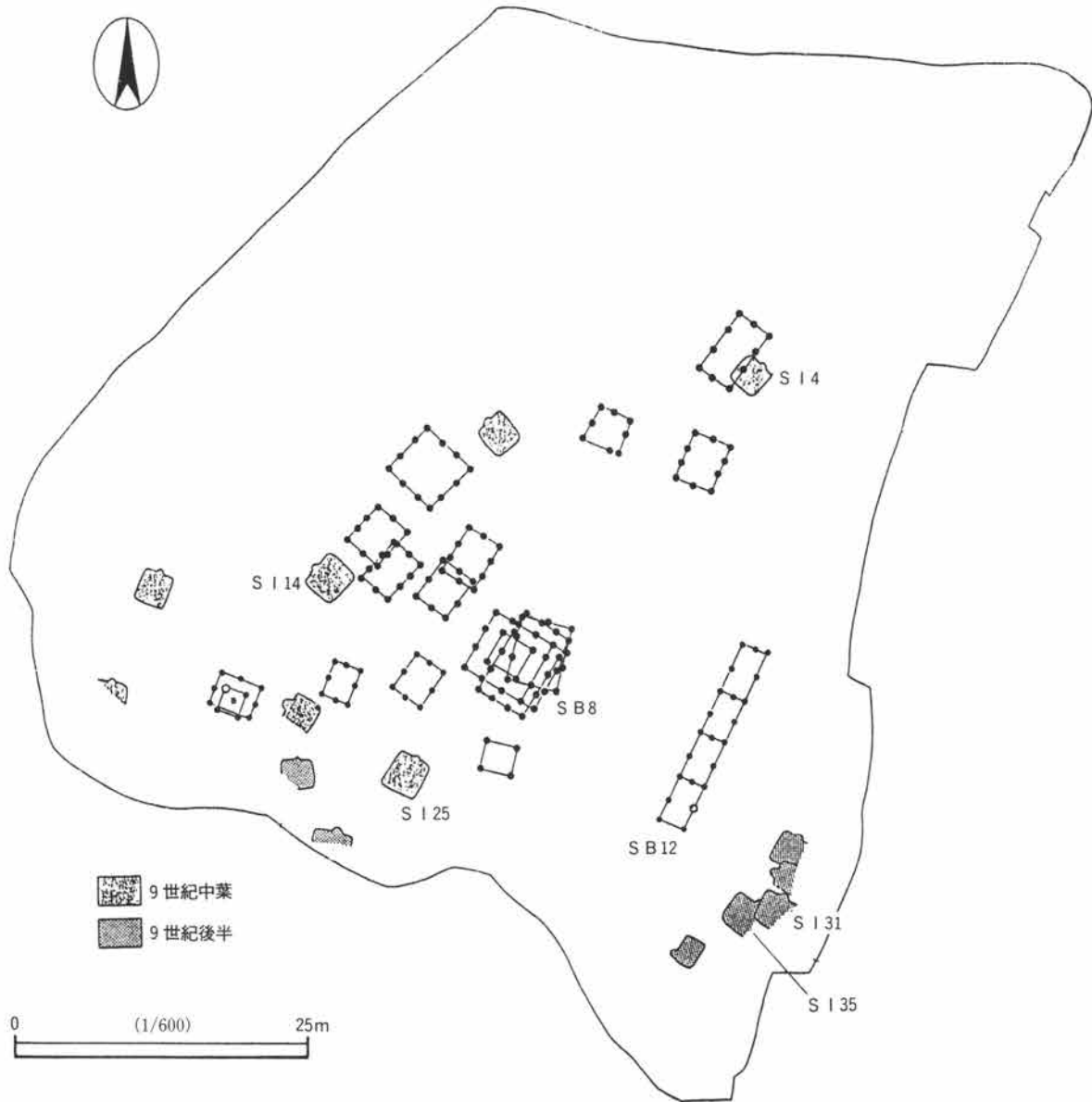


第86図 名木廃寺跡遺構配置図・出土遺物 (1・1/6、2~3・1/4)

178 多田日向遺跡

佐原市多田字日向2426他

利根川の支流小野川に面した台地上に位置する。平成元年から2年にかけて(財)香取郡市文化財センターによって調査され、奈良・平安時代の竪穴住居跡29軒と掘立柱建物跡17棟などが発見された。9世紀中葉以降の墨書土器に「三綱寺」「多理草寺」「観音寺」「寺」など寺院関連のものが多く発見されている。このほか、鉄鉢形の須恵器鉢が出土している。



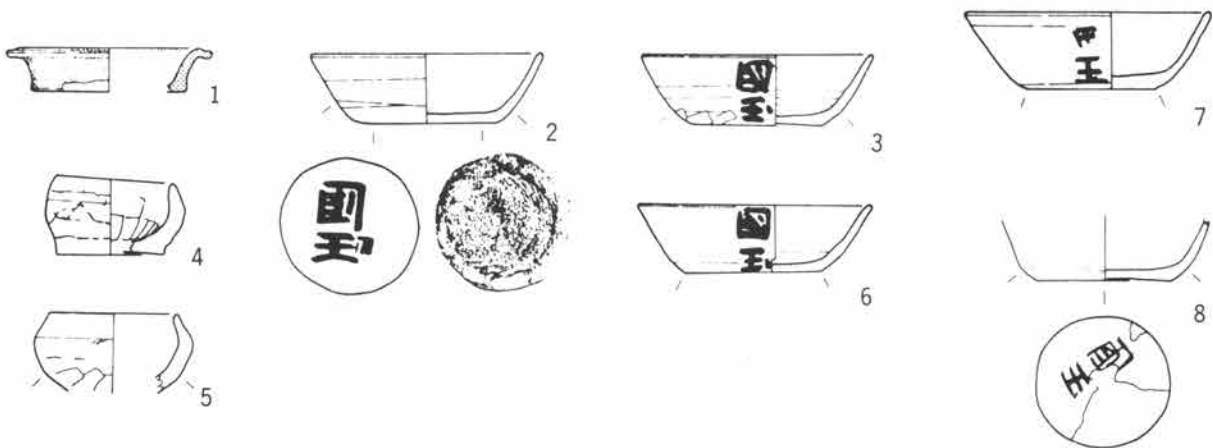
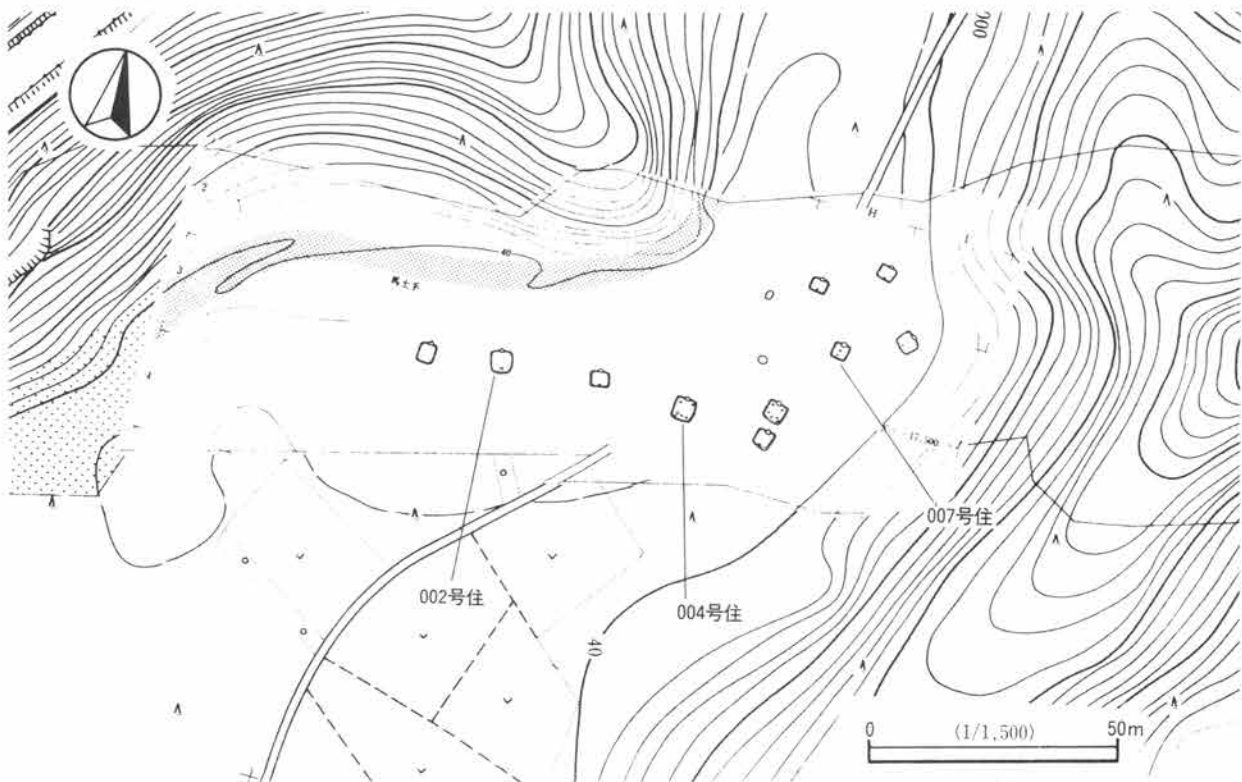
第87図 多田日向遺跡遺構配置図

II 主要遺跡概要

185 東野遺跡

佐原市本矢作字東野40-2他

小野川支流の香西川上流の支谷に面した台地端部に位置している。8世紀第4四半期から9世紀前半の  
 竪穴住居跡が10軒発見された。調査区中央の004号竪穴住居跡(1~6)の南西隅覆土上層から二彩火舎が  
 出土した。住居跡廃絶後の廃棄に伴うものである。また同一住居跡の北東隅覆土上層からも一括して廃棄  
 された土師器坏などが出土した。この一括資料の中には墨書土器「国玉」が9点と手捏2点が含まれてい  
 る。このほか、002号竪穴住居跡(7)のカマド煙道部と、007号竪穴住居跡(8)の床面から墨書土器「国  
 玉」が出土した。二彩火舎のほかには仏教関連遺物は発見されていない。



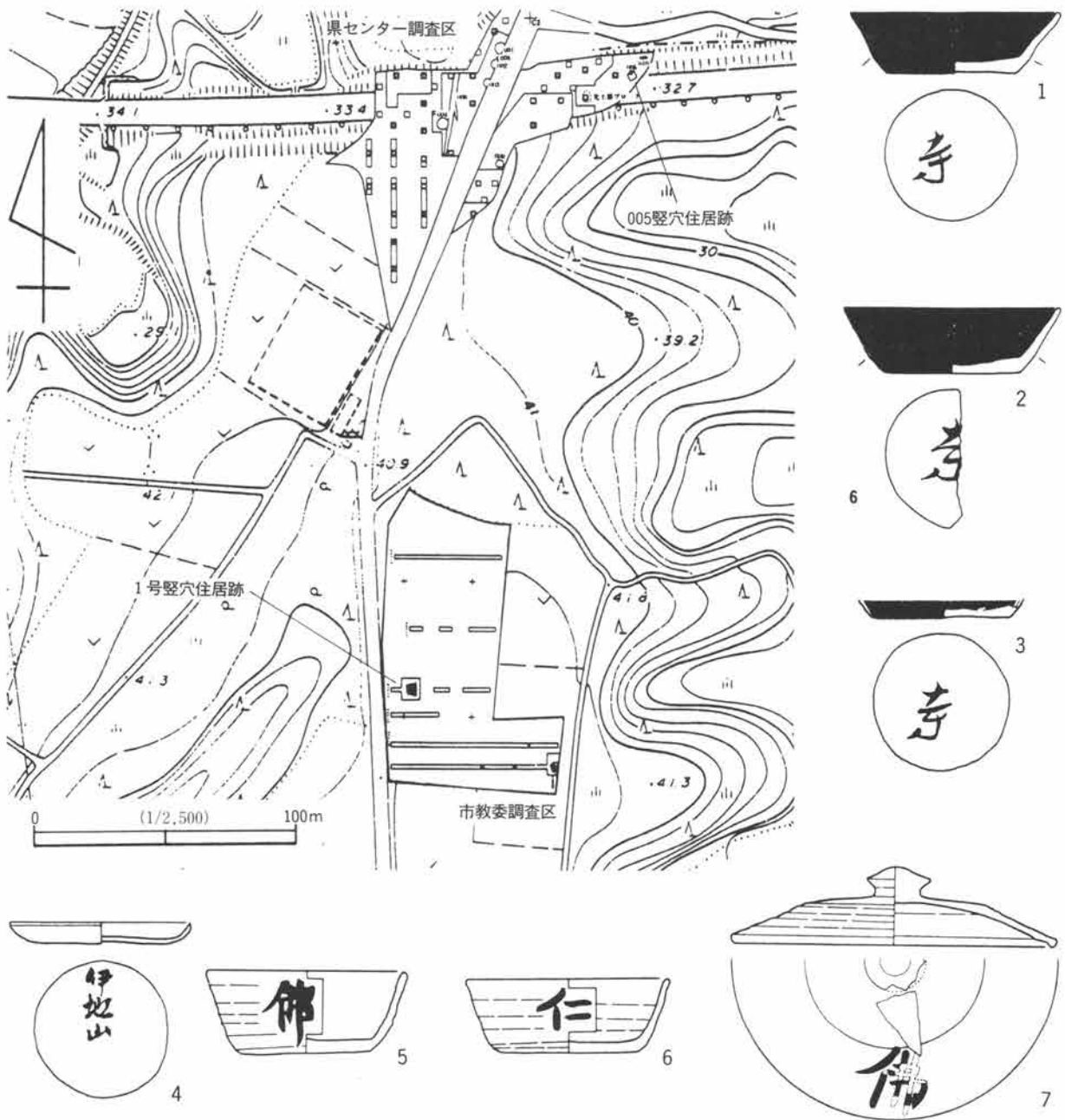
第88図 東野遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)



187 伊地山藤之台遺跡

佐原市伊地山409他

栗山川上流の小支谷に挟まれた尾根状の台地に位置している。北側の県センター調査区からは、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒と8世紀後半の竪穴住居跡1軒が発見された。台地東端の005竪穴住居跡(5~7)から墨書土器「佛」が2点出土した。「佛」は須恵器の坏と蓋に墨書されている。また、台地南側の市教委の調査では西側の谷津に面した1号竪穴住居跡(1、2)とグリッド(3)から、墨書土器「寺」が3点出土した。いずれも赤彩土師器杯の底面に「寺」と墨書されている。部分的な調査であるが、全体的に建物分布は希薄である。なお、調査区のさらに南側の台地上は遺物分布が濃く、集落跡の中心と推測されている。なお、市教委の調査区から現在の同地の地名である「伊地山」と墨書された中世土器が出土している

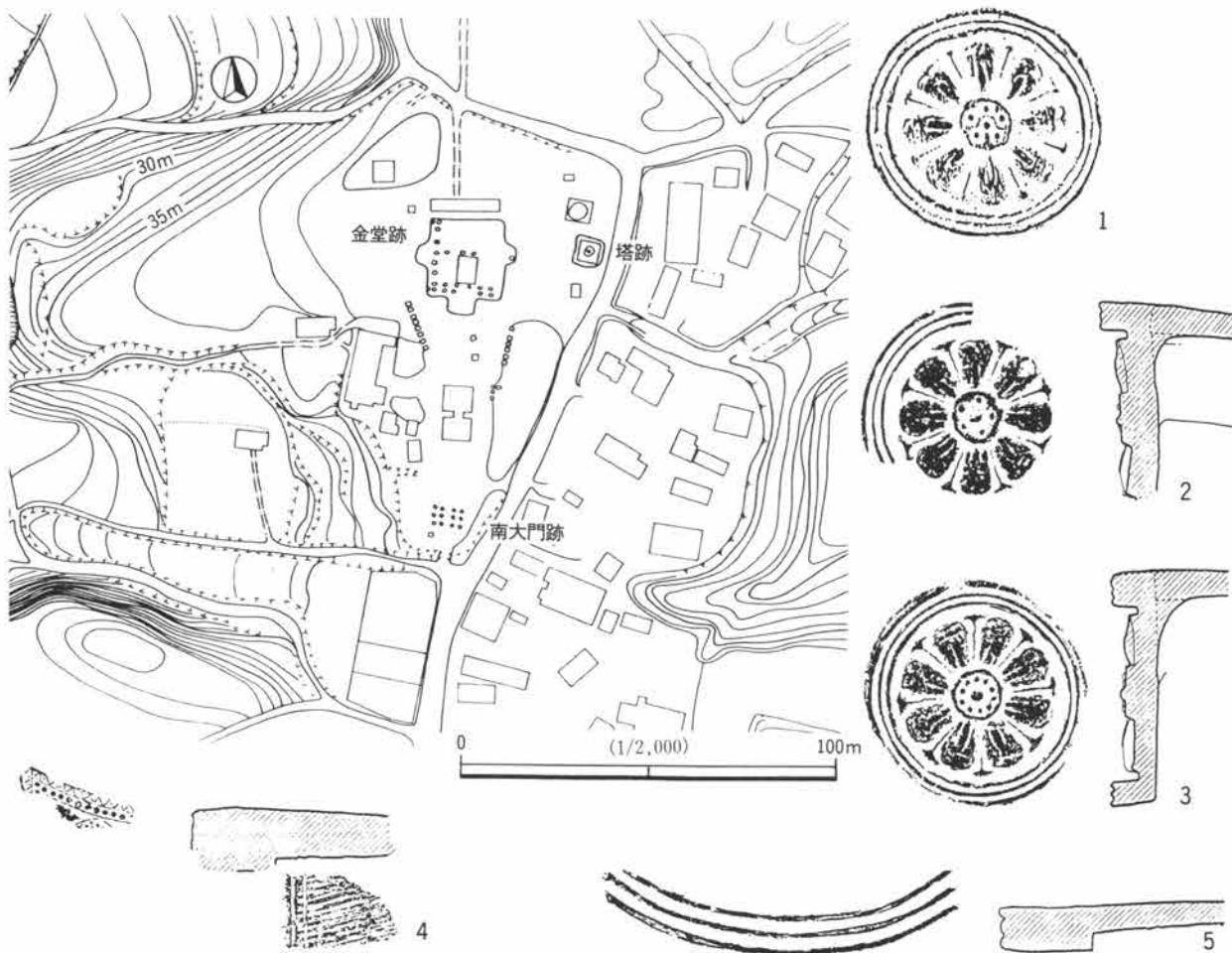


第89図 伊地山藤之台遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

188 龍角寺

印旛郡栄町竜角寺239

利根川流域の平野を望む標高約30mの台地上に位置している。現在の天竺山寂光院龍角寺の本尊金銅薬師如来坐像は奈良前期様式である。龍角寺の南には印旛沼に沿って岩屋古墳をはじめとする竜角寺古墳群と、埴生郡家推定遺跡の大畑遺跡群が所在する。また、龍角寺の北方には創建期瓦を焼成した龍角寺瓦窯跡群と五斗蒔瓦窯跡がある。発掘調査は昭和22年と23年、46年、51年に早稲田大学考古学研究室を中心に実施された。金堂基壇は旧表土上の地業で間口51尺奥行41尺の規模が、塔基壇は現存心礎を中心に一辺36尺の掘込み地業が確認された。このほか塔北側から掘立柱跡や瓦塔が発見された。また金堂の南約60mに門の礎石があり、南大門の可能性が指摘されている。昭和63年には(財)千葉県文化財センターにより周辺の確認調査が実施され、南側の台地上から古墳時代後期～平安時代の集落跡が、寺院の北側から東西溝などが発見された。出土軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦1種である。中房蓮子の彫り直しが認められ3段階の変遷がある。最初の蓮子配置は1+5(1)で、次に中心蓮子を周囲よりも一回り大きく彫り直し(2)、さらに周辺の蓮子を彫り加えて1+10の配置(3)に変更している。軒平瓦は桶巻作りの三重弧文(5)と葡萄唐草文(4)がある。丸瓦は無段式のみで、平瓦は桶巻作りの平行叩き、格子叩き、ナデ調整と凸型台一枚作りの縄叩き等がある。五斗蒔瓦窯跡からは隅切り瓦や面戸瓦も多く出土し、寺院や両窯跡群から多くの文字瓦「朝布」「神布」「赤加」「服止」「加刀利」「水津」「玉作」「皮尔□」なども出土している。

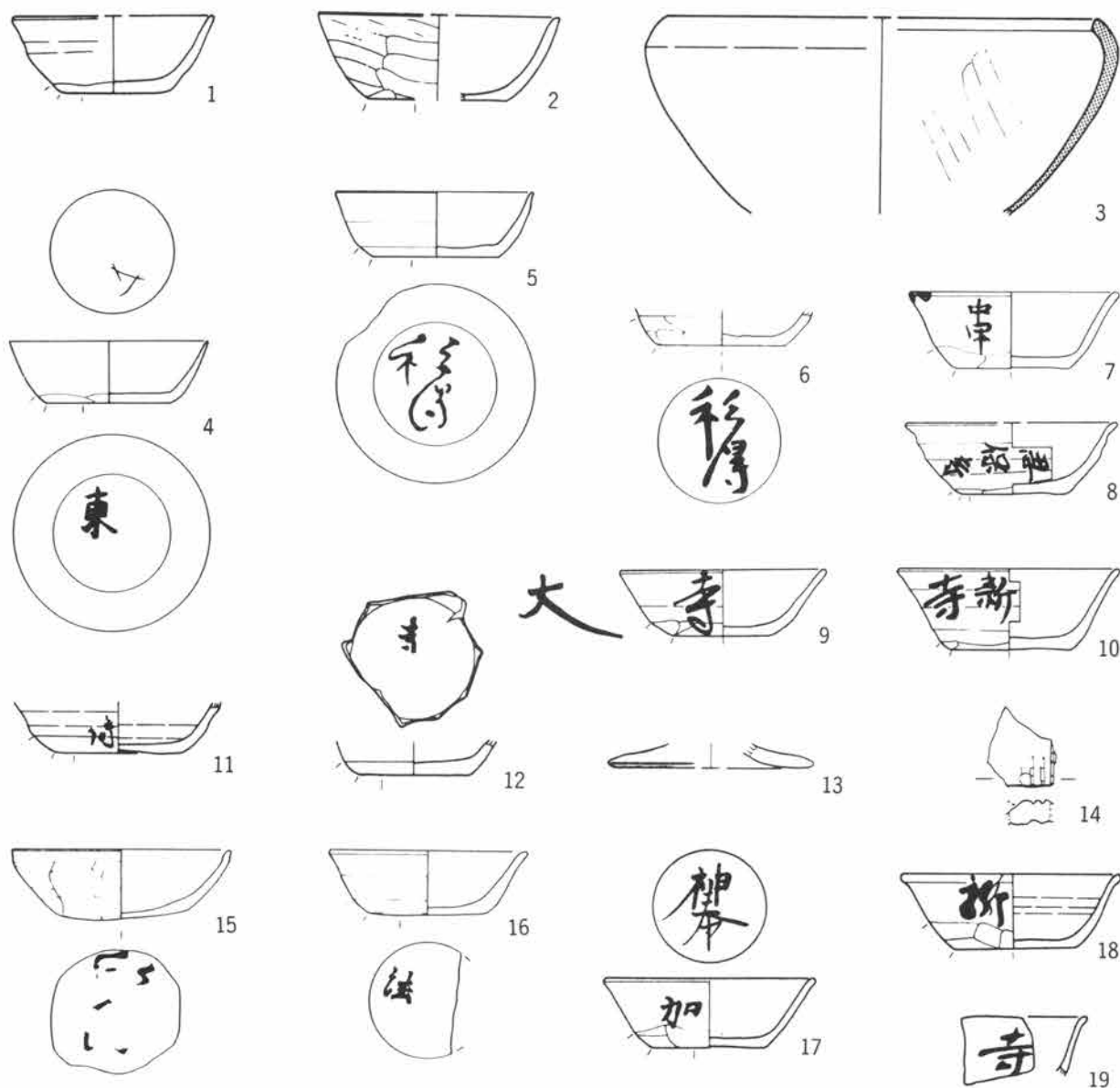


第90図 龍角寺遺構配置図・出土瓦 (1/6)

189 郷部・加良部遺跡 (LOC15)

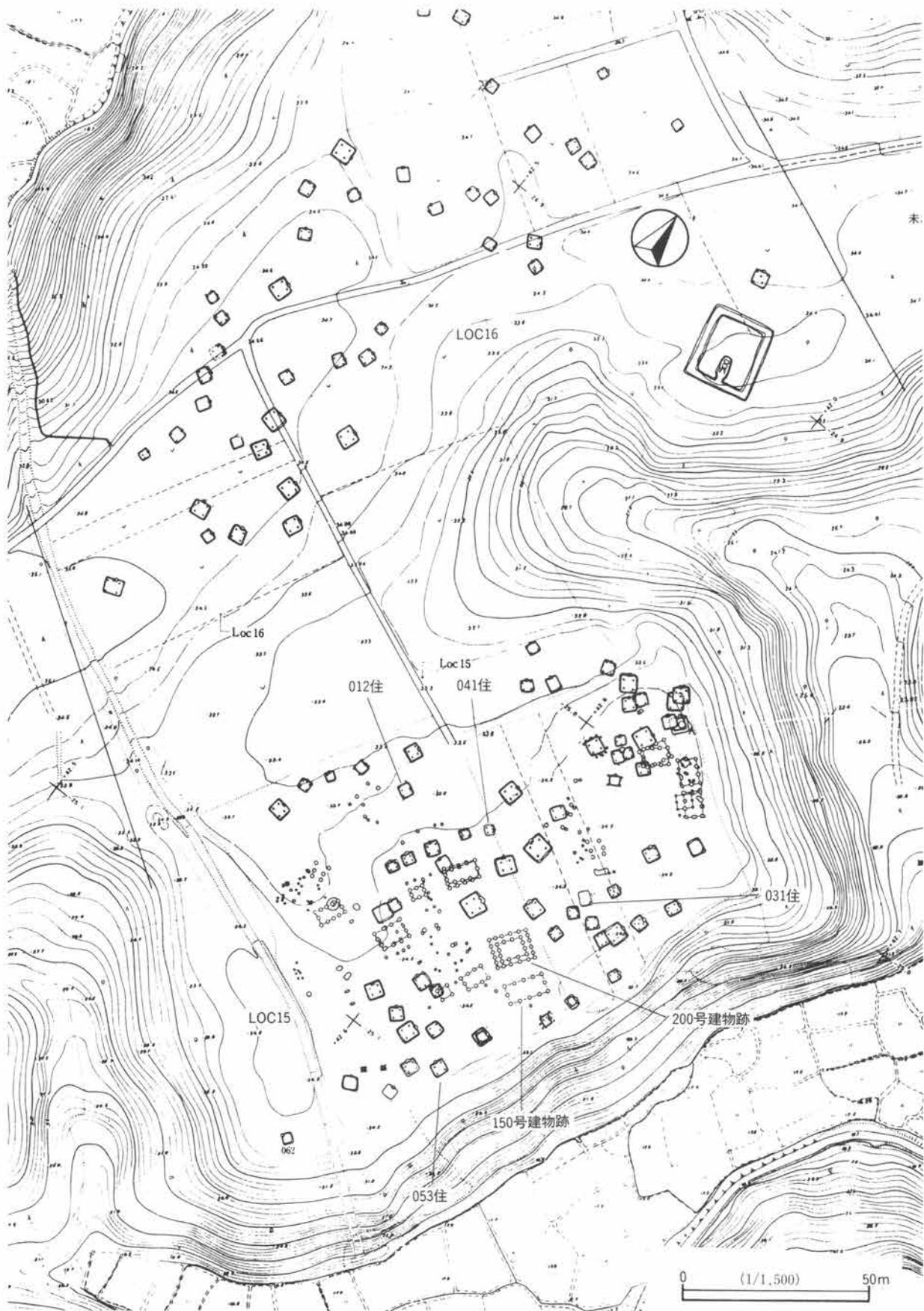
成田市加良部4丁目

根木名川支流の小橋川に注ぐ小支谷に面した台地の南東端に位置する。南北に並ぶ三間四面の200号掘立柱建物跡と4間×2間の150号掘立柱建物跡は、笹生衛氏によって双堂として機能したと指摘されている。そして、これらを取り囲むように位置する竪穴住居跡から仏教関連遺物が多く出土している。012号竪穴住居跡(1~3)から須恵器鉄鉢形土器が、041号竪穴住居跡(11,12)から墨書土器「寺」「得」が、031号竪穴住居跡(6~10)からは墨書土器「忍保寺」「大寺」「新寺」が出土した。また、053号竪穴住居跡(13,14)からは瓦塔の屋蓋部の破片が1点出土した。なお、同一台地の北側に隣接する郷部・堀尾遺跡(Loc16)(15~19)からも墨書土器「寺」「法」「私得」「神奉」などが竪穴住居跡から出土している。



第91図 郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡出土遺物(1/4)

II 主要遺跡概要



第92図 郷部・加良部遺跡、堀尾遺跡遺構配置図

190 山口 (LOC20) 遺跡

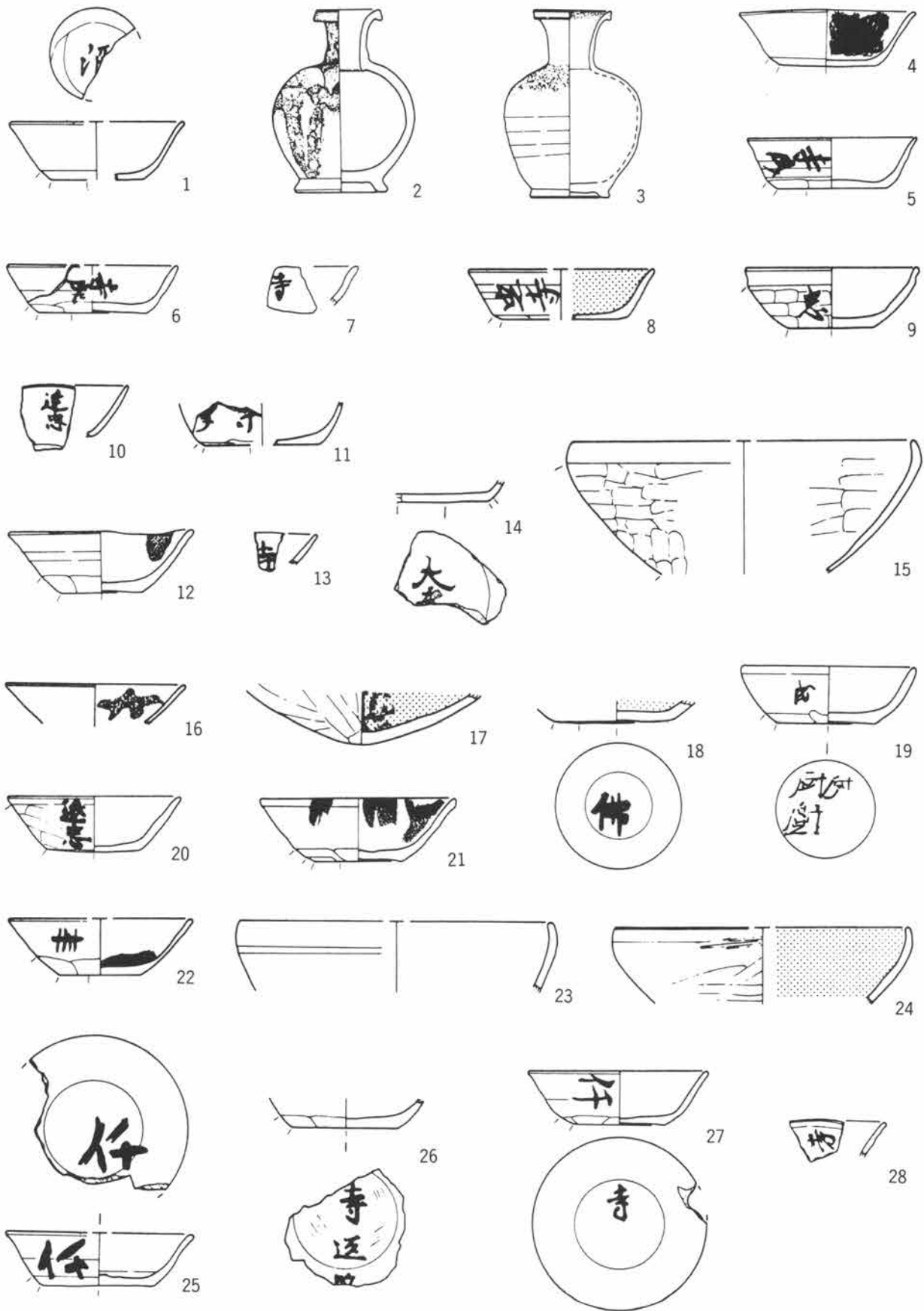
成田市山口字船塚台・石塚・池之台

根木名川支流の小橋川に注ぐ小支谷に挟まれた台地上に位置する。三間四面の掘立柱建物跡が2棟発見され、このほかにも5間×2間の両庇建物跡と7間×2間の側柱建物跡など大規模な掘立柱建物跡が発見された。三間四面の250号建物跡とその南の100号建物跡は、笹生衛氏によって双堂として機能したと指摘されている。

仏教関連遺物は掘立柱建物跡の周囲の竪穴住居跡等から広範囲に出土した。双堂南東の009号竪穴住居跡(5~7)から墨書土器「寺」「寺成」「家」が、012号竪穴住居跡から土師器鉄鉢形土器(15)が出土した。また、双堂の西に位置する013号竪穴住居跡(8~11)から墨書土器「忠寺」「延忠」「忠」が、015号竪穴住居跡から墨書土器「寺」が、016号竪穴住居跡から墨書土器「寺」「成」「代/田」が、017号竪穴住居跡(12~14)から墨書土器「寺」「大□」が、084A号竪穴住居跡から墨書土器「寺返□」「仟/仟」(25,26)と二彩椀の破片が、084B号竪穴住居跡から墨書土器「寺/仟」(27)が、双堂の北側に位置する026号竪穴住居跡(16,17)から内黒土師器鉄鉢形土器が、030号竪穴住居跡(18,19)から墨書土器「佛」「成/厨厨厨」「成」、031号竪穴住居跡から墨書土器「忠」などが出土した。このほか、各竪穴住居跡の多くから灯明皿や転用硯等も多く出土した。また、双堂跡から離れた068(22,23)・074号(24)竪穴住居跡からも土師器鉄鉢形土器などが出土しており、ほぼ台地全面で仏教関連遺物が発見された。



II 主要遺跡概要

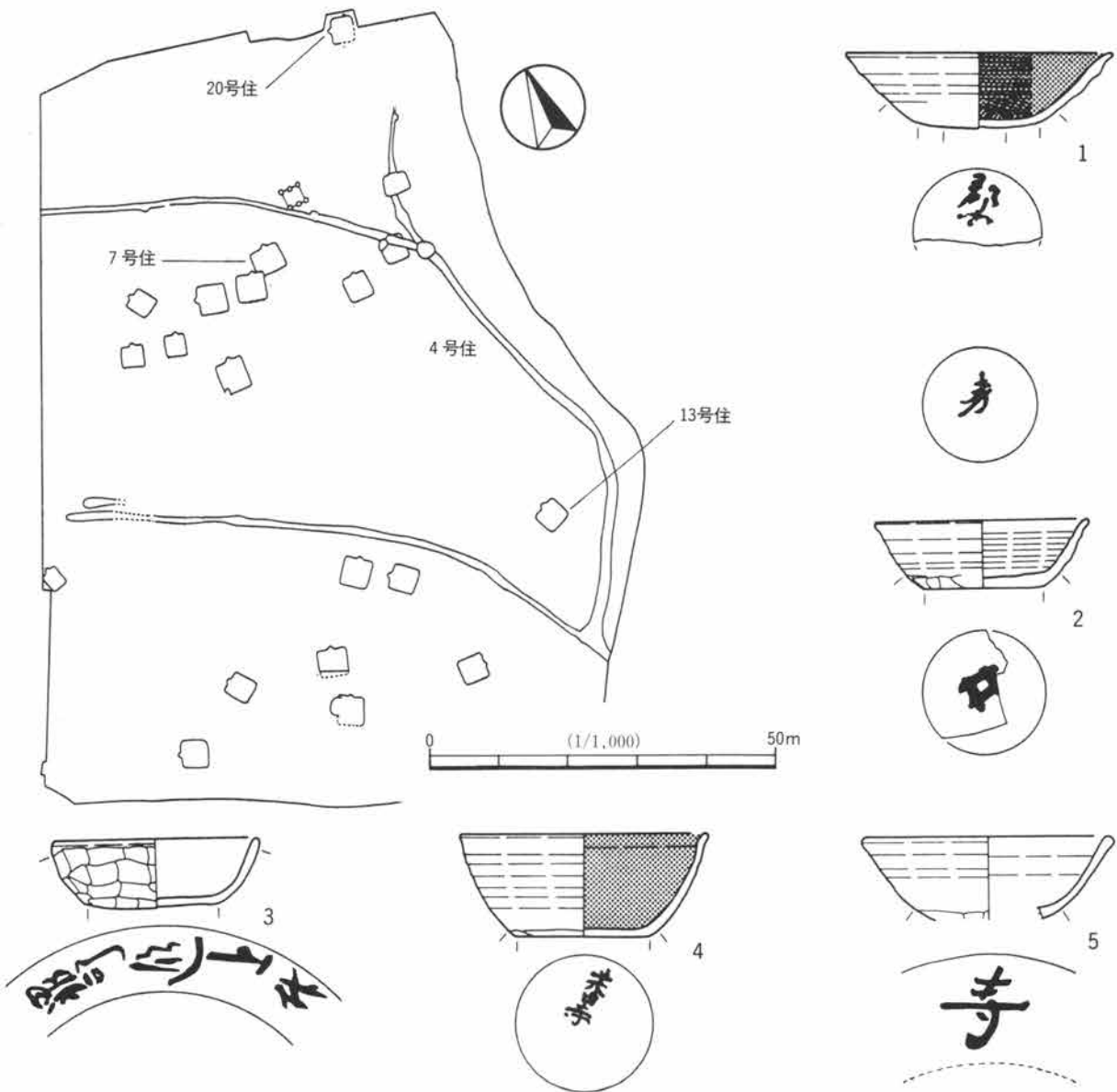


第94図 山口遺跡出土遺物 (1/4)

192 久能高野遺跡

印旛郡富里町久能字高野660-1 他

根木名川の小支谷に面した台地東端に位置する。台地北東端の20号竪穴住居跡から墨書土器「寺」(5)が、台地北側の7号竪穴住居跡(1、2)から墨書土器「□(寺カ)／井」「郡□」が、台地東端の13号竪穴住居跡(3、4)から墨書土器「桑田寺」「郡司進上代」が発見された。墨書土器「□(寺カ)／井」「郡□」はともに7号竪穴住居跡のカマド付近から発見された。墨書土器「桑田寺」は内面黒色処理された土師器杯の底部外面に墨書されている。なお、4号溝は竪穴住居跡群と同時期の道状遺構と報告されている。唯一発見された掘立柱建物跡の1号掘立は2間×1間の桁行2.56m、梁行2.56mの小規模な建物で、4号溝に接して発見されている。

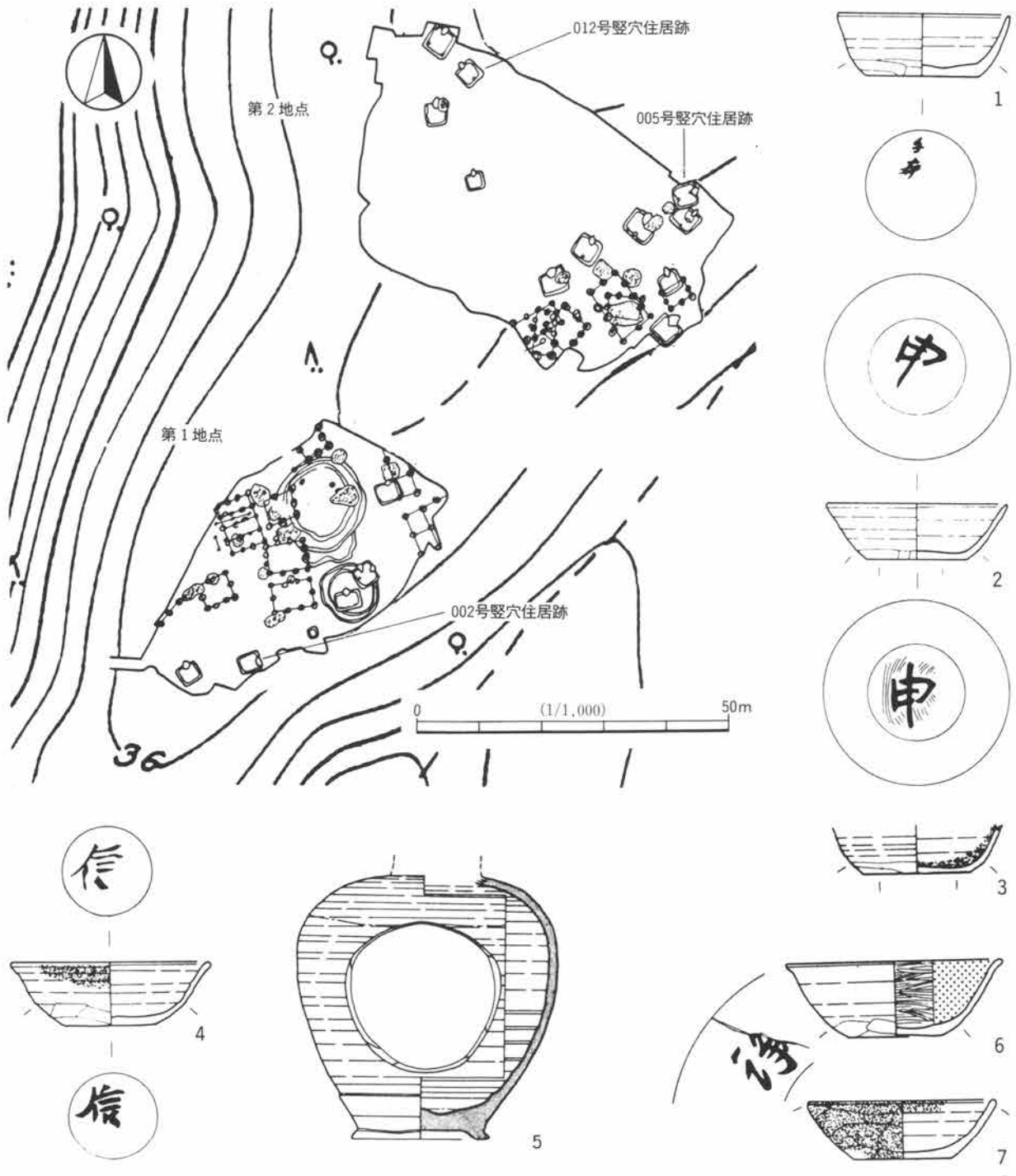


第95図 久能高野遺跡遺構配置図・出土遺物(1/4)

197 野毛平植出遺跡

成田市野毛平字植出1088他

取香川を望む台地先端に位置する。台地先端から南東端を中心に掘立柱建物跡と竪穴住居跡が発見された。台地先端の第1地点002号竪穴住居跡（1～3）から墨書土器「手寺」「申／申」と多くの灯明皿が出土した。第2地点005号竪穴住居跡（4、5）からは胴部に丸く穿孔した灰釉陶器長頸瓶と墨書土器「信／信」が、第2地点012号竪穴住居跡（6、7）から墨書土器「浄」などが出土した。なお、谷津向かいの西150mに位置する野毛平木戸下遺跡の竪穴住居跡からは海獣葡萄鏡が出土している。



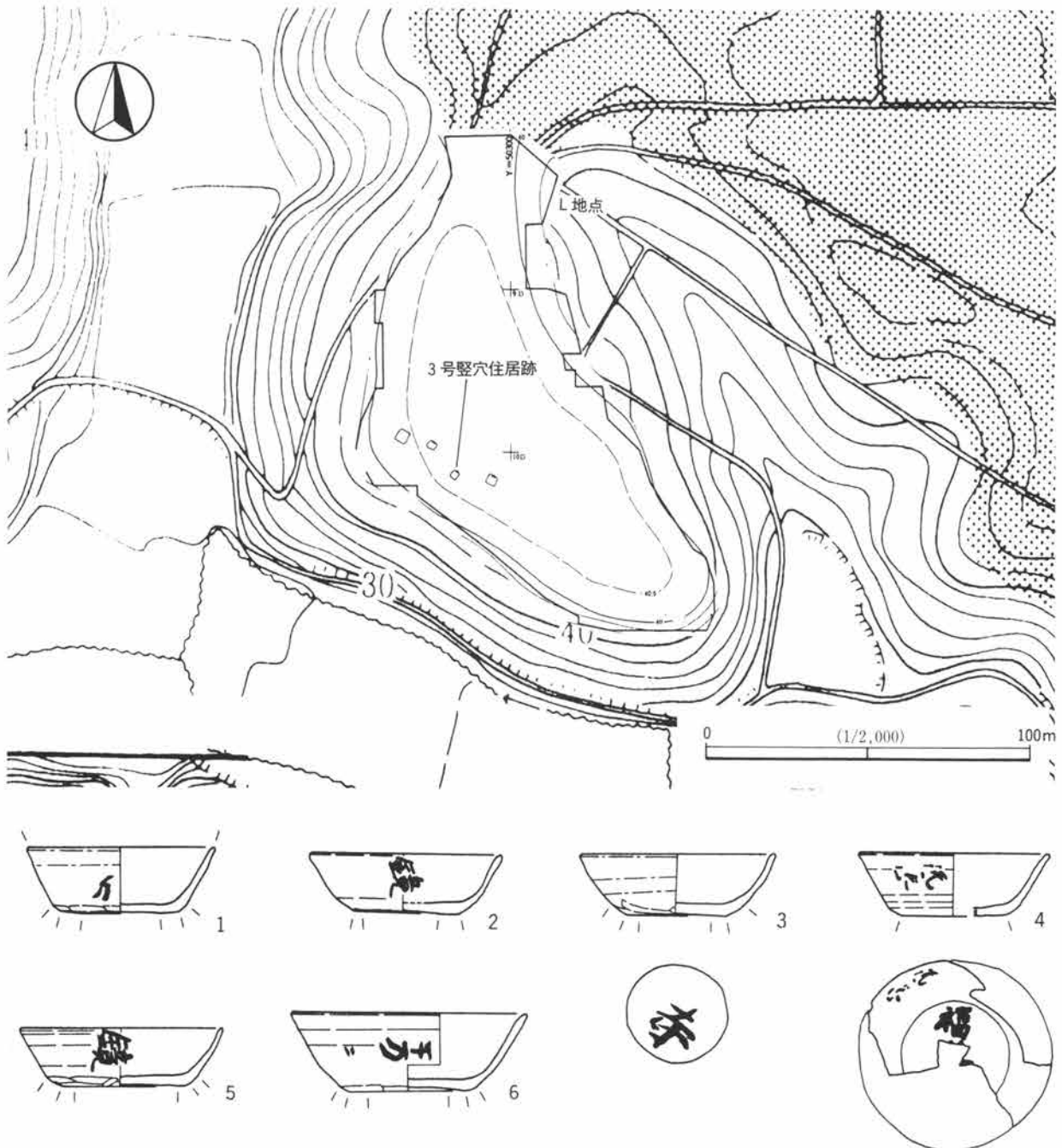
第96図 野毛平植出遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）



198 取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）

成田市取香字和田戸711他

取香川に面した舌状台地のL地点の南端から9世紀第2四半期の竪穴住居跡が4軒発見された。3号竪穴住居跡(3)の床面から墨書土器「寺」が出土した。「寺」はロクロ土師器坏の底部外面に墨書され、灯明皿として使用された痕跡がある。このほかにも灯明皿として使用された墨書土器「鏡」が2号(1、2)・4号(4～6)竪穴住居跡から発見された。なお、多量の砂鉄が1号竪穴住居跡等から発見されている点から、400m離れたJ地点の同時期の精錬炉を伴う製鉄遺構群との関連が想定されている。



第97図 取香和田戸遺跡遺構配置図・出土遺物（1/4）

II 主要遺跡概要

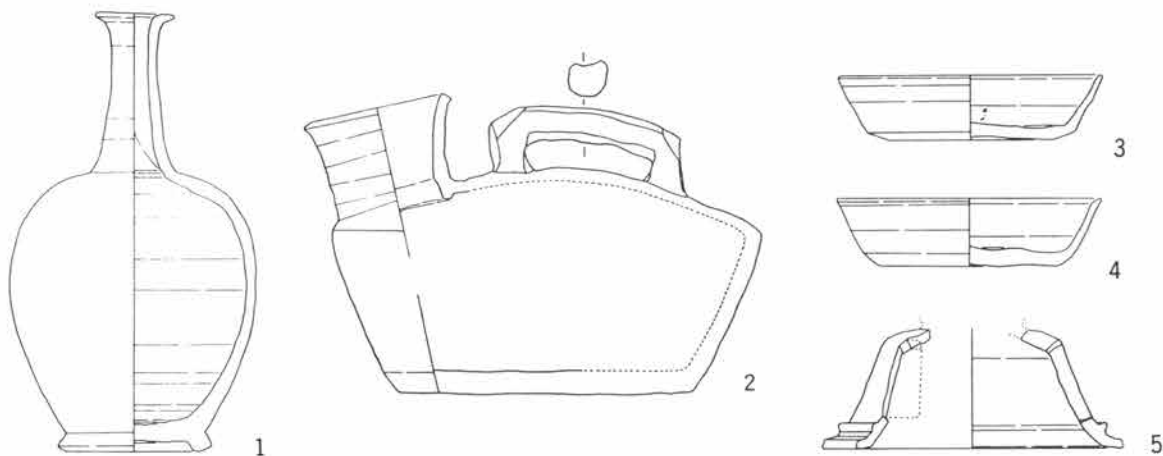
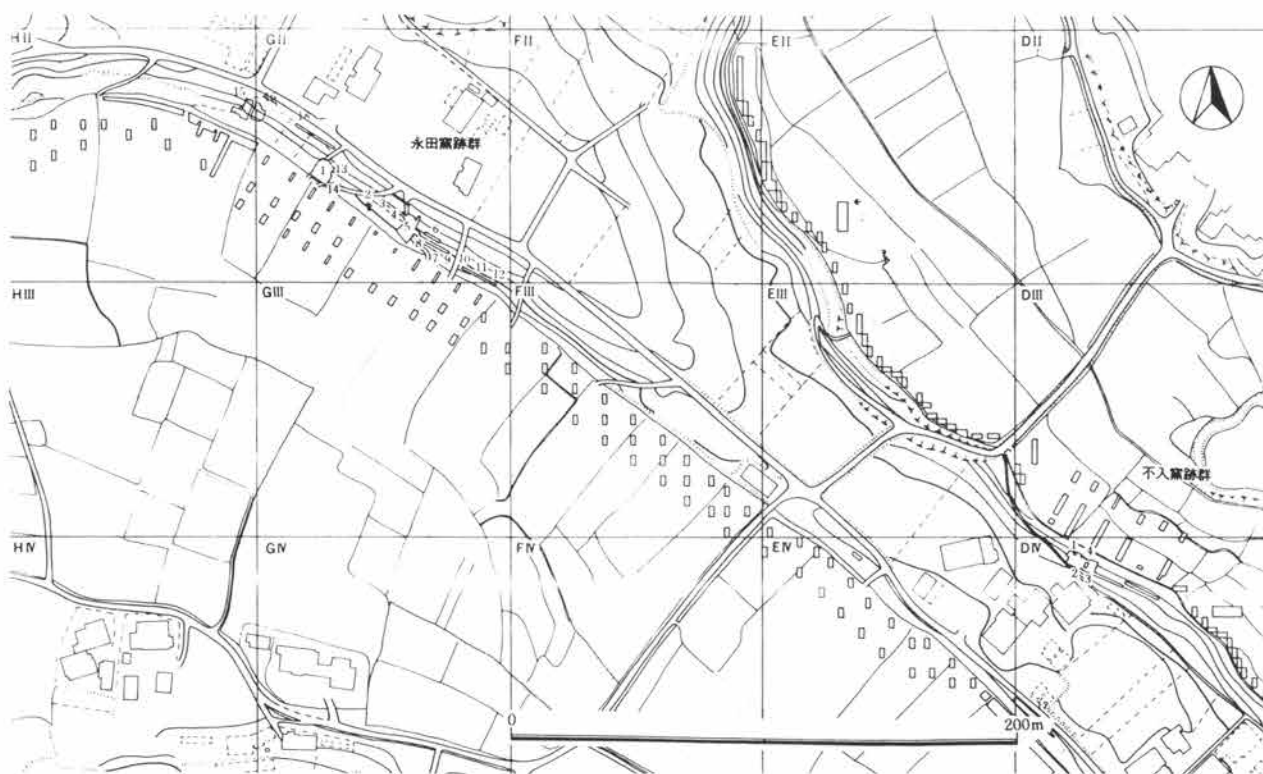
生1 永田・不入窯跡群

市原市久保697-13他

遺跡は養老川の中流域東岸の河岸段丘上に立地し、永田窯跡群は南斜面、不入窯跡群は北斜面に見られる。数次の確認調査が行われた結果、須恵器窖窯が23基することが判明しており、製品は蓋・杯・高台付杯・碗・高台付碗を中心として、盤・高盤・高台付盤・鉢・高台付鉢・長頸壺・水瓶・壺・短頸壺・多口壺・平瓶・甕・甕・円面硯が焼成されている。永田・不入窯跡群は南河原坂窯跡群と異なり、瓦の焼成がなされていないのが特徴的である。

仏教関連遺物は、不入2号・3号窯跡の灰原から水瓶が検出されている。この窯はほかにも円面硯や平瓶など特殊なものを焼成していることから、多分に国分寺等の寺院との関連が考えられている。

なお、不入2号・3号窯の製品は杯の形態・技法から、永田・不入編年のIII期に位置付けられ、8世紀第3四半世紀後半に比定されている。



第98図 永田・不入窯跡群・出土遺物

生9 南河原坂窯跡群

千葉市緑区小食土町1,175-20他

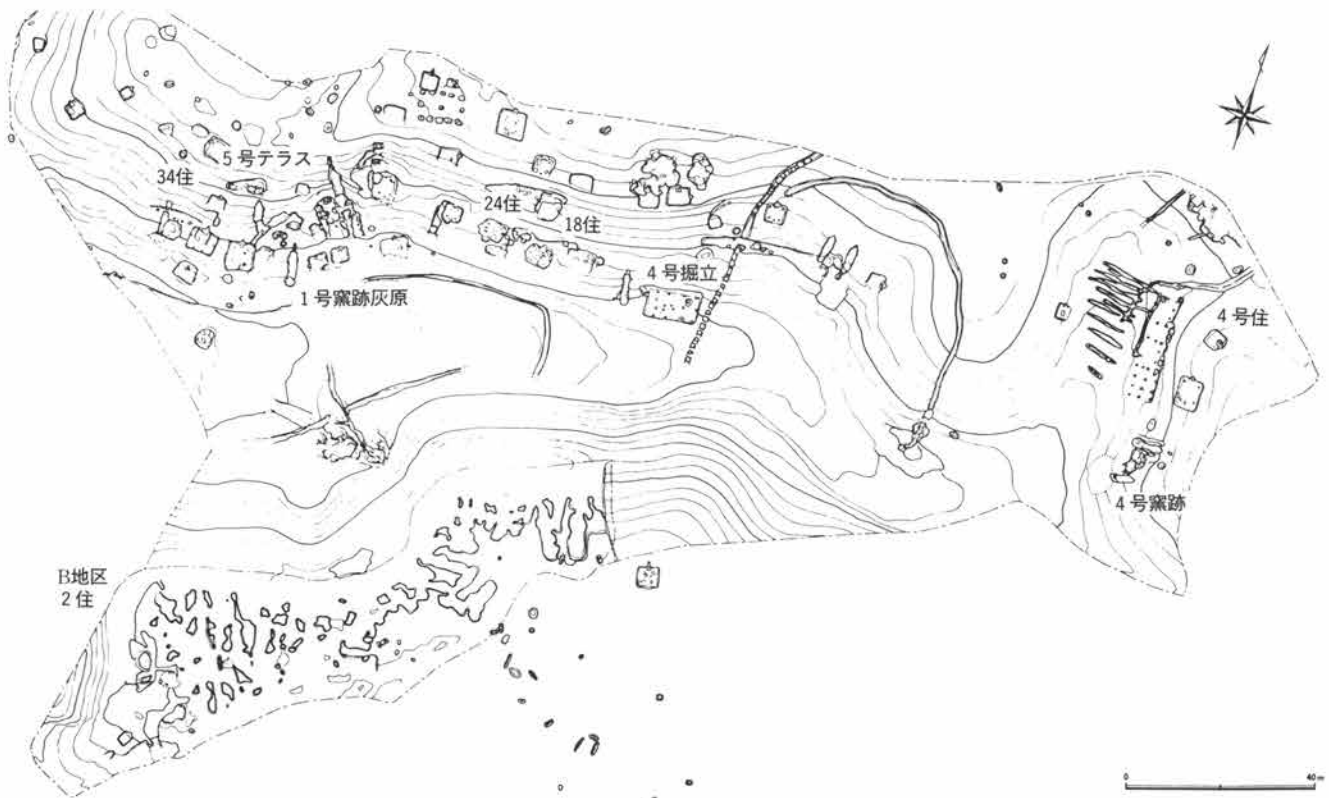
村田川によって開析された支谷の台地及び斜面に立地し、北西から入り込む谷を挟んで対峙する。

ロストル式平窯6基、窖窯13基、土師器の円形窯や土坑97基、竪穴住居跡43軒(工房跡6軒)、掘立柱建物跡5棟、粘土採掘坑4か所以上が検出された。

須恵器と瓦と土師器が、同一地域で併存して焼成されていたと考えられ、千葉県窯業生産を考える上でも重要な遺跡と言える。

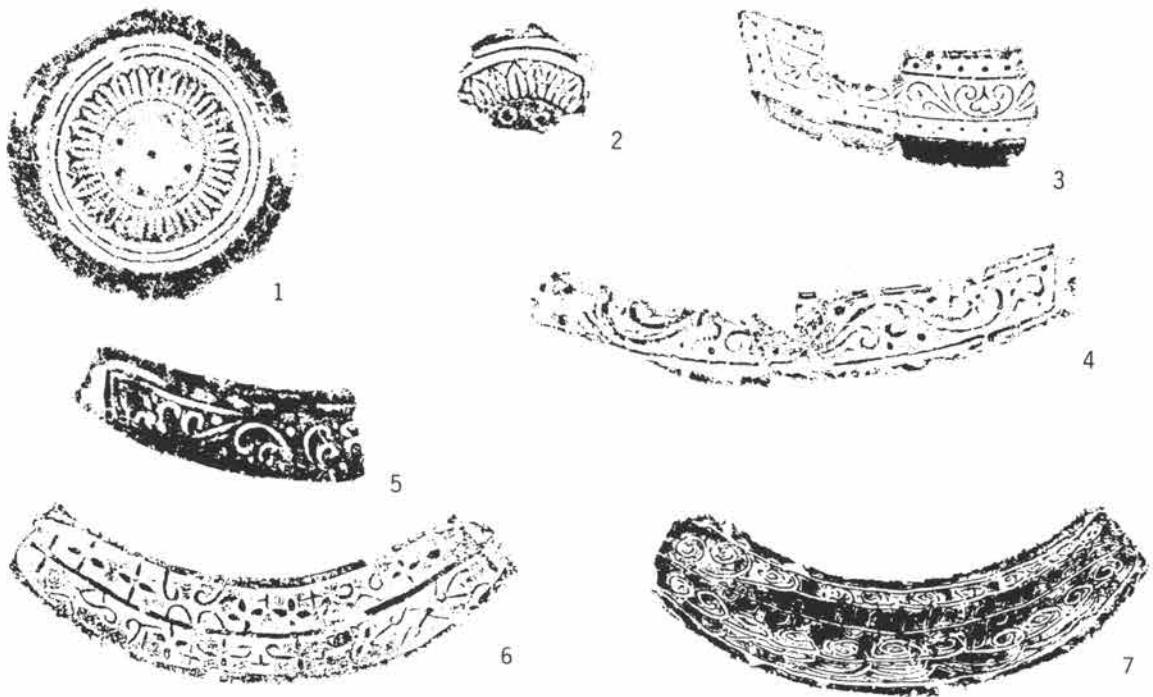
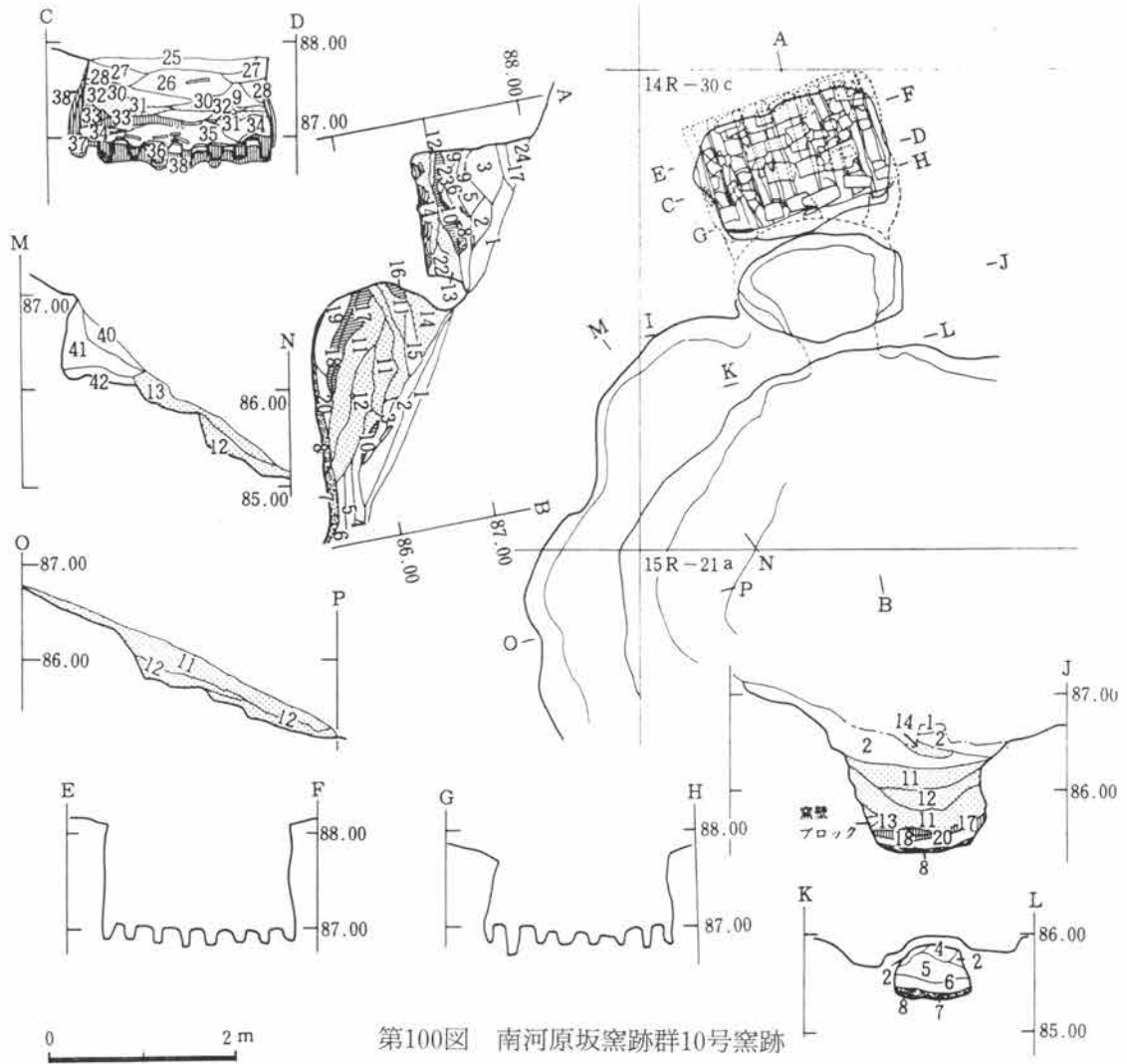
須恵器と瓦の焼成はどちらが先であるかは判然としないが、恐らく同時期の可能性が高く、土師器については両者よりも生産が遅れるものと考えられる。須恵器については、杯と甕を主体とし、蓋・高台付杯・高台付椀・双耳杯・皿・高台付皿・高台付盤・長頸壺・水瓶・風字硯・広口壺・甑が生産されている。竪穴住居跡からは鉄鉢形土器・香炉蓋・三足盤が出土しているが、これらについても本遺跡の製品である可能性が高い。仏教関連の遺物は、1号窯跡灰原から高台付香炉、4号窯跡から香炉蓋、4号竪穴住居跡から高台付香炉、18号・24号竪穴住居跡から香炉蓋、34号竪穴住居跡から高台付香炉、4号掘立柱建物跡から水瓶、5号テラスからは鉄鉢形土器、B地区2号竪穴住居跡から鉄鉢形土器及び「堺寺」の墨書土器が検出されているが、仏教関連の遺構については認められない。

瓦は多量に焼成されており、文様瓦も軒丸瓦2種、軒平瓦5種が出土している。軒丸瓦は素縁二十四弁蓮華文で、内外区を二重の界線で区画し、第101図1の花弁先端が内側の界線と離れているものと、2の接しているものが見られる。軒平瓦は、3・4の均整唐草文、5の均整唐草の陰影文、6の特殊な唐草文、7のへら書き文様のものがあるが、1の素縁二十四弁蓮華文軒丸瓦と3の均整唐草文軒平瓦とが上総国分僧寺・尼寺跡から出土している。

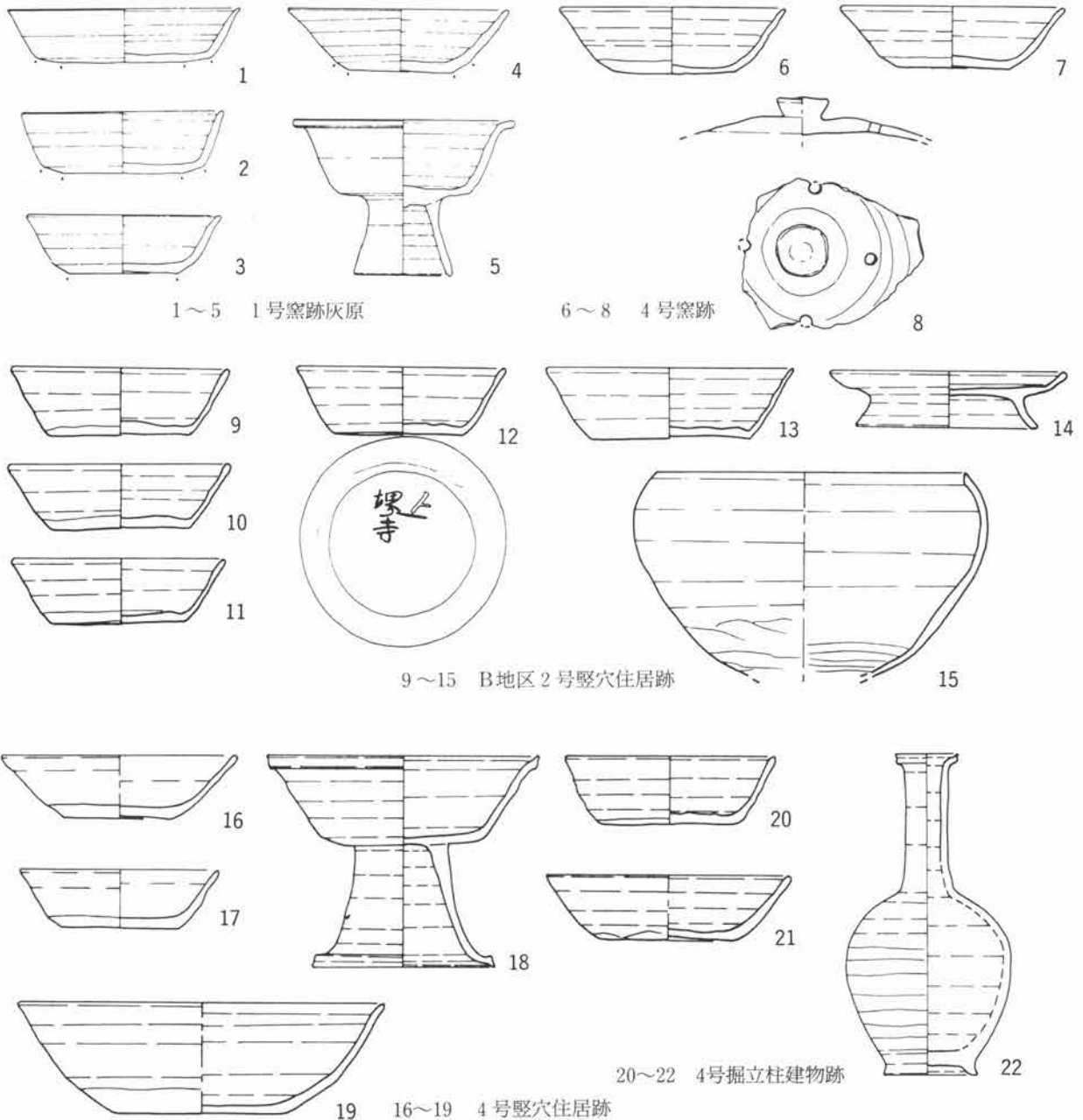


第99図 南河原坂窯跡群全体図

II 主要遺跡概要



第101図 南河原坂窯跡群軒丸瓦・軒平瓦



第102図 南河原坂窯跡出土土器

当時の最新技術であるロストル式の窯を導入していることから考えても、当初は国分寺所用瓦を焼成する窯であったと類推されるが、本遺跡から東に1.1kmの距離にある小食土廃寺跡でも南河原坂窯跡の文様瓦の種類ほとんどが検出されており、国分寺以外の寺院にも供給されていたことが知られる。

南河原坂窯の操業期間は須恵器の年代観から、8世紀第3四半世紀から9世紀前半代までと考えられる。上記の仏教関連遺物も8世紀後半代から出土が認められ、本遺跡の場合は恐らく操業当初から、なんらかの形で仏教集団が強く関与していたものと考えられる。

本遺跡の周辺には小食土廃寺跡や「寺東」「仏」「釈迦寺」「□祥寺」等の墨書土器と庇付建物跡が出土した鐘つき堂遺跡、8世紀前半の瓦が大量に検出された弥三郎第3遺跡等が点在しており、房総地域の中でも仏教関連の遺跡の稠密な地域である。このような地域的背景から当地に瓦窯が営まれた要因と、仏教関連遺物が多い理由をある程度類推することができる。

II 主要遺跡概要

生14 宇津志野窯跡

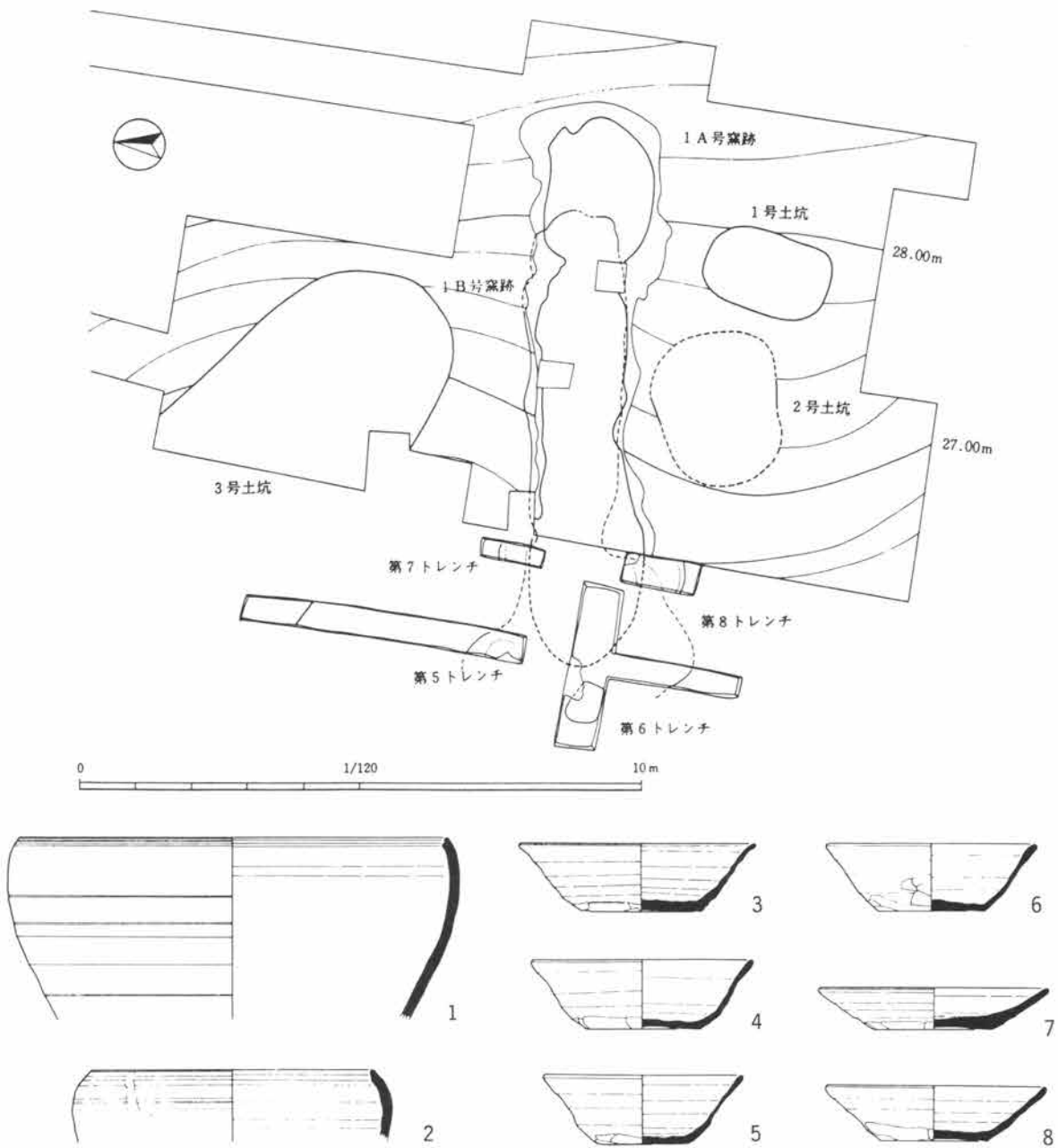
千葉県若葉区更科町10-2

印旛沼に流入する鹿島川の支流によって開析された谷津の東側斜面に位置する。2基の須恵器窯跡と3基の土坑が検出されている。

遺物は須恵器のみであり、甕を主体として、杯・皿・高台付皿・甕・鉢・鉄鉢形土器・短頸壺・羽釜・円面硯・脚部片が検出されている。

鉄鉢形土器は1A号窯跡掘形、1A号窯跡内から出土し、灰原からも小破片ではあるが出土が認められることから、鉄鉢形土器はある程度生産されていたと考えられる。大きさは最大径が26.6cmと18.9cmのものが見られる。

操業の時期については9世紀中葉と想定されている。



第103図 宇津志野窯跡遺構配置図・出土遺物

### III 各 論

#### 1 仏器・瓦塔・墨書土器

##### 1 仏教関連遺物の選定について

仏教関連遺物を考える際に、一番悩んだことはどこまでを関連遺物に含めるかということであった。仏像等はまず間違いのないものであるが、その他のものは大いに選定に苦慮した。今回の関連遺物については、器物としては、浄瓶、香炉及びその蓋、鉄鉢、瓦塔（瓦金堂を含む）を主な遺物とした。ほかに奈良三彩も関連遺物に含める案もあったが、官衙跡からの出土も多く、祭祀遺構からの出土も目立つため、上記の4形態の遺物以外は基本的には含めないことにした（ただし、奈良三彩の托については仏教的な色彩が濃厚なため、例外的に取り扱うことにした）。

また、墨書土器等の出土文字資料にも着目し、「寺」・「佛」等の仏教関連の文字が出土している遺跡についてもこの中に含めることにした。

灯明皿や火打ち金を仏教関連遺物に含めている例も存在するが、灯明皿のみ単独出土の遺跡も多く、これのみを独立して項目として扱うことは不可能に近い上に、仏教関係以外の儀式にも同様に用いられている可能性は否定できず除外した。火打ち金についても「軍防令」<sup>1)</sup>の規定に、兵士のうち50人に1人は火打ち金を携行せよとの条文があるように、これも仏教関連遺物のみであるとは断定できないので、除外した。

なお、仏像、小金銅仏等については、発掘調査で出土した遺物が少なく、表採遺物が多い。今回の遺跡出土の仏教関連遺物と同列に扱うことは困難なので、主たる検討課題とは別に様相を見ていくことにしたい。

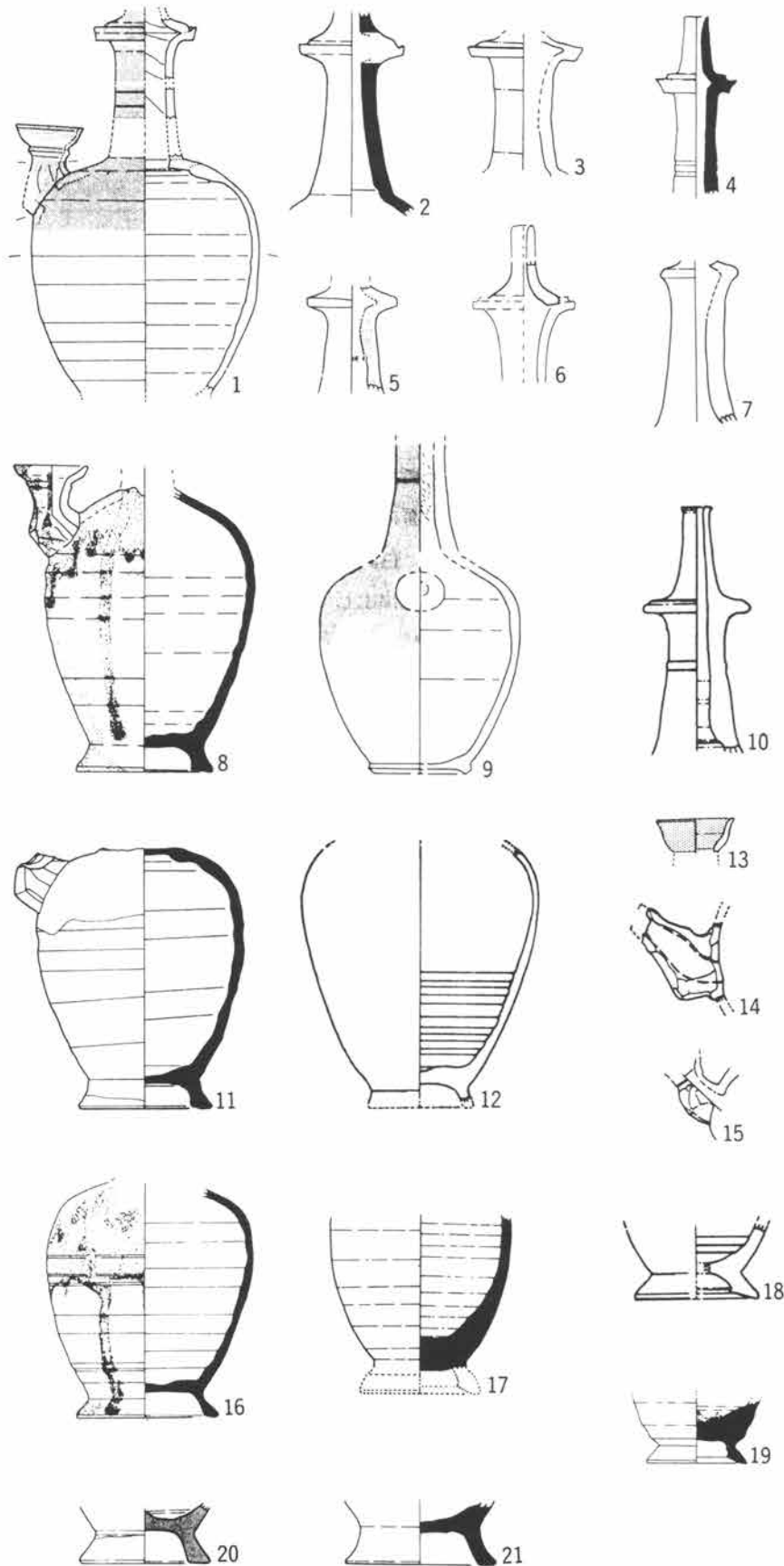
##### 2 遺物

###### 浄瓶・水瓶

浄瓶（仙蓋形水瓶）と水瓶は胴部形態等が類似しており、破片で出土した場合はどちらとも言えないものが多く見受けられることや、用具としては同様な意味をもっていると考えられるので、今回は両者を同一のものとして扱うことにした。両者の用途は、本来は僧具の一つで、飲水等の容器であったが、仏・菩薩に浄水を供える供養のための道具としても用いられるようになったものである。

浄瓶又は水瓶出土の遺跡は27遺跡を数える。27遺跡中、他の仏教遺物・遺構が遺跡内に認められる遺跡は、19遺跡である。そのうち、「寺」の墨書土器が出土している遺跡は11遺跡を数える。

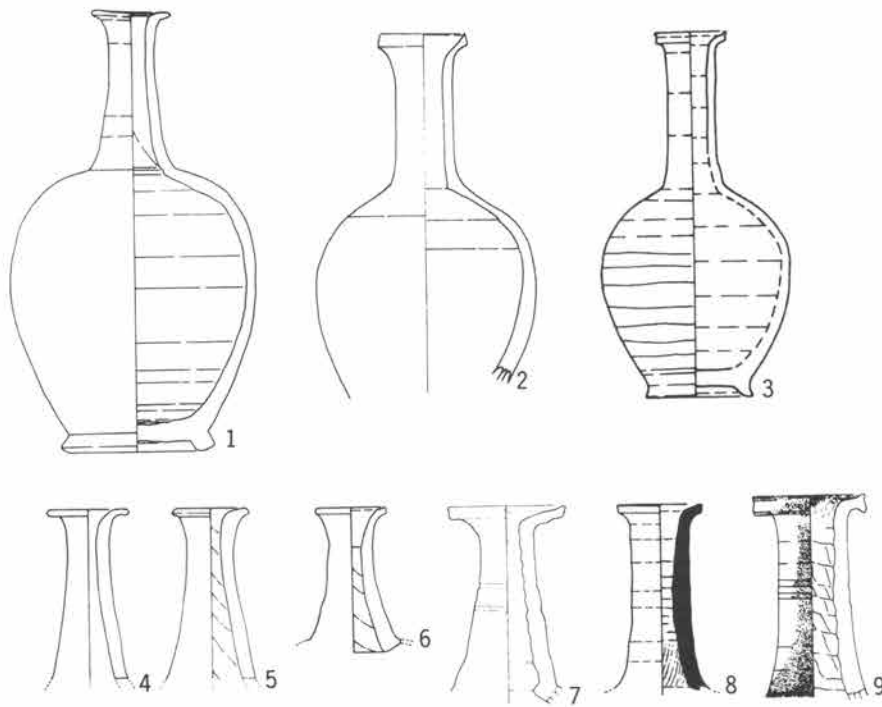
浄瓶については、本県出土の大部分のものが灰釉陶器と考えられ、それらは東海地方等からの搬入品と考えられる。水瓶については、須恵器が多く、永田・不入窯跡群と南河原坂窯跡群からの出土が知られ、本県でも製作されていたことが分かる。房総における浄瓶の出現時期は9世紀中葉である。水瓶についても8世紀第3四半期には存在する。



- 1 根戸城跡
- 2・21 真行寺廃寺跡
- 3 南河原坂第2遺跡
- 4 白幡前遺跡
- 5 郡遺跡No.12地点
- 6 バクチ穴遺跡
- 7 西深井一ノ割遺跡
- 8 砂田中台遺跡
- 9 織幡妙見堂遺跡
- 10・12・14・18 萩ノ原遺跡
- 11 下総国分寺
- 13 上大城遺跡
- 15 後沢第1遺跡
- 16 柳台遺跡
- 17 東郷台遺跡
- 19 永吉台遺跡群遠寺原地区
- 20 下総国分尼寺跡

第104図 浄瓶・水瓶 1





- 1・4～6 永田・不入窯跡群  
 2 磯花遺跡  
 3 南河原坂窯跡群  
 7 椎ノ木遺跡  
 8 東郷台遺跡  
 9 大椎第2遺跡

第105図 浄瓶・水瓶 2

## 香炉

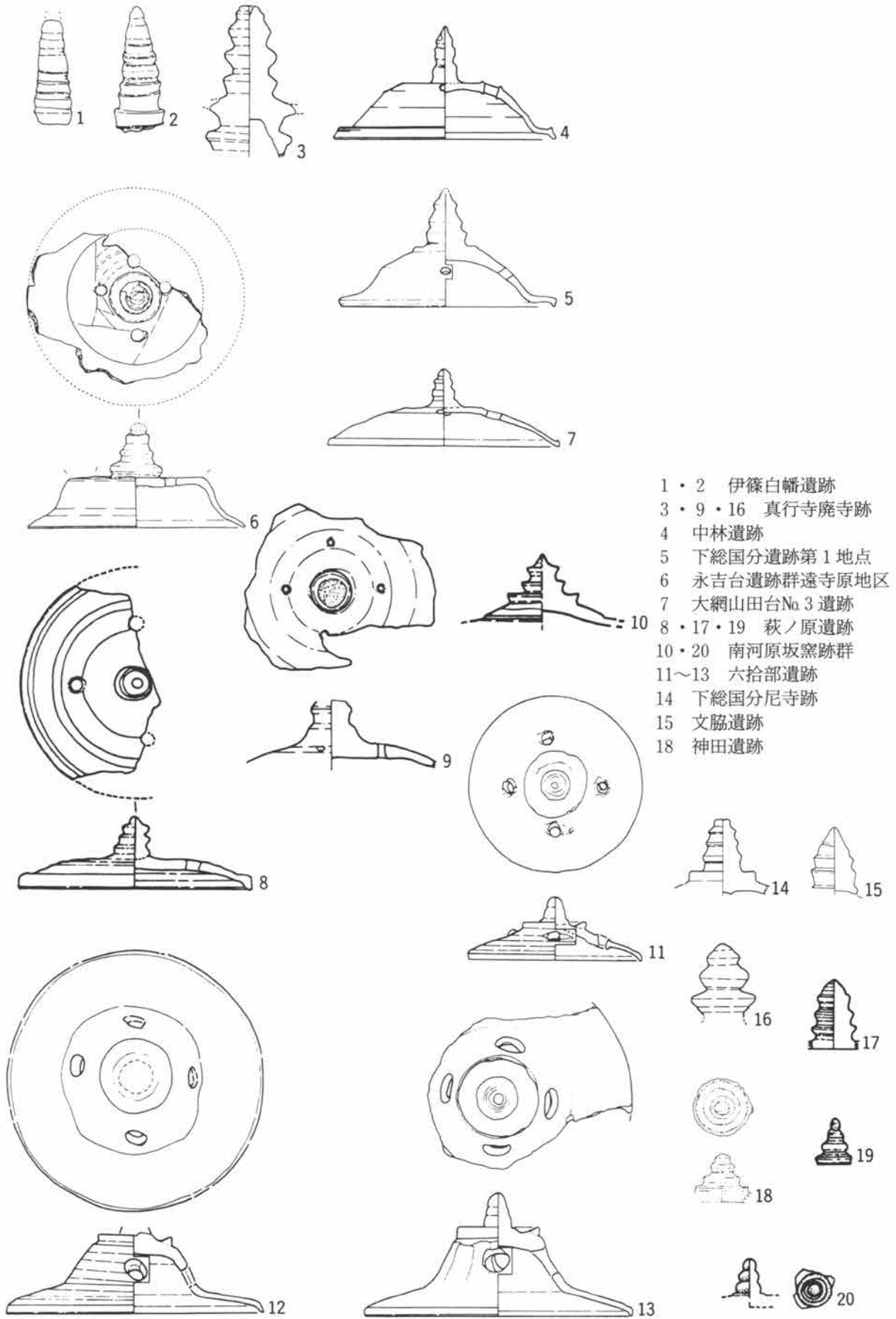
香炉についても、仏教においては重要な役割を担う器物である。すなわち、香を焚いて不浄を払うことはもちろん、仏、菩薩を供養するために用いられている。儀式の必需品とすることができよう。香炉の蓋と考えられる遺物は房総地域では18遺跡から出土している。蓋には4か所の円形の小さな穴が開くものが主流を占めるが、第107図2のように10か所程度の穴を有するものも出土している。

蓋の形態は鈕部が三重・五重・七重の塔を意識した形状（相輪状）のもの、通常の須恵器蓋と同様な円形の鈕を有するもの（第107図4）、方形（第107図1）や双鈕（第107図3）になるものが見られる。鈕が多重のものについては金属器の写しであると考えられ、天井部が須恵器蓋よりも隆起するものが多い。鈕については、三重の相輪状のものが主流を占める。

本体の香炉については、火舎形態になると考えられるものが二彩（第107図7）、奈良三彩（第107図8）で出土しているほかは、明確なものは認められない。しかしながら、杯又は碗形態で脚を有し、口縁端部が大きく外反又は端部が肥厚し平坦になるものが存在する（第107図9～19）。この中で六拾部遺跡出土の香炉蓋（第106図11）と脚付杯形土器（第107図15）は竪穴住居跡から共伴して出土しており、ほぼ同寸であり、合わせになるものと考えられることから、ここではこれらの脚付杯形土器を香炉（脚付香炉）として取り扱うことにしたい。

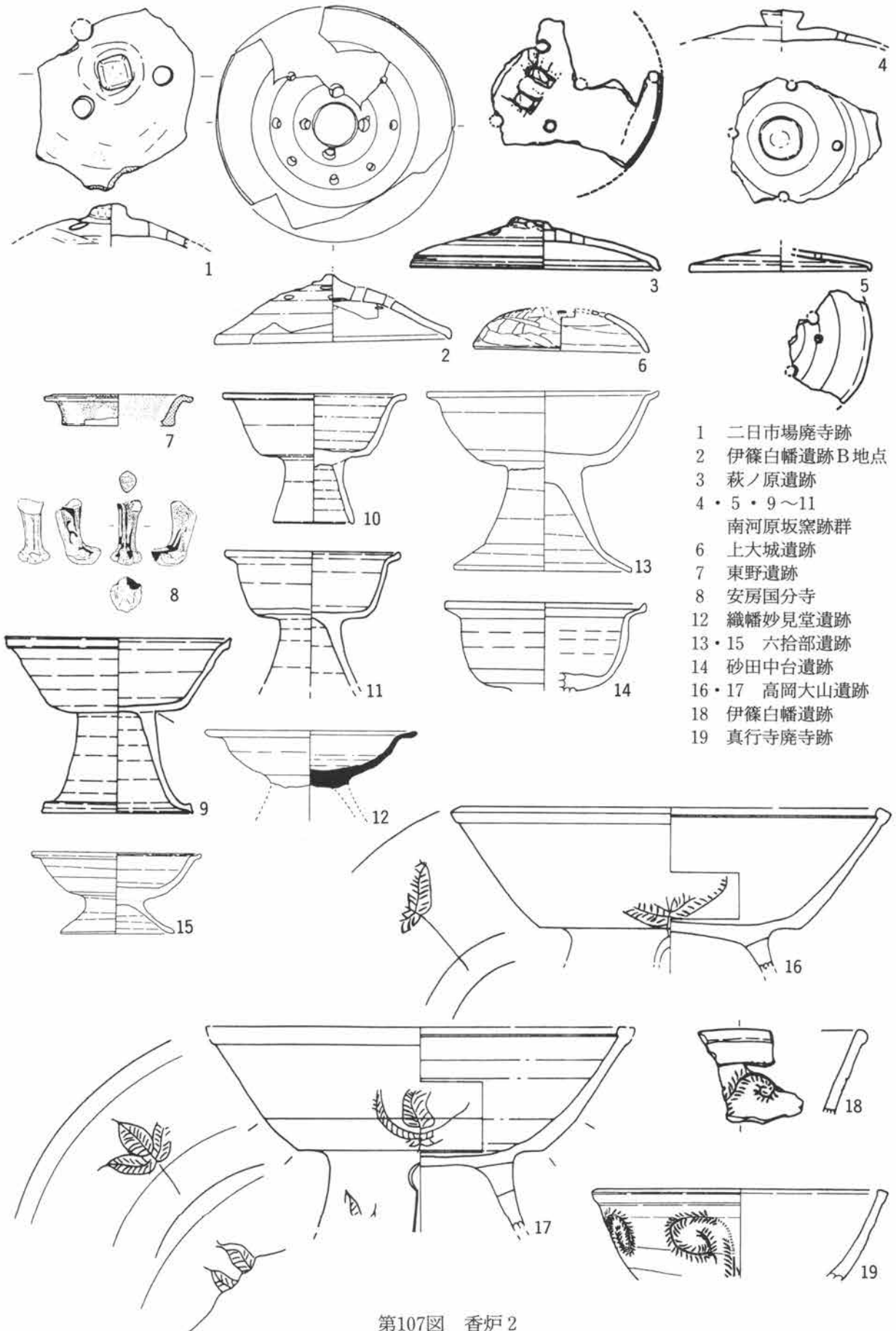
脚付香炉は、その形状から金属器を明確に意識しているものと考えられるが、金属器の香炉ではこれと同形となるものは見られない。しかしながら、前述のように塔形（相輪状）の香炉蓋が本品の上に合わせ

III 各 論



- 1・2 伊篠白幡遺跡
- 3・9・16 真行寺廃寺跡
- 4 中林遺跡
- 5 下総国分遺跡第1地点
- 6 永吉台遺跡群遠寺原地区
- 7 大網山田台No.3遺跡
- 8・17・19 萩ノ原遺跡
- 10・20 南河原坂窯跡群
- 11~13 六拾部遺跡
- 14 下総国分尼寺跡
- 15 文脇遺跡
- 18 神田遺跡

第106図 香炉 1



第107図 香炉 2

るとなると形態としては類似のものが見出せることになる。

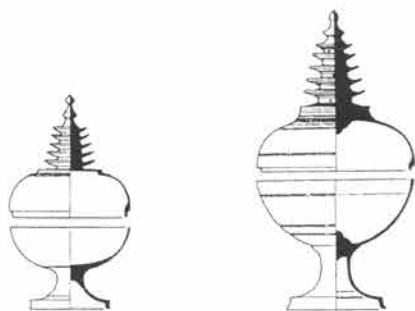
第108図は正倉院の佐波理塔鏡形合子と黄銅塔鏡形合子<sup>2)</sup>である。正倉院には、塔鏡形合子が10合存在するが、その形状は脚台を有し、脚台の上には丸底の鏡が付き、蓋の鈕は塔形（相輪形）を呈するもの（7合）、宝瓶形のもの（2合）、宝珠形を呈するもの（1合）がある。塔形の鈕には、三重・五重・七重の相輪形のものがある。最大径は6.5cm～18.1cmまでのものがあり、大型と小型品に分かれる。これらについては、香合であり、香を納める蓋付の容器であるとされる。実際に正倉院の赤銅塔鏡の内側からは香沫が検出されていることや国宝の刺繡釈迦如來說法図等<sup>3)</sup>には僧が右手に塔鏡を持ち、左手に柄香炉を持っている様子が表されていること等から、本品が香合であることが確かめられている。

房総地域で検出される上記の脚付香炉の形状は、丸底の椀ではなく、平底の杯もしくは椀の形状を呈するという違いはあるが、塔形の鈕を有する香炉蓋群と組み合わせた場合、この塔鏡形香合とかなりの類似点が認められる。あるいは、この金属器の塔鏡形香合が転じて、脚付香炉及び香炉蓋の祖型になったとは考えられないだろうか。香を入れるものから香を焚く容器へと変容したと考えるのである。また、形態を写すに当たっては、塔鏡のように蓋・身ともに合子形を取らずに通有の須恵器蓋や杯・椀に形状に近いものになったのであろうが、それでも蓋は、第106図4・5・12・13のように天井部が盛り上がる形状を示すものがある。脚付香炉にしても第107図13・14のように底部の立ち上がりに丸味を有するものが存在し、注目される。

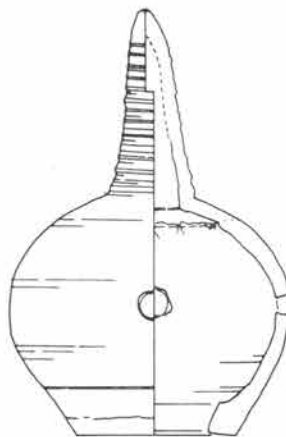
なお、埼玉県鳩山窯跡群柳原遺跡A地区出土の香炉蓋<sup>4)</sup>（第109図）は、塔鏡形香合の鏡形の蓋と非常に類似しており、このことから考えて、少なくとも塔形の鈕を有する香炉蓋に関しては、塔鏡形香合の写しである蓋然性が高いと考えておきたい。

また、この脚付香炉と類似した形態のものは房総地域以外でも出土が見られ、ある程度普及していた可能性も指摘できるのであり、今後とも注視していきたい。

香炉については、その出現時期は現在までのところ9世紀初頭前後であり、他の器物よりも出現時期が遅くなっている。



佐波理合子〔南倉三十一〕 黄銅合子〔南倉三十〕  
第108図 正倉院宝物塔鏡形合子



第109図 鳩山窯跡群柳原遺跡A地区出土遺物

## 鉄鉢形土器

鉄鉢はいわゆる比丘六物の一つで、もともとは仏及び僧・尼が護持する食器であった。そして、僧侶はこれを持して托鉢を行わなければならない必須の用具である。しかし、日本に伝わって来た時には、それだけではなく仏前に供物を盛る供養具としても用いられるようになった。

中国広律伝の四大律の一つである十誦律<sup>9)</sup>では、比丘は鉄鉢・瓦鉢以外は使用してはならないとされ、仏のみ石鉢を用いることができるとされている。また、鉄鉢は常に大切に護持されなければならないとされ、律蔵では厳しい規定が多く見られる。そして鉄鉢が破損した場合でも、5種の綴鉢法により修理して使うようになっていた。

房総地域においては金属器の鉄鉢は、現在までのところ検出されておらず、土器のみの出土である。

鉄鉢形土器（以下、「鉄鉢」と呼称する）の集成については、その形状が、通有の鉢と判別しづらいものも存在し、選別に苦慮した。中には疑わしいものも存在するが、除外する積極的根拠にも乏しいため、一応は集成の中に含めた（第112図9・10、第113図8・10）。

二彩・三彩陶器、須恵器・土師器を含めて、53遺跡から出土が見られる。昭和58年に雨宮龍太郎氏<sup>9)</sup>が鉄鉢を集成され、その時点で8遺跡の出土が確認されているが、わずか14年で6倍の遺跡数に増加したことになる。

鉄鉢の出土は、本格的な基壇を有する寺院の出土例は3遺跡、何らかの堂的な建物を有する遺跡からは11例、仏教遺物のみの遺跡からは39例であり、大部分が仏教関連遺物のみの遺跡であることが分かる。

基壇を有する寺院からの出土例が少ないのは、発掘調査された例が乏しいことや、発掘調査がなされても部分発掘のためであると考えられる。

53遺跡のうち、仏教関連の遺構・遺物が鉄鉢のみの遺跡は19遺跡であり、他の器物や仏教的色彩の強い遺構との共伴例が多いことが分かる。

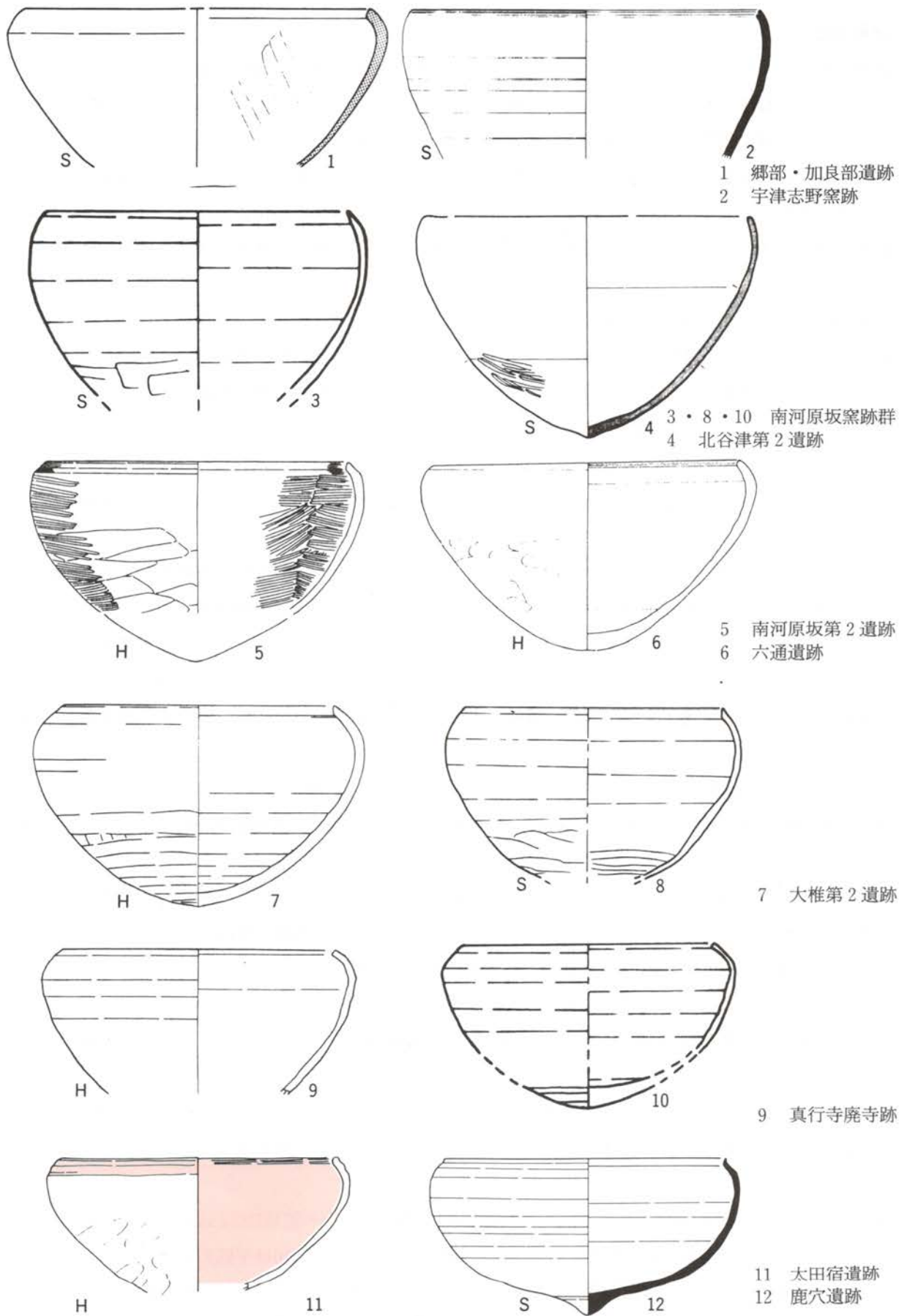
土器の鉄鉢の出現時期については、藤原京跡<sup>7)</sup>から出土したものが最も古いと考えられているが、大半の地域の出現時期は8世紀前半である。関東地域でも埼玉県鳩山窯跡群<sup>8)</sup>で8世紀第2四半期代のものが最古とされている。

千葉県内で時期が判明するもののうち、最も時期が遡ると考えられるものは、押沼第1遺跡K地点出土の須恵器の鉄鉢であり、8世紀第3四半期に比定される。これは常陸地域の製品と考えられる。房総地域の鉄鉢の出現時期は、各地の出現の時期よりも微妙に遅れる結果となった。

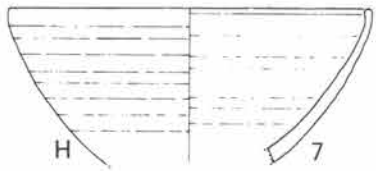
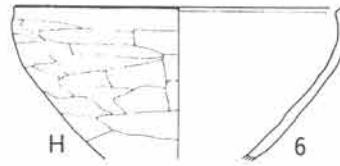
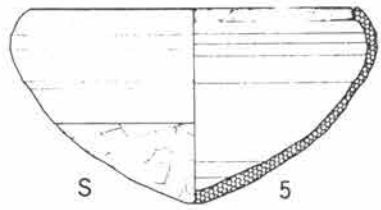
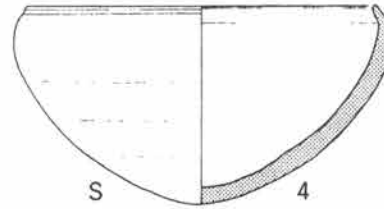
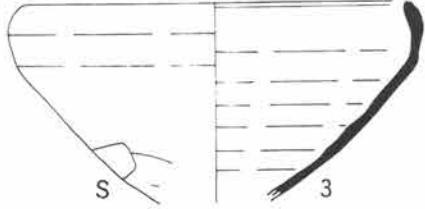
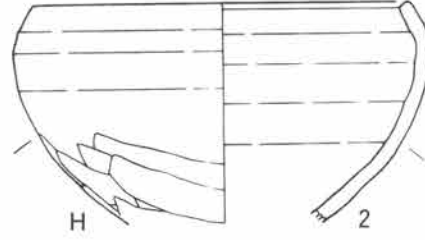
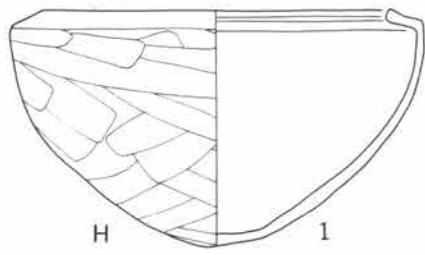
今回、掲載することのできた鉄鉢の実測図は68個体であるが、その中で、大形のもの最大径が32cm前後のものもあるが、多くは20cm前後である。小形のもの15cm前後であり、一見すると杯又は碗と考えられるものも存在する。

このような大きさの差異については用途の差を考えることができるのではないだろうか。律等によると、鉄鉢は容量により上鉢、中鉢、下鉢の3つの大きさに分けられるとされ、興味深いものがある。今後の検討課題であろう。

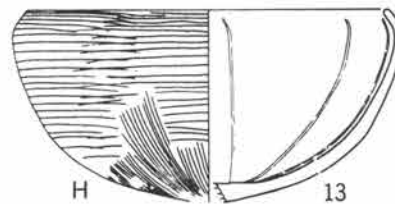
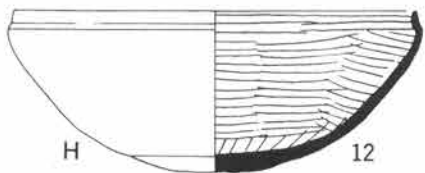
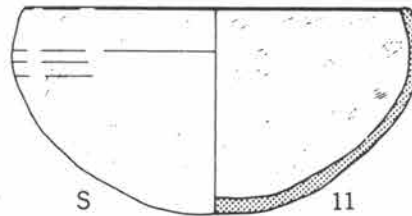
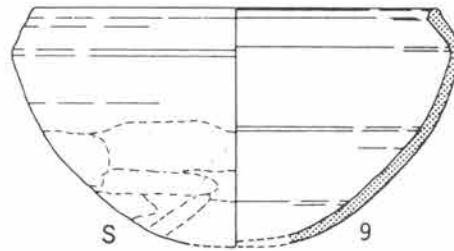
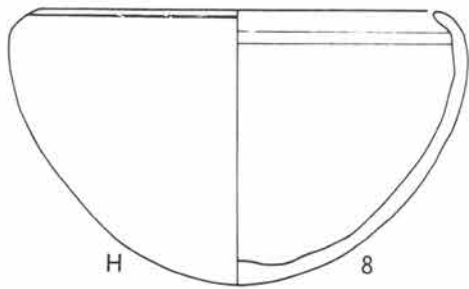
形態については、底部の形態から3形態に分類できる。第110図1～第111図7は底部が尖底のものであり、第111図8～第112図10は丸底形態になるもの、第112図11～第113図10は平底のものである。なお、第113図11～第114図15については底部形態が不明のものである。なお、挿図のそれぞれ遺物の下横に記したローマ字は、Sが須恵器、Hが土師器（ロクロ土師器を含む）を表している。



第110図 鉄鉢形土器 1

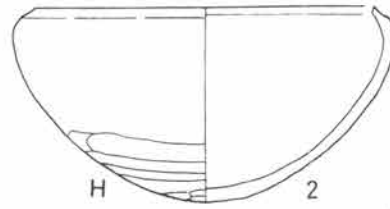
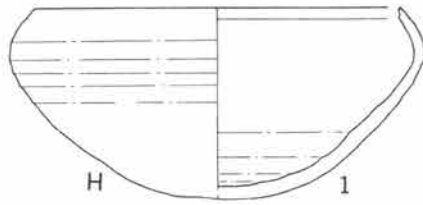


- |              |            |
|--------------|------------|
| 1 新堀遺跡       | 2 飯田町南向野遺跡 |
| 3 砂田中台遺跡     | 4 村上込の内遺跡  |
| 5 六通遺跡       | 6 白幡前遺跡    |
| 7 沢遺跡        | 8 南借当遺跡    |
| 9・11 八田太田台遺跡 |            |
| 10 押沼第1遺跡K地点 |            |
| 12 織幡妙見堂II遺跡 |            |
| 13 小食土廃寺跡    |            |

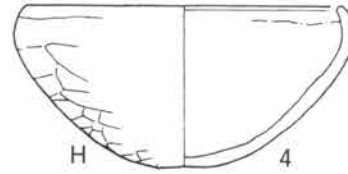
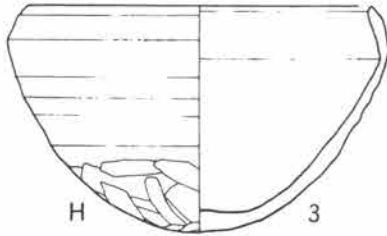


第111図 鉄鉢形土器 2

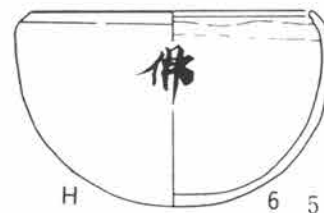
III 各 論



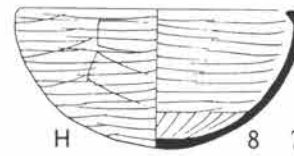
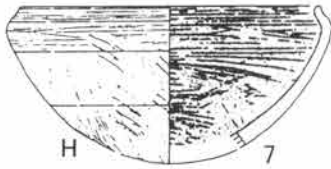
1 大網山田台No.3 遺跡  
2・4 真行寺廃寺跡



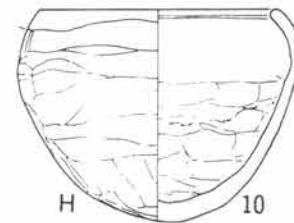
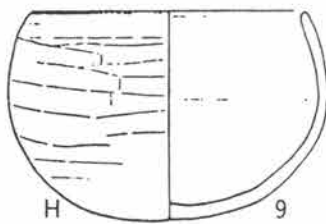
3 庄作遺跡



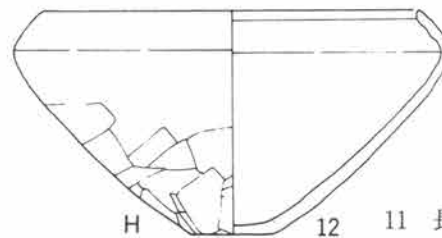
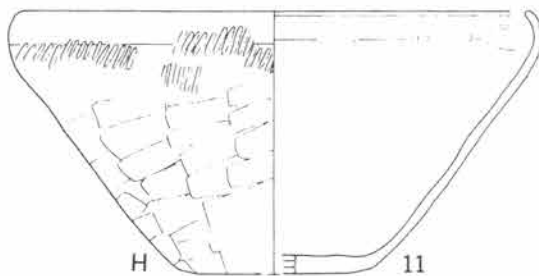
5 大袋山王第2 遺跡  
6 鳴神山遺跡



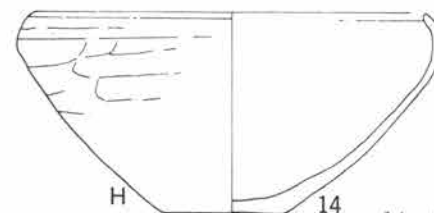
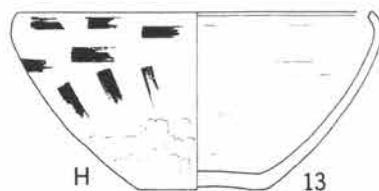
7 六拾部遺跡  
8 織幡妙見堂II 遺跡



9 有吉遺跡  
10 山田水呑遺跡



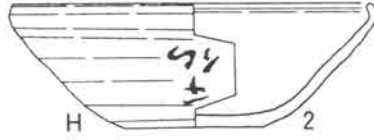
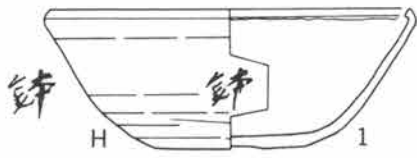
11 長勝寺脇館跡  
12 栗野I 遺跡  
13 馬橋鷺尾余遺跡



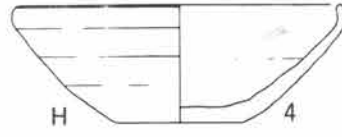
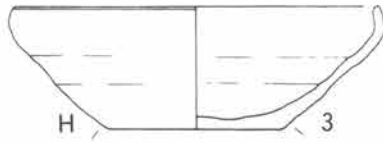
14 林遺跡

第112図 鉄鉢形土器 3





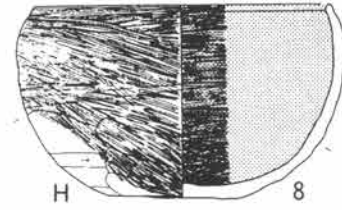
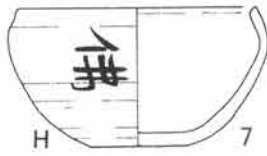
1・2 角田台遺跡  
3～5 中林遺跡



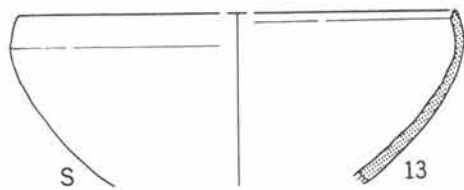
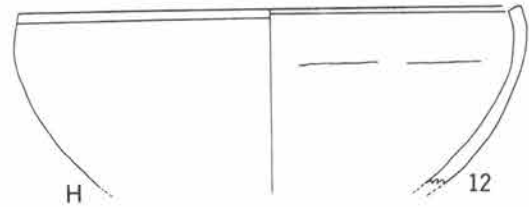
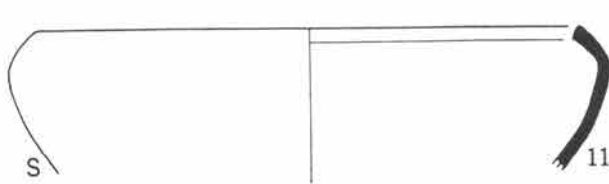
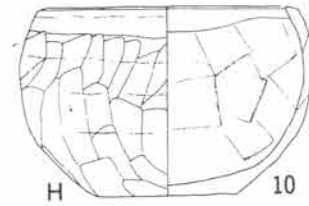
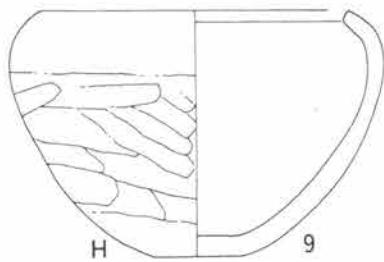
6 織幡妙見堂II遺跡  
7 白幡前遺跡



8・10 永吉台遺跡群遠寺原地区  
9 柳台遺跡



11 真行寺廃寺跡  
12 芳賀輪遺跡  
13 中台遺跡  
14 山口遺跡



第113図 鉄鉢形土器 4